

博士論文

青少年の攻撃性に関する心理学的研究  
－ 包括モデルの構築 －

東北大学大学院文学研究科人間科学専攻

川端 壮康

## 目次

### 序

#### 第1章 攻撃性とは何か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

##### 1 青少年の攻撃性

- (1) 青少年の犯罪・非行の現状
- (2) 青少年の犯罪・非行減少の原因
- (3) 青少年のいじめ
- (4) 青少年のメンタルヘルス
- (5) 青少年の攻撃性：多様な顕現様相
- (6) 青少年の攻撃性の問題の変化と有効な対策について
- (7) 本論文の目的

##### 2 攻撃性研究の歴史

- (1) 内的衝動説
- (2) 情動発散説
- (3) 社会的機能説
- (4) 本論文における立場

##### 3 攻撃性の分類

- (1) 攻撃性のタイプ分け
- (2) 反応的攻撃性と能動的攻撃性

#### 第2章 攻撃性の SIP モデル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

##### 1 攻撃性の SIP モデルの歴史

- (1) 代表的な攻撃性の統合モデル
- (2) 攻撃性の SIP モデルの提示
- (3) 改訂 SIP モデルの提示
- (4) SIP モデルの実証的研究
- (5) 感情変数を組み込んだ新たな SIP モデルの構築

##### 2 SIP モデルのさらなる拡張の必要性

- (1) 感情 SIP モデルの問題点

(2) 能動的攻撃性の本質	
(3) 意図的行動の理論と SIP モデル	
(4) 意図的行動の理論の概観	
(5) 意図的行動の理論の攻撃行動への適用とその検討	
(6) SIP への導入という観点からの意図的行動のモデルの検討	
(7) 新たなモデルの提示と実証的な検討	
第 3 章 反応的攻撃性の検討	4 4
1 一般青少年における反応的攻撃：研究 1	
2 非行少年における反応的攻撃：研究 2	
第 4 章 能動的攻撃性の検討	5 7
1 一般青少年における能動的攻撃性：研究 3	
第 5 章 総合的考察	6 5
1 研究の目的と課題	
2 研究成果	
(1) 反応的攻撃性における検討	
(2) 能動的攻撃性における検討	
(3) 研究成果のまとめ	
3 研究の限界と今後の課題	
(1) 能動的攻撃性における願望変数と他変数との交互作用について	
(2) 本研究では扱わなかった他のモデル内変数の検討について	
(3) 攻撃性がメンタルヘルスの問題を引き起こすメカニズムのより詳細な検討について	
(4) 攻撃性に関わる青少年の問題への統合 SIP モデルに基づく介入法の開発について	
引用文献	7 6
謝辞	

## 序

人間の攻撃性は、国家間の戦争から個人の諍いまで、古来、人間社会の大きな問題となってきた。そのため、問題解決のために様々な試みがなされ、また多くの学者や思想家がこれに言及してきた。心理学においても同様であり、その誕生以来、攻撃性は重要な研究対象とされ、これまで多様な理論やモデルが提示されてきている。

攻撃性が大きな社会的問題となっているのは、現代においても同様である。攻撃性の具体的な現れとしては、暴力的な犯罪や非行が典型的であるが、近年、多くの先進国では、青少年の従来型の犯罪・非行が減少しており、少なくとも青少年においては、攻撃性に関する問題は改善されているかのように見える。ところが、実際には、これに替わって、インターネット上の攻撃行動が増加し、さらに自殺やうつ病などメンタルヘルスの問題も拡大しつつあるなど、別の形での不適応が立ち現れるようになっている。そして、一見攻撃性とは関係がないように見えるものであっても、青少年の不適応の多くには、攻撃性が関与していることを示す複数の知見が得られているのである。

これらの問題に対して、社会を挙げて熱心な対策が講じられているにもかかわらず、十分な効果を上げることができていない理由の一つとして、取られている対策が、いずれも対症療法的なものにとどまっていることが挙げられる。青少年が示す適応上の問題の多くに攻撃性が影響を与えているのだとすれば、根治的な対策のためには、目の前に現れた問題への対処と並んで、背後にある攻撃性を扱うことが必要となろう。しかし、現在までの取り組みは、その時々現象する問題を扱うにとどまっておき、そのことは、一つの問題が改善されると、別の形の新たな問題が発生するという際限がない状態を引き起こしてしまっているように思われる。問題の根治的な解決には、攻撃性が関わる青少年の問題を広く捉えた上で、総合的な対策を策定することが必要である。そして、そのためには、それを可能とする、認知、感情、動機づけを含む包括的な攻撃性の説明モデルが必要となるが、そうしたモデルは現在のところ存在していない。

このような現状からは、攻撃行動に関わる青少年の適応上の問題に有効な対策を生み出すため、まずは、問題を生み出す元となる、個人の攻撃性の生成、表出および抑制のメカニズムを明らかにすることが枢要と考えられる。なぜなら、そうしたメカニ

ズムの理解を踏まえてこそ、攻撃性に関わる問題の抑制および適切な処理のための、一貫性を持った有効な介入の方策が明らかとなるからである。本研究は、個人レベルでの、青少年の攻撃行動に関わる問題への介入の基礎となる、一般的な攻撃行動決定過程のモデルを理論的に提起し、その実証化を試みることを目的としている。

そのため、本研究では、第1章において、攻撃性とは何かを明らかにするため、攻撃性に関わる問題を整理し、研究の歴史を概観した上で、多様な様相を示す攻撃性を分類するためのサブタイプについて検討する。第2章では、攻撃行動の具体的な予測力という点からみて有望な攻撃性理論として SIP モデルを取り上げ、その発展の歴史を概観した上で、現在のモデルに不足している点を明らかにし、本研究で検討する新たな統合 SIP モデルを提示する。そして、第3章において、統合 SIP モデルのうち、反応的攻撃性に関わる部分を、第4章において、能動的攻撃性に関わる部分を検証する。これらを踏まえ、第5章においては、統合 SIP モデルについて、その全般的考察を行い、さらに、今後の課題を述べる。

# 第1章

## 攻撃性とは何か

### 1 青少年の攻撃性

本論文において、青少年とは、概ね 30 歳未満の若者を指す。また、攻撃行動（aggressive behavior）とは、他者に対して苦痛や危害を与えることを意図して行われる行動、そして、攻撃性（aggression）とは、この攻撃行動という反応が生み出される内的な心理過程を指すものと定義する（大淵，2011）。

#### （1）青少年の犯罪・非行の現状

攻撃性の具体的な現れとしては暴力犯罪、暴力非行がその典型である。犯罪学の分野では、青少年の犯罪・非行が近年減少傾向にあるとの認識があり、少なくとも先進国ではこれを裏付けるデータが得られている。

アメリカにおいて、Farrell, Laycock, & Tilley（2015）は、少年司法及び非行予防課（Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention: OJJDP）による統一犯罪統計報告プログラム（Uniform Crime Report program）と、司法統計局（Bureau of Justice Statics）のデータによる年齢別の逮捕率に基づいて、犯罪・非行の発生率の推移を分析している。その結果、アメリカ合衆国における犯罪発生のパークであった 1980 年台末から 1990 年台初頭にかけてと 2010 年を比較すると、①大幅な若者（adolescent）の犯罪・非行の減少が見られること、②この減少は 40 歳までの年齢層においてみられること、③2010 年において犯罪を行なった 40 歳代の者の犯罪率は、犯罪が最も多かった時期の 40 歳代の犯罪率も高いことを指摘している。

Matthew & Minton（2018）は、1989 年から 2014 年までの、スコットランド犯罪者指標（Scottish Offenders Index）をもとに、スコットランドで有罪判決を受けた者の年齢パターンを検討し、以下のような変化を報告している。1989 年から 2000 年において、25 歳未満の男性においてのみ有罪者数は低下し、それ以上の年齢の男性及び女性全般においては変化が見られなかった。2001 年から 2006 年にかけては、20 歳代半ばより若い男女に変化は見られなかったが、20 歳代半ばから 40 歳代前半にかけて

の男女において有罪者数は増加した。2007年から2011年にかけて、男性と、特に20歳未満の女性において有罪者数が大きく低下したが、30歳代以上の男女においては変化が見られなかった。

Bateman (2017) は、イギリスとウェールズにおいて、1992年から2016年までの間、犯罪への警察段階での処分 (formal pre-court disposal) ないし有罪の判決を受けた10歳から17歳の少年の人数を分析している。その結果、1992年に143,600名だったものが、2016年には21,372名へと約85%減少していることを明らかにした。

McAra & McVie (2018) は、オーストリア、ベルギー、デンマーク、ドイツ等のヨーロッパの10か国において、対象年齢層は違うものの概ね10歳代前半から20歳ころまでの若者の、2000年ころから2015年ころまでの、様々な犯罪に関する統計データを検討した結果、全ての国において犯罪率ないし犯罪件数が低下していることを明らかにした。

わが国においても、同様に、少年非行の減少が観察されている。少年による刑法犯、危険運転致死傷及び過失運転致死傷等の検挙人員は、1996年から1998年、及び2001年から2003年に一時的な増加が見られたが、全体として減少傾向にあって、2012年以降毎年最少を記録し続けている。2018年にも戦後最少を更新し、44,361人（前年比11.6%減）であった（法務総合研究所、2019）。

以上のように、少なくとも先進国においては、我が国を含む多くの国で若者の犯罪・非行の減少が生じていることを示すデータが得られている。

## （2）青少年の犯罪・非行減少の原因

このように青少年による犯罪が近年減少していることについて、犯罪学者たちは様々な解釈を試みている。多くの見解では、社会経済的な環境の改善や刑事政策の奏功といった社会的な要因と、青少年自身の行動パターンや内面の変化という心理的な要因の両方がその原因として挙げられている。

Payne, Brown, & Broadhurst (2018) は、若者の犯罪率の低下が起きている理由について、①防犯システムの発展、すなわち、防犯システムの発展により、個人的・社会的財貨が盗みにくくかつ売りにくくなったこと、②そのため、潜在的な非行・犯罪可能性を持つ若者が他の活動へと注意を向けるようになったこと、③若者の日常的な生活が変わったこと、すなわち、夜の街を徘徊するような犯罪・非行を誘発しやすい行動よりも、インターネットを通じて家庭で楽しみを見出すようになっているこ

と、④社会・経済的状況の改善を挙げている。彼らは同時に、この犯罪率の低下が本  
当に犯罪・非行が減少しているのではなく、若者がより発見されにくい新たな形の犯  
罪・非行へと向かったために、統計として現れている犯罪・非行が減少している可能  
性も示唆している。このように、Payne et al. (2018) は、青少年の犯罪・非行の減  
少について、社会的な要因として、社会・経済的な生活状況の改善と防犯システムの  
発展を、心理的要因としては、若者の生活スタイルの変化を挙げている。

McAra et al. (2018) は、ヨーロッパの諸国において一般的に見られる若者の犯罪  
率の低下の原因として、①ダイバージョンに重きをおいた新たな政策の効果、②大部  
分の反社会的な行動が、従来の身体的なものからヴァーチャルな世界のものへに移る  
ような置き換え効果、③若者の反社会的行動の変化にもかかわらず、警察がその活動  
の焦点を街中での犯罪・非行においているという文化的不一致効果、④司法システム  
が深く関わっている若者の集団はより小さくなったが非常に不安的で攻撃的なグルー  
プを形成しているという専念効果を挙げている。McAra et al. (2018) は、社会的な  
要因としては新たな政策の効果、心理的要因としては、若者の反社会的行動の態様  
の変化と、犯罪・非行集団の性質の変化を挙げている。

これらの指摘に加えて、我が国においては、土井 (2017) が、若者の犯罪率の低下  
の理由として、若者の人生観の変化を指摘している。土井 (2017) によれば、日本の  
社会が成熟社会に移行し、人間関係の流動性が高まったことを背景に、若者は、安定  
した関係を求めて、家族や生まれた境遇や生活環境が自分と似通った者同士だけで仲  
間を形成し、その他の人びととは関わりを持とうとしなくなる傾向を強めているとい  
う。そして、そうした閉じた生活世界を生きる中で、若者たちは、自らの人生に対し  
て余計な期待をかけず、宿命的な人生観を抱くようになっていたため、従来の不満に  
根ざした逸脱行動が減少しているのだと論評している。そして、表面化しなくなった  
児童・青年の悩み・欲求不満は、抑うつや引き籠りなどとして内在化したのではない  
かとも述べ、攻撃性の処理のあり方が変化していることも指摘している。

このように、犯罪学者たちは、青少年の犯罪・非行の減少には、社会的な要因と、  
青少年の心理・行動面での変化がともに影響していることを指摘してきた。さらに、  
この減少が、犯罪・非行の態様の変化によって引き起こされた見かけ上のものである  
可能性も示唆している。

### (3) 青少年のいじめ



青少年の攻撃性の問題を考えるにあたって、犯罪・非行にまでは至らない攻撃行動の現状に目を配ることも必要であろう。攻撃性は、仲間に対するいじめという形で現れることも多い。日本を含め、各国の研究報告を見ると、犯罪・非行同様、学校内の現実場面でのいじめは近年減少している一方、インターネット上でのいわゆるネットいじめは増加しているように思われる。

アメリカにおいて、Finkelhor, Turner, Ormrod, & Hamby (2010) は、2歳から17歳の児童を対象に、青少年被害者経験調査票 (the Juvenile Victimization Questionnaire: JVQ) を基にした質問項目について、2002年から2003年にかけて2,030名の児童に実施した発達被害者調査 (The Developmental Victimization Survey: DVS) で得られたデータと、2008年に4,046名の児童に対して実施された児童の暴力への暴露に関する調査 (The National Survey of Children's Exposure to Violence: NATSCEV) で得られたデータを検討している。その結果、2003年から2008年にかけて、身体的及び情緒的ないじめが減少していることを報告している。カナダのブリティッシュコロンビア州の公立学校が、4年生、7年生、10年生、12年生の児童生徒・保護者・学校職員を対象に行なっている満足度調査 (satisfaction survey) によれば、2002年に比べ2013年では、4年生 (9歳)、7年生 (12歳)、10年生 (15歳)、12年生 (17歳) のいずれにおいてもいじめられていると感じている生徒が減少しており、また、その内訳をみると、いずれの調査年においても、学年が上がるにつれていじめられていると感じている生徒の割合は減少することが示されている (村井, 2015)。ドイツにおいても、1995年から2010年までの調査において、6歳以降の各種学校において、1,000人当たりのいじめの発生件数は減少しており、年齢的には12、13歳ころに最もいじめが多く、その後減少することが示されている (村井, 2015)。

実際の社会的場面で観察される従来型のいじめに対して、近年は新しいタイプのいじめが増えている。それはインターネット上のいじめ (cyber bullying, 以下、ネットいじめと呼ぶ) である。これは、SNSなどインターネット上に構築された仮想の社会集団内で行われるいじめである。

アメリカでは、青少年のインターネットの安全性に関する調査 (The Youth Internet Safety Surveys: YISSs) が、2000年、2005年、2010年に実施された。これは、インターネットを使用している10歳から17歳の青少年を対象とした、電話による調査であり、対象者数は、2000年が1,501人、2005年が1,500人、2010年が

1,560名である。その結果、2000年から2010年にかけてネットいじめが増加していることが明らかになった（Jones, Mitchell, & Finkelhor, 2013）。また、Ipsos Public Affairsが、2018年、世界28か国で調査を実施しているが、これは、アメリカとカナダでは18歳から64歳、それ以外の国では16歳から64歳の、それぞれの国で500人以上の対象者にオンラインの質問を通じて実施したものである。その結果、自分の子どもがネットいじめを受けたことがあると答えた親の割合は、2011年から2018年にかけて、アメリカでは26%から41%に、カナダでは31%から32%に、ドイツでは12%から21%へと、程度の差はあるものの多くの国で増加している（Newwell, 2018）。

わが国においては、いじめはその形態を問わず、近年大きな増加を示している。

Figure 1に示すように、2006年には、全体の1,000人あたりの認知件数が12,490で

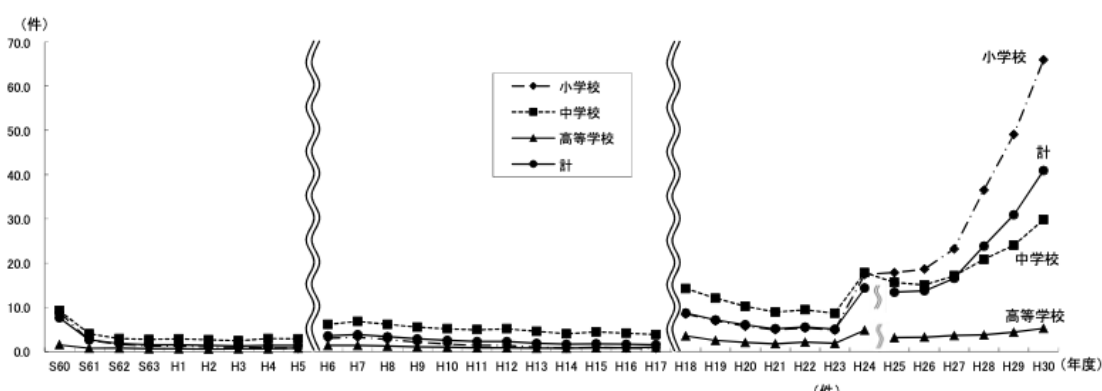


Figure 1 いじめの認知（発生）率の推移（1,000人当たりの認知件数）

あったものが、2019年には54,393へと、4.35倍になっている。特に小学校における増加が著しいことが目立っている（文部科学省、2020）。このいじめ認知件数には、現実の社会場面でのいじめもネットいじめもともに含まれているが、ネットいじめに該当すると考えられる「パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる」件数についても、増加傾向にあり、2014年には7,898件であったものが、2019年には16,334件へと、2.07倍になっている（文部科学省、2020）。他の先進国においては現実の学校場面等でのいじめは減少しているのに、わが国においては、ネットいじめのみならず、いじめが全般に増加していることには、一般に学校内外におけるいじめが違法行為として厳しく取り締まられる傾向にある他の先進国に比較すると、わが国におけるいじめへの対処は、学校教育の一環としてとらえられており、基本的に

学校が対処し、警察の介入も少ないなど、比較的緩やかな対処をとられることが多いことが影響していると考えられる。

以上の研究知見を見ると、海外においては、従来型のいじめが減少している一方で、別の種類のいじめ、すなわちネットいじめは逆に増加しており、わが国においてはいじめが全般に増加している。このことは、青少年の犯罪・非行の減少は、攻撃性自体の低減によるものではなく、現実の社会集団内におけるものから仮想の社会集団内で行われるものへと、現れ方が変わっていることを示していると考えられる。このような変化の理由としては、現実の社会場面における大人の管理がより浸透・徹底されているため攻撃行動を行いにくくなっていることに加えて、若者の生活スタイルそのものが、従来に比較してインターネットやゲーム等の仮想的な世界により多くの比重を置くものに変化してきていることが考えられる。

#### （４）青少年のメンタルヘルス

犯罪・非行の減少は青少年の社会適応が改善していることを示唆するが、しかしネットいじめの増加のように、この解釈を疑問視させるデータもある。さらに、青少年の社会適応はむしろ悪化していることを示す証拠もある。それは、青少年のメンタルヘルスの問題が増加していることである。

アメリカにおける、確率抽出法によって選ばれた 12 歳から 17 歳の青少年と 18 歳から 25 歳の若者の 25% に、26 歳以上の成人の 50% に個別のインタビュアーが質問をするという、薬物と健康に関する全国調査（National Survey on Drug Use and Health）の分析結果からは、2007 年から 2017 年の間に、12 歳から 17 歳の男女で 1 度は大うつ病エピソードを経験している者の割合が 8% から 13% へと増えており、特に女子の増加率が高い（男子は 5% から 7% へ。女子は 12% から 20% へ）（Geiger & Davis, 2019）。同じくアメリカで、抑うつとの関連が深いとされる自殺について、様々な機関からの統計を統合した統計統合プログラム（Vital Statistics Cooperative Program）の分析した結果からは、10 歳から 24 歳の若者の自殺率は、10 万人あたりの発生率が 2007 年の 6.8 人から 2017 年の 10.6 人へと 56% も上昇していることが報告されている。特に 10 歳から 14 歳の少年においては、2000 年から 2007 年にかけて 10 万人あたりの発生率が 1.5 人から 0.9 人へと減少したが、その後増加に転じ、2017 年には 2.5 人と約 3 倍にまでなっている（Centers for Disease Control and Prevention, 2019）。イギリスにおいては、1991 年から 1992 年の間に生まれた集団の 14 歳時と、

2000年から2001年の間に生まれた集団の14歳時とを比較したコーホート研究では、前者においては9%だったうつ病罹患率が、後者では15%に増加していることが明らかにされている。また、自傷について、2001年から2014年の間に、10,000人当たりの自傷経験者数は、13歳から16歳の層において男女ともに、女子においては17歳から19歳の層においても増加している。特に13歳から16歳の女子の層において2011年の45.9から2014年の76.9へと大きく増加している（Morgan et al., 2017）。自殺についても、2010年から2018年の間に、イギリスにおける15歳から19歳の若者の自殺率が63%も上昇したことが報告されている（Office for National Statics, 2019）。

我が国においても、青少年の抑うつ、引きこもり、自殺といった不適応が大きな社会問題となっている。厚生労働省の患者調査によると、1999年から2008年にかけて、15歳から24歳におけるうつ病などの気分障害の患者数が3倍強に増加した後、2017年までは患者数はわずかに増加したまま高い水準にある（厚生労働省, 2009; Tomoda, Mori, Kimura, Takahashi, & Kitamura, 2000）。また、内閣府が2015年に実施した、全国の15歳以上39歳以下を対象として実施された、いわゆるひきこもり調査では、普段は家にいるが自分の趣味に関する用事の時だけ外出するという準引きこもりと、狭義の引きこもりを合わせると54.1万人に達すると推計されている（内閣府, 2015）。自殺については、我が国の自殺者数全体は近年減少しており、近年最も自殺者が多かった2009年と、2018年とを人口の増減を排した自殺死亡率の低下割合で比較すると、20歳代で29.1%、30歳代で32.6%減少している。しかし、10歳代でのみ、約3%減とほぼ横ばいで推移しており、死亡原因として10歳から14歳においては悪性腫瘍について第2位を、15歳から19歳においては第1位を占めている（厚生労働省社会・援護局総務課自殺対策推進室 警察庁生活安全局生活安全企画課, 2019）。

このように、青少年のメンタルヘルス上の問題は多くの国で増加が観察されており、ここから犯罪・非行が減少傾向を示していることが、必ずしも青少年の社会適応状況が改善されていることを示唆しないことが示された。

#### （5）青少年の攻撃性：多様な顕現様相

青少年にみられるメンタルヘルスに関わる問題について、自殺はむろん、一見すると攻撃行動と反対とも見える抑うつや引きこもりにおいても、その心的メカニズムに

目を向けると攻撃性が関係していることを示す知見が得られている。

自殺について、一般的な説明モデルであるストレス-素因モデルにおいては、素因とストレスの重なる中で自殺が発生するとされるが、素因としては、希望のなさに加えて、衝動性・攻撃性が高まりやすい傾向ということが挙げられている（竹島，2011）。先行研究においても、暴力行為が自殺と関連があること（Conner et al., 2001）、攻撃性のサブタイプの一つである反応的攻撃性（reactive aggression, 詳細は後述する）が、自殺に関連すること（Conner, Duberstein, Conwell, & Caine, 2003）が示されている。

抑うつについて、Panak & Garber（1992）は、概ね9歳から11歳の児童521名と教師に対して、約1年間の間に3回の調査を実施し、攻撃性、仲間からの拒否、帰属スタイル、抑うつ症状等の変化を検討した。その結果、攻撃性の増加が抑うつの増加を伴うこと、その効果は部分的に仲間からの拒否に媒介されることを明らかにした。Fung, Gerstein, Chan, & Engebretson（2015）は、日本の中学生に相当する年齢の対象者のうちからスクリーニングテストによって選択した攻撃性と問題行動傾向が高い学生251名に、攻撃性、問題行動、対人関係等を調べる質問紙調査を実施した。その結果、反応的攻撃性は抑うつと不安を高めることが示された。Alorani & Alradaydeh（2017）は、919名の大学生に、抑うつ、幸福感、攻撃性を測定する質問紙を実施したが、その結果、抑うつと攻撃性との間に正の相関が、幸福感と抑うつ及び攻撃性との間に負の相関があることが明らかとなった。さらに、健常な大学生では、怒りや敵意は持つがそれを出さない不表出攻撃が抑うつと強く関連することや、抑うつが強い人は全般的に攻撃性が高く、攻撃性に関係が深い「短気」、「敵意」が強く見られることが示されている（川端・大淵，2014; 上野・丹野・石垣，2009）。また、近年、若年層を中心に、これまでとは異なる新たな病像のうつが多く見られるようになっているが、こうしたタイプのうつ病者は、攻撃的、他責的で責任を回避しやすく、自己愛的で自己中心的という特徴を持ち、抗うつ剤が奏功しないという特徴が指摘されている（山崎・村松，2014）。このように、多くの先行研究は攻撃性と抑うつの間に関連があることを示している。

引きこもりについて、Spielberger（1999）は、過度な怒りの抑制は抑うつや引もりを促進する可能性があるとは指摘している。Frankova（2019）は、病院やクリニックで募集・採用された、引きこもりの基準に合致した18歳から40歳の、原因不明の特発性の引きこもり（primary hikikomori）群13名と、神経症やストレス関連の合併症

を持つ引きこもり（secondary hikmori）群 22 名、引きこもり群と年齢等が合致した統制群 28 名を対象に、デモグラフィックなデータ、トロント失感情症尺度（Toronto Alexithymia Scale）、トラウマ経験尺度（life experience questionnaire）、Buss-Durkee 敵意インベントリー（Buss-Durkee Hostility Inventory）、quality of life Chaban クオリティー・オブ・ライフ尺度（Chaban Quality of Life Scale）、パーソナリティ特性の尺度である Leonhard-Schmieschek 尺度（Leonhard-Schmieschek Questionnaire）からなる質問紙を実施している。その結果、二つの引きこもり群を比較すると、合併症を持つ引きこもり群の方が、特発性の引きこもり群よりも敵意が高かった。特発性の引きこもり群は、統制群と比較して、失感情症、トラウマとなる出来事の実験、怒り、言語的攻撃性、攻撃性全般が高かった。合併症を持つ引きこもりは、統制群と比較して、短気、怒り、気分変調、興奮しやすさ、不安が高かった。また、実際に引きこもっている対象者においては、対人恐怖と並んで暴力の症状が見られることが、調査によって明らかにされている（渡部・松井・高塚，2010）。さらに、引きこもり事例の多くで、家庭内暴力が伴うという指摘（斎藤，1998）や、引きこもりに至る段階で、イライラ感や被害的な言動の増加や（藤巴，2003）、「幼児のように親にしがみつくと、手のひらを返すように暴力的な言動を示すような不安定さと両価性の目立つ時期」（厚生労働省，2010，p.20）が続くという指摘があり、引きこもりに攻撃性が大きく関係していることがわかる。

このように、自殺、抑うつ、引きこもりといったメンタルヘルス上の問題にも、攻撃性の問題が関与することを示す多くの知見が得られている。

## （6）青少年の攻撃性の現象形態の変化と有効な対策について

これまで述べたような、青少年における従来型の犯罪・非行は減少しているが、インターネット上の攻撃行動はむしろ増加し、さらにはメンタルヘルスの問題も増加しているという現象の一貫した説明としては、青少年の攻撃性の問題は従前から一貫して持続しているのであり、その現れ方に変化が見られているという解釈が成り立つ。

上述の、土井（2017）による、現代の非行の現象は、大人による管理が浸透したために児童・青年の悩み・欲求不満が表面化せず、抑うつや引き籠りなどとして内在化したのではとの論評があるように、現代社会においては、管理が現実社会の隅々まで行き届くようになってきたことにより、従来現実的な社会集団内で発揮されていた攻撃性が、管理が行き届きにくいインターネット等の仮想的な世界にその発現場所を移

し、さらには、そうした仮想的世界でさえも禁じられた攻撃性は、自らの内に向けられる形でメンタルヘルスの問題を生み出していると考えることが可能であろう。

このような観点からは、犯罪・非行はもちろんとして、いじめなどの暴力に関する問題や、引きこもりや抑うつの問題に対して、様々な対策が講じられてきたにもかかわらず十分な効果を上げることができていない理由として、これらの対策が対処療法的なものにとどまっており、異なる現れの背後に一貫して攻撃性の不適切な処理という問題があるという視点が欠けているためであると考えられる。根本にある問題を踏まえていない対応は、あちらを叩けばこちらが飛び出るといったモグラ叩きのような状況を生み出してしまいがちであり、現に、こうしたことはいじめとその対策の関係などで見受けられなくもない。このような現状を踏まえれば、攻撃行動を中心とした青少年の問題行動への具体的対策を策定する前に、このような現象を引き起こすような、個人内の攻撃性の生成、表出および抑制のメカニズムを明らかにすることが喫緊の課題と考えられる。なぜならば、そうしたメカニズムについての理解を踏まえてこそ、攻撃行動の抑制および適切な処理のための、一貫性を持った有効な介入の方策が明らかとなるからである。

## **(7) 本論文の目的**

本論文では、青少年の攻撃行動に関わる問題への介入の基礎となる、一般的な攻撃行動決定過程のモデルを理論的に提起し、その実証化を試みることを目的とする。ここで、攻撃行動のモデルは、国家から個人まで、様々なレベルが考えられるが、本論文では、個人に焦点を絞り、個人の心理過程において攻撃性が生起し、表出ないし抑制される内的過程を明らかにすることを目的とする。その理由は、第一に、集団から個人にいたるあらゆるレベルの攻撃性を理解する際に、最も基盤に存在するのが個人の攻撃性の問題であり、より大きな集団の攻撃性を論じる際にも個人の攻撃性の内的過程の理解が土台となると考えられるからである。第二には、本論文における理論構築の最終的な目標が、青少年の攻撃性の適切な処理のための、臨床場面での有効な介入の土台となるような理論の構築にあるからである。

また、本研究では、認知、感情、動機づけという人間の心の機能の全域をカバーするような攻撃性のモデルを構築することを目的とし、攻撃性が抑うつや自傷・自殺といったメンタルヘルス上の問題を引き起こすメカニズムについては扱わない。それは、土台となる包括的なモデルが存在しない現在の状況では、まずはモデルの構築こ

それが求められているからであり、また、一度これが確立されれば、それを適用して、攻撃性がメンタルヘルスの問題を引き起こす心的メカニズムについて研究することが可能であると考えられるからである。

## 2 攻撃性研究の歴史

攻撃性や攻撃行動は心理学の歴史において重要なテーマであり続けてきた。大淵（2011）によれば、これまで提示されてきた多くの攻撃性・攻撃行動に関する諸理論は内的衝動説、情動発散説、社会的機能説の3グループに分けられる。

### （1）内的衝動説

内的衝動説は、すべての個体に存在する攻撃本能・攻撃衝動と呼ばれる何らかの内のエネルギーが高まると、人は攻撃行動を行うと仮定する説であり、Freud や Lorentz の理論が代表的である。まず、Freud の理論は、その生涯のうちに何度か基本的な部分で変化しているが、晩年の理論では、精神分析の立場から、生命の二つの基本的本能として、「生の本能（エロス）」と「死の本能（タナトス）」を仮定した（Freud, 1920）。有機体において、無機体を有機体に構成し、発展・成長させる基本傾向が「生の本能」であるのに対し、有機体を無機的状态に還元しようとする基本傾向が「死の本能」である。死の本能が外部に向かったものが攻撃性である。また、動物行動学の立場から Lorentz（1963）は、攻撃性を、動物が進化の過程で獲得した本能の一部であると主張した。

### （2）情動発散説

情動発散説では、攻撃性を不快な感情の表出・発散であるとする。攻撃動機づけは不快経験によって外部から喚起され、その目標は不快な感情を発散することである。Dollard, Miller, Doob, Mowrer & Sears（1939）や Miller, Mowrer, Doob, Dollard & Sears（1958）の欲求不満説では、攻撃動機づけは欲求不満から生じることや、欲求不満の原因とは無関係な対象に攻撃を加えること（攻撃の置き換え）によっても不快感情は減少するというカタルシス効果などが論じられた。置き換えの実証研究を進めた Dollard et al.（1939）や Marcus-Newhall, Pedersen, Carlson & Miller（2000）は、通常であれば挑発的と知覚されない出来事も、個人が欲求不満状態にあり、不快感情を発散したい気持ちが高まっているときには、これを挑発と知覚する認知的歪曲が生



じることを明らかにした。

Berkowitz (Berkowitz, 1993; Berkowitz & LePage, 1967) の認知的新連合理論では、攻撃性を観念の連合ネットワークによって生じる衝動的なものと仮定し、感情もこのネットワークに含まれることから、不快情動は自動的に攻撃を動機づけ、ときには本人が気づかないうちに攻撃行動を実行させてしまうこともあることを実証した。

### (3) 社会的機能説

社会的機能説では、攻撃行動は、目的達成の手段として、意図的・自覚的な選択の結果として戦略的に用いられるとする。この理論の土台となったのは、Bandura (1965) の社会的学習理論である。

この立場の研究者たちは、さらに3つのグループに分けることができる。第一のグループは、Tedeschi (1994) に代表される意図決定論者であり、攻撃行動を社会的葛藤に対する解決方略とみなしている。彼らは、人が葛藤場面で対処方略を選択する際に動機付けが大きな影響を与えるとして、社会的パワー、社会的公正、社会的アイデンティティなどに注目した。また、同じ立場には、社会的行動の意図決定に対する個人の価値や信念の影響を取り入れた Ajzen (1985) の計画的行動理論を攻撃行動に応用し、元々取り上げられていた要因に、攻撃行動に対する行為者自身の態度と感情、行動遂行の効力感、達成される目標の価値、他の人たちの反応の予測など、より多くの要因取り入れてモデル化した Richetin, Richardson, & Boykin (2011) がある。

第二のグループは、個人の情報処理過程に焦点を置き、人が社会的状況において情報を収集し、分析して推論を行い、一定の判断を導く過程に注目する研究者たちである。その代表的な存在である Dodge (2011) は、個人の認知過程をいくつかの処理ステップに分け、各ステップにおける歪みがどのように攻撃行動を誘導するかについて、社会的情報処理 (Social Information Processing: SIP) モデルの立場から詳細な解析を試みている。

第三のグループとしては、攻撃行動は資源コントロールの手段であり、それが適応的か非適応的であるかは社会的文脈に依存すると主張する Hawley (2007) の理論がある。彼女は、負の側面だけが注目されてきた攻撃性について、資源コントロールという積極的機能を認め、それが社会適応に資する条件を明らかにしている。

### (4) 本論文における立場

本論文の目的である個人内における攻撃性の心的モデルを構築するという観点から、これらの3つの立場からの理論の長短について検討するならば、以下の通りである。

内的衝動説では、すべての個体に存在する攻撃本能・攻撃衝動と呼ばれる何らかの内的エネルギーが高まると攻撃行動が行われると仮定し、攻撃性が人間の本能であり、個人の特性や意図を超えたものだとしている。この立場は、しばしば不条理とも見える多様な人間の行動の背後に観念的な一般的動因を仮定することで、個々の行動をこの仮定から説明し、人間の行動に一貫した行動原理を与えようとするものである。これは、多様な攻撃行動を生み出す個人内の心的メカニズムに影響を及ぼす要因を実証的に特定し、それらの要因の組み合わせによって個人の攻撃性の違いを説明するモデルを構築するという本論文が目指すところとは、方法論的にも目指す方向性においても異なるものであり、この立場からの理論を本研究に取り入れるには困難がある。

次に、情動発散説では、攻撃行動を不快な感情の表出・発散とみなす。攻撃行動への動機づけは不快経験によって外部から喚起され、攻撃行動は不快な感情を発散することを目標とすると捉えることから、この立場からの説明は、何らかの社会的欲求不満が攻撃行動の原因となる場合、すなわち攻撃行動を感情に関する要因からとらえる際に有効な知見を与えるものと考えられる。ただし、この説単独では、欲求不満が介在しないような、冷静で計画的に実施されたような、認知的な要因が主に影響するような攻撃行動には、これを説明できないことになる。

社会的機能説では、攻撃行動は、何らかの目的達成の手段として、意図的・自覚的な選択の結果として戦略的に用いられるとしている。この説では、個人間の攻撃行動の違いの背景には、攻撃行動の有効性の知識や社会的適切性の捉え方といった要因に個人差があることを仮定している。ここから、この説は、感情があまり介在しないようなタイプの攻撃行動の予測においては、有効な知見を提供するものと考えられる。

以上の考察を踏まえ、本論文においては、個人において、あらゆるタイプの攻撃性が生み出される心的メカニズムを説明するモデルを、複数の要因の組み合わせから構築するという目的から、情動発散説および社会的機能説を折衷する立場をとるものとする。

### 3. 攻撃性の分類

攻撃性のメカニズムを理解する上で有益と思われるもう一つの別の理論的アプロー

チは、攻撃性の分類である。研究者たちは実証研究にあたって攻撃性について様々な視点からタイプ分けを行い、それらの測定を試みているが、その分類の仕方には攻撃性に関する彼らの概念的仮定が含まれている。それゆえ、これらを検討することは攻撃性の内的過程に関するモデルづくりに有益であろう。

### （１）攻撃性のタイプ分け

既述の通り、攻撃行動（aggressive behavior）とは、他者に対して苦痛や危害を与えることを意図して行われる行動であり、攻撃性（aggression）は、この攻撃行動という反応が生み出される内的な心理過程を指すものと定義される（大淵，2011）。この攻撃性あるいは攻撃行動に関して、前節で述べた通り、これまで膨大な研究が行われてきたが、それにも関わらず、個人における攻撃性の基本的な把握の仕方においてさえ大きく異なる３つの立場が存在しており、さらに具体的な理論に至っては、実に多様な説が提唱されてきている。

なぜ、このような混乱が生じるのであろうか。このことに関連して、Weinshenker & Siegel（2002）は、攻撃性の治療改善方法（treatment）にごくわずかな進歩しか見られていない理由として、攻撃性は単一の現象ではないことが多くの困難を生み出していると指摘している。そして、攻撃性を分類するための枠組みを改良することが、診断と処遇改善の鍵となると主張する。つまり、「攻撃行動」とひとくくりにされている行動と、それを生み出す心理過程にはいくつかのサブタイプが存在するのだが、従来の研究は、自らが対象としている特定のサブタイプから攻撃性の説明モデルを構築しがちであった。そして、それぞれの攻撃性のモデルは、対象が限定されていることからくる自己の制約を意識していないわけではないが、それを超えた包括的な理論の構築に向かうよりは、自らの理論の精緻化へと向かいがちであった。このように、これまでは、それぞれのサブタイプを包括するような一般的攻撃性についての理論を欠いているために、サブタイプ同士が比較検討されず、あるサブタイプ、あるモデルに基づく研究で得られた知見を他のサブタイプやモデルに応用することも困難であった。その結果、数多くの理論が並立することになったものと考えられる。こうした問題を解決するためには、攻撃性の一般モデルを構築し、そこから、それぞれのサブタイプの特殊性を明らかにし、攻撃性の一般モデルの中にそれぞれのサブタイプを位置付けていくことが必要となろう。

それでは、攻撃性のサブタイプとしては、これまでどのようなものが提唱されているのであろうか。これまで提唱されてきた攻撃性について、Connor（2004）は、以下

のように整理している。①顕在的攻撃性 (overt aggression) と潜在的攻撃性 (covert aggression) は、その攻撃性が行動として表に現れているかいないかを基準として分類したものである。この分類は多くの実証的な研究によって支持されているが、攻撃性の高い人たちには両方が見られるので、こうした区分には意味がないとの指摘もある。

②道具的攻撃性 (instrumental aggression) は、攻撃者に何らかの報酬や利益をもたらすことを目的とする一方、敵意的攻撃性 (hostile aggression) は、被害者に傷や苦痛を与えようとするもので、ほかの利益を求めるといった意図はあまりない (Feshbach, 1970)。この分類も、実際の攻撃行動は両面を併せ持つことが多い (Hartup, 1974)、両方の攻撃行動は、周囲の人間によって非常に似通った態度や社会的認知を導きやすい (Rule & Nesdale, 1974) など、問題が指摘されている。

③略奪的攻撃性 (predatory aggression) は、何らかの感情や脅威によって自律神経系が喚起されることがなく、認知的に計画されたものである (Meloy, 2006)。一方、感情的攻撃性 (affective aggression) は知覚された差し迫った脅威に対する反応で、自律神経系 (autonomic nervous) の交感神経 (sympathetic nerves) が高レベルで覚醒され、怒りあるいは恐れを伴う。

④襲撃的攻撃性 (offensive aggression) は、挑発に起因しない他者への攻撃であり、防衛的攻撃性 (defensive aggression) は、脅威のある状況への反応として生じるものである (Connor, 2004)。この類型は、動物の攻撃行動の神経生理学的研究から生みだされたが、現在までのところ、人間を対象とした実証的な研究は乏しい。

⑤反応的攻撃性 (reactive aggression) は、怒りを伴う、脅威、欲求不満、挑発に対する防衛的反応であり、一方、能動的攻撃性 (proactive aggression) は、何らかの目的達成のために熟考を経た、外的な強化による強制的行動であり、望む結果を得るための手段として用いられる (Crick & Dodge, 1996)。これらの区別は、先行研究において、妥当性の面で非常に高い支持を受けてきた (Price & Dodge, 1989; Waschbusch & Willoughby, 1998; Dodge, 1991)。ただし、これらの研究は、小学校の児童の学校のクラスにおける行動を観察したものであるという制約があり、この区別がより一般性を持つには、多様な状況下で様々な要因について検討する必要や、より幅広い年代で検証する必要がある。

⑥関係性攻撃 (relational aggression) (Crick & Grotpeter, 1995; Crick & Werner, 1998)、あるいは、間接的攻撃性 (indirect aggression) (Hood, 1996) とは、他者の

友人関係を壊し、仲間から受け入れられているという気持ちを損なう攻撃行動である。従来、多くの研究において、女兒に比べて男児の方が、言語的攻撃性、身体的攻撃性、暴力犯罪の発生率が高いことが実証されてきた。しかし近年、この性差は、対象とされる攻撃性のタイプに、女兒に多いタイプの攻撃性が含まれていないせいであることが提示された (Crick & Grotpeter, 1995)。そして、女兒に特徴的な攻撃性は関係性攻撃、あるいは間接的攻撃性と命名された (Hood, 1996)。

Vitaro, Brendgen & Barker (2006) は、攻撃性の分類には、形態 (form) に着目するものと、機能 (function) に着目するものがあると主張する。彼らに従えば、顕在的－潜在的攻撃性、関係性あるいは間接的攻撃性は形態的分类に、反応的－能動的攻撃性、道具的－敵意的攻撃性、略奪的－感情的攻撃性、襲撃的－防衛的攻撃性は機能的分類に含まれる。この形態と機能の分類は関連はあるが独立していて、例えば、攻撃の機能面の区別からなされたサブタイプの一つである反応的攻撃性は、形式面については、一般に脅威に対する防御的反応であって怒りをともなうことから、顕在的に行われることが多いが、必ずそうであるというわけではなく、深い恨みを内に秘めている場合のように、潜在的な形式をとることもありえる。

Connor (2004) の分類は、攻撃性の形態よりも機能面に重点を置いたものが多いが、その理由は、攻撃性の心理面に焦点を当てた分類の方が表面的な形態区別よりも攻撃性の違いの本質を表していると考えられるからであろう。攻撃性の問題を抱えた対象者への支援という実際面においても、その介入が有効性を持つためには、対象者が示す攻撃行動の表面的な特徴の違いではなく、攻撃行動の背後に存在する対象者の心理的問題に目を向ける必要がある (Antonius et al., 2013)。例えば、Connor

(2004) では取り上げられていなかったが、感情的攻撃性と略奪的攻撃性に近いサブタイプである、衝動的攻撃性と計画的攻撃性の違いについて、以下のような知見が得られている。司法の領域において、計画的攻撃を行った犯罪者は再犯の可能性が非常に高いこと、異なる多様な種類の犯罪に関与する傾向があること (Walters, Frederick, & Schlauch, 2007) などが知られている。また、衝動的暴力犯は計画的暴力犯よりも、抗精神病薬による治療や (Swanson et al., 2008)、アングラー・マネジメントの訓練プログラム (Walters et al., 2007) に対して良く反応する傾向がある一方で (Antonius et al., 2013)、計画的暴力犯は、認知的再構成法からより大きな治療的恩恵を受けることが示されている (Walters et al., 2007)。

Connor (2004) の分析結果を見てみると、攻撃性の分類、特に機能に重点をおく分

類の多くは、2つの典型的類型を対比させるものであることがわかる。それは、ニュアンスや細部の違いはあるにせよ、おおよそ、怒りや恐れなどの感情に多く影響され、あまり組織化されていない攻撃性（反応的攻撃性、敵意的攻撃性、感情的攻撃性、防衛的攻撃性）と、感情や生理的喚起をあまり伴わない目的指向的な攻撃性（能動的攻撃性、道具的攻撃性、略奪的攻撃性、襲撃的攻撃性）である。

## （2）反応的攻撃性と能動的攻撃性

本論文で報告する実証研究でも、これら典型的な2タイプの攻撃性に焦点を当てる。そして、それらを反応的攻撃性 vs. 能動的攻撃性という対比において、あらためて機能の違いを確認する。

反応的攻撃性とは、先に述べたように、欲求不満、目標追求に対する妨害、自己に対する脅威などの刺激によって生じた否定的感情を表出しつつ、嫌悪感の源となる対象に危害を加えようとする攻撃である。この概念の研究的起源は、攻撃性を欲求不満に対する反応として生ずるものであるとした欲求不満攻撃モデル（frustration-aggression model）（Dollard et al., 1939）にある。

一方、能動的攻撃性は、外的な報酬（食物、道具、金銭、名声、地位など）を得るためや、何らかの不都合な事態（他人から不愉快な扱いを受ける、など）を取り除くための手段として行われる攻撃で、否定的な感情表出が伴うとは限らない（濱口, 2002; Dodge & Coie, 1987）。能動的攻撃性概念は、その起源を Bandura（1979）の社会的学習理論に持ち、彼の理論においては、攻撃性とは、観察学習、モデリング、攻撃行動に対する社会的強化によって強められるとされる。

これらの両類型を対比すると、両者の本質的な区別は、反応的攻撃性の場合、最初に外界からの何らかの刺激があって、これに対する反応として攻撃行動が生起するのに対し、能動的攻撃性の場合、最初に内的に動機づけられた欲求があり、これを実現するために攻撃行動が用いられるという点にあることが分かる。攻撃行動の生起の端緒が外界に存在するか、内界に存在するかの違いといえよう。本論文においては、両攻撃性の区別をこのような、攻撃性生起の端緒の所在に置くものとする。

どちらのタイプの攻撃性も、その場の外界の刺激を受容し、認知的な処理を経て攻撃行動が選択されるのであるが、反応的攻撃性においては否定的感情が喚起されており、認知過程との相互作用により、攻撃性を強める方向に作用するのに対し、能動的攻撃性においては、そうした感情との相互作用は必ずしも存在せず、より熟慮的な過

程を経て攻撃行動が決定される。

反応的攻撃性と能動的攻撃性は、その先行因、他の要因との関連、予後など様々な面での違いが見られることが報告されている (Polman, de Castro, Koops, van Boxtel & Merk, 2007)。まず、反応的攻撃性については、以下の知見がある。先行要因としては、保護者による虐待などの養育上の問題によって高まることが知られている

(Dodge, Lochman, Harnish, Bates & Pettit, 1997; Shields & Cicchetti, 1998)。心理面での特徴としては、反応的攻撃性が高い者は、怒り (Dodge, 1991; Stanford, Houston, Villemarette-Pittman & Greve, 2003) および敵意 (Crick & Dodge, 1996; Dodge et al., 1987; Dodge, Price, Bachorowski & Newman, 1990; de Castro, Merk, Koops, Veerman & Bosch, 2005; Schwartz et al., 1998) を抱えていることが多く、自己の有能さを低く見積もりやすい (de Castro, Brendgen, Van Boxtel, Vitaro & Schaevers, 2007)。対人関係については、この攻撃性が高い者は、仲間からの拒否や、低い受容の程度、友達がいないこと、被害者になりやすいなど、仲間からの否定的な反応を引き起こしやすい (e.g. Dodge et al., 1990; Perry, Perry & Kennedy, 1992; Schwartz et al., 1998)。さらに、犯罪との関連性について、Brendgen, Vitaro, Tremblay & Lavoie (2001) は、反応的攻撃性が高いことは、デート時の暴力が見られる予測することを示した。

一方で、能動的攻撃性については、次のようなことが明らかになっている。先行因としては、片親であること、親が物質依存の問題を抱えているなど心理社会的な逆境 (psychosocial adversity) にあることと関連する (Raine et al., 2006)。心理面での特徴としては、能動的攻撃性が高い者は、自己の有能さを高く見積もりすぎる傾向があり (de Castro et al., 2007)、精神病質的な特徴が見られがちである (Raine et al., 2006; Stanford, Houston & Baldridge, 2008)。また、攻撃行動が肯定的な結果を引き起こすと本人自身が予測する傾向が高い (Dodge et al., 1997)。対人関係については、能動的攻撃性が高い児童がクラスで人気があったり、ユーモアのセンスを示すことがあるが (Dodge et al., 1987)、時間の経過とともに、良質の仲間関係が減少していくことが知られている (Poulin & Boivin, 1999)。犯罪との関連について、思春期早期に能動的攻撃性が高い男子には非行が見られる傾向があり (Vitaro, Gendreau, Tremblay & Oligny, 1998)、また能動的攻撃性が高い男子は、非行関連の暴力を伴いやすい (Brendgen et al., 2001)。

これら二つのサブタイプは相互に排他的なものではなく (Barratt, Stanford,

Dowdy, Liebman & Kent, 1999), 測定すると中程度の相関を示し (Polman et al., 2007), 実際の攻撃行動は両タイプの混合であることが多い (Liu, 2004)。

このように, 中程度の相関を示すとはいうものの, 多くの面で異なる性質を持つことが示されている二つの異なるタイプの攻撃性については, それらを生み出す異なる心的メカニズムが想定される。本研究において提唱する攻撃性のモデルは, これら両攻撃性を説明できるものでなくてはならない。



## 第2章

### 攻撃性の SIP モデル

#### 1 攻撃性の SIP モデルの歴史

##### (1) 代表的な攻撃性の統合理論

前節まで、攻撃性に関する従来の研究を概観した。その際、攻撃性の基本的なとらえ方の3つの立場を説明したが、個人の攻撃性に焦点を絞り、あらゆるタイプの攻撃性が生み出される心的メカニズムを説明するモデルを、複数の要因の組み合わせから構築するという本論文の目的からすると、情動発散説と社会的機能説の折衷的活用が有望であり、この観点から新たな攻撃性モデルを検討していくことを述べた。また、このモデルは、反応的攻撃性と能動的攻撃性の両タイプを説明できるものでなくてはならないことも述べた。

攻撃性の統合モデルとしては、代表的なものとして攻撃性の二過程モデル（大淵，2011）と，Anderson & Carnagey（2004）の一般的攻撃性モデル（General Aggression Model: GAM）がある。前者は近年の社会心理学の理論的發展に依拠したもので、人間の情報処理が意識的で当人の意思で制御可能な過程と、自動的かつ非意識的に作動する過程から成る二過程理論（two process theory）（Evans & Over, 1996; Posner, Snyder & Solso, 1975; 唐沢・池上・唐沢・大平，2001）を攻撃性に適用したものである。これは、攻撃性を生み出す過程に二つの異なるルートを想定するという点で、反応的攻撃性と能動的攻撃性という2タイプと親近性のあるモデルである。

GAM は，Anderson & Bushman（2002）によれば，以下の5つの攻撃性理論を統合したものである。それは，Berkowitz（1993）の認知的新連合理論，社会的認知理論，Bandura（1979）やPattersonら（1998）の社会的学習理論，Zillmann

（1979）の興奮転移理論，Tedeschi & Norman（1985）の社会的相互作用論である。ここで，Zillmann（1979）の興奮転移理論とは，先行刺激によって交感神経系の喚起を経験していながら，その刺激作用に気付いていない人に第2の刺激を与えると，以前の興奮の残余が第2の刺激に対する興奮反応と結びついて情動を強めるというものである。Tedeschi et al.（1985）の社会的相互作用論とは，攻撃行動（あるいは強要行動）を，他者の判断，態度，行動などに対して自分が意図した方向の変化を与えよ

うとする社会的影響行動と解釈するものである。この理論によれば、加害者は、期待される報酬を得られるように、報酬を得るためのコストを低減し、現状とは異なる結果を得ることができるように選択を行う意思決定者と見なされる。このように、GAMは、攻撃性に関する様々な理論を幅広く折衷・統合したものといえる。

これら二つの統合理論は、それぞれ異なる観点から攻撃性の発生過程に含まれる内的変数を区別し、また、それらを作動させる外的変数を同定しようとしたもので、攻撃性の実証研究によって明らかにされた多くの要因を一つのモデルに取り込み、それらの間の関連性を提示しようとしたものである。しかし、それらのモデルにおける議論は一般的水準にとどまっていて、特定場面において特定個人に攻撃行動が生起するかどうかを予測できるほど各要因のはたらきについて明細化されてはいない。具体的な予測力という点からみて研究者の間で有望とみなされてきた攻撃性理論は、社会的機能説の立場に立つ、Dodge（1980）の社会的情報処理（Social Information Processing: SIP）モデルである。

## （２）攻撃性の社会的情報処理モデルの提示

この理論の提唱者である Dodge は、子どもの仲間関係を築く能力（competence）を明らかにする取り組みの一環として、関係構築がうまく行かない大きな要因の一つとして攻撃的行動の問題があると考えた。そして、社会的挑発的場面において、攻撃的な子どもとそうでない子どもの行動の違いを生み出す心的要因として社会的認知（social cognition）に焦点を当てた。その結果、子どもの不適切な攻撃行動は、社会的な手がかりを利用する上での欠陥によるとする従来の説（Hartup, 1974; Fechbach, 1970）を否定し、攻撃的な子どもは、社会的な手がかりを歪曲しており、これは彼らが持つ社会的認知のバイアスによるものであって、これが攻撃行動を誘起していることを明らかにした（Dodge, 1980）。彼は、児童を被験者とする実験的研究を通して、相手の意図が明確な場面では、攻撃的な子どもと非攻撃的な子どもの間に相手の意図の知覚には違いがないのに、相手の意図が曖昧な場面では、攻撃的な子どもは非攻撃的な子どもに比べて相手の敵意を強く知覚するということや、こうした認知バイアスは、自分自身が被害者となる場合にのみ見いだされ、他者が被害者となる場合には生じないことなどを見いだした。

Dodge（1986）は、社会的認知（social cognition）と社会的行動（social behavior）の関係に関する理論と知見を統合することによって社会的行動の SIP モデ

ルを提唱した。理論面では、Flavell (1974) の社会的推論形成段階説, Goldfried & d’Zurilla (1969) の問題解決方略トレーニング・プログラム, Newell & Simon (1972) や Hayes (1981) の認知的問題解決の情報処理理論, McFall (1982) の社会的スキル理論などからの諸概念が SIP モデルに組み込まれている。

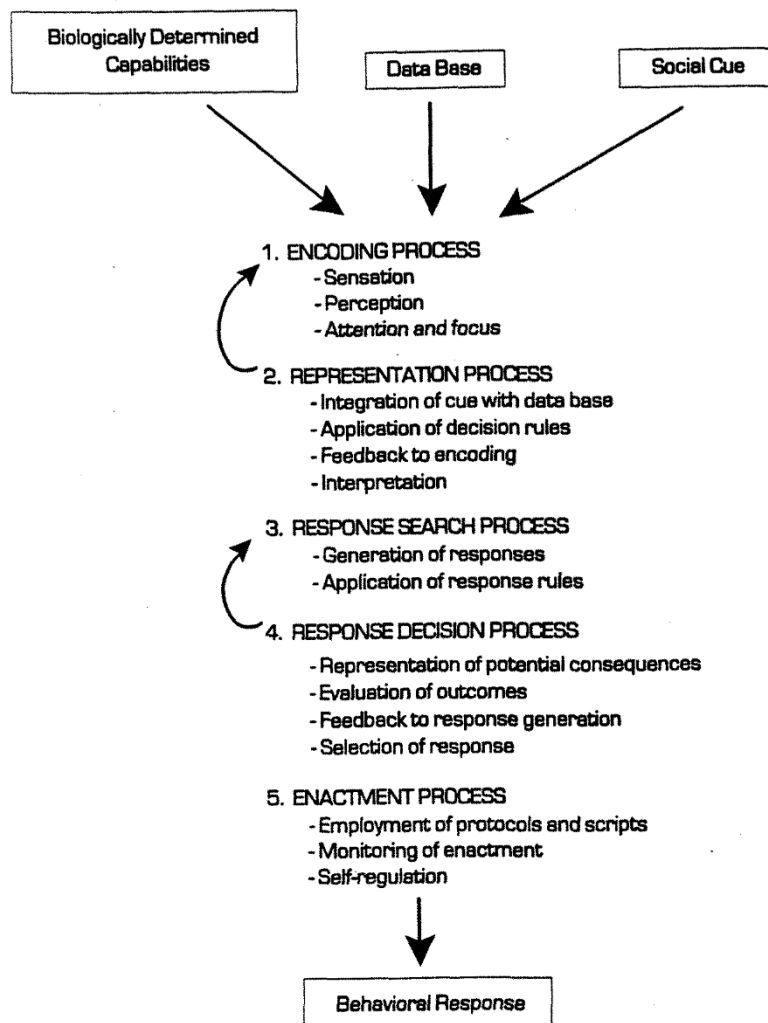


Figure 2 社会的行動の情報処理モデル (Dodge, 1986)

ある個人は、過去の経験と、生物学的に制約された反応能力 (set of response capabilities) をもって特定の社会的状況に直面し、環境から社会的な手がかりを受け取るのであり、手がかりに対する反応としての行動は、これらの社会的情報を処理する方法の関数として生じるのである。SIP モデルでは、この意思決定過程において、Figure 2 に示す連続した 5 段階の情報処理を経ると仮定される (Dodge, 1986;

Figure 2 を参照)。それは、①社会的状況に対する感覚，知覚，注意と焦点化からなる「符号化」段階，②知覚された手がかりを統合し，それを解釈する「表象形成」段階，③状況に対する合理的な反応を探り，反応選択肢を生成する反応探索」段階，④反応の結果を予測し，それを評価したうえで，反応を決定する「反応決定」段階，⑤生成された反応を実行する「反応実行」段階である（以後，原モデルと呼ぶ）。

原モデルを用いた実証研究において Dodge（1986）は，仲間の遊び集団に加入するという課題や，相手の意図が曖昧な挑発場面での対応といった課題において，上記の原モデルにおいて仮定されている変数が社会的有能さ（social competence）と攻撃反応とを規定することを実証している。

### （３）改訂社会的情報処理モデルの提示

Dodge は 1994 年に原モデルを改訂した SIP モデルを提示している（Crick & Dodge, 1994）（Figure 3）。この改訂以降は，基本的には，Dodge の SIP モデルに大きな変化は見られない（例えば，Dodge, 2011）。この改訂モデルの特徴は以下の通りである。

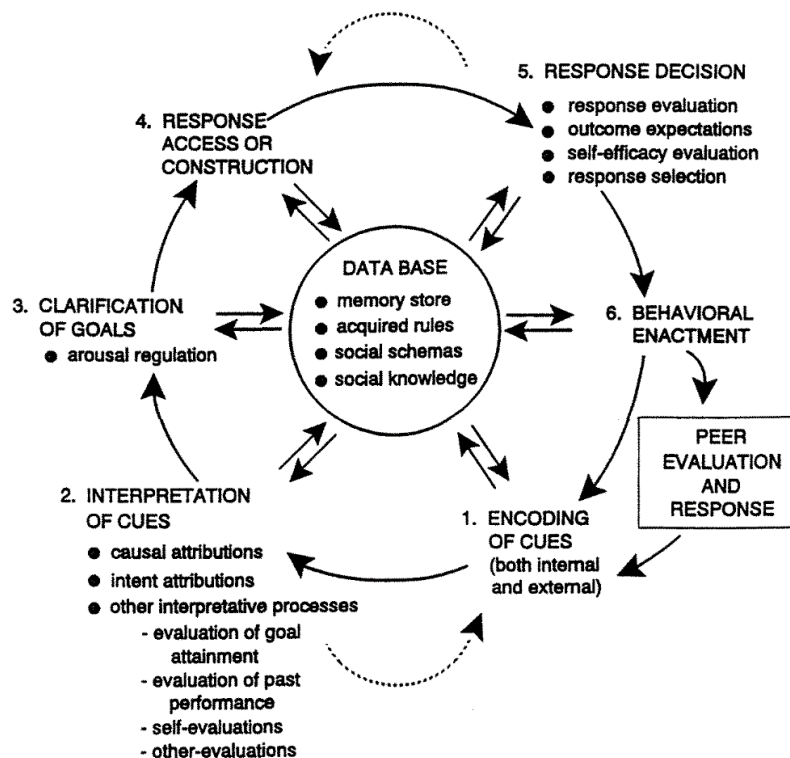


Figure 3 改訂 SIP モデル（Crick & Dodge, 1994）

改訂モデルでは、①外的および内的手がかりの符号化、②それら認知手がかりの解釈、③目標の明確化、④反応選択肢へのアクセスあるいは生成、⑤反応決定、⑥行動の実施というステップが仮定されている。原モデルと比較して、改訂モデルでは、人が自らの置かれた社会的状況についての表象形成なし解釈をした後、反応選択肢を探索・生成する前に、目標の明確化というステップを置いたのが特徴で、攻撃行動に向けた情報処理過程がより精緻化されたといえる。改訂モデルの第2の特徴は、原モデルでは、最初の符号化の段階で個人がそれまで経験から蓄積している知識や記憶のデータ・ベースにアクセスするとされているのに対して、改訂モデルでは、すべての段階の認知処理においてデータ・ベースへのアクセスが仮定されていることである。改訂モデルの第3の特徴として、原モデルが情報処理の直線的流れを仮定していたのに対して、これを行動のフィードバックを含めた循環的な流れとし、一つの出来事に対する処理は基本的には各段階を経て逐次的に行われていくものの、例えば、ステップ1の符号化を行っている時に同時にステップ2の解釈を行ったり、ステップ4の反応へのアクセスを行っているときに同時にステップ2の手がかりの解釈を考え続けるなど、複数の処理段階が同時に実行されると仮定されている点があげられる。彼らは、起きている間は、人は想定されているプロセスの全てのステップに絶え間なく従事していると仮定している。

#### （4）社会的情報処理モデルの実証的研究

これらの理論を実証的に検証したものとしては以下がある。Lösel, Bliesener & Bender (2007) は、①SIP 変数上の特徴が家庭や学校などの社会的文脈で攻撃性を経験したことと関係しているか、②SIP 変数は身体的攻撃性、言語的攻撃性や様々な形態の非行に影響を及ぼすかどうか、③SIP 変数が媒介的ないし独立してどの程度に攻撃性の予測及び予測的な機能を持つかを明らかにするため、7年生および8年生（平均年齢14歳）の少年を対象に、初回とその20ヶ月後とに場面想定法（vignette method）を用いた実験を行った。その結果、最初の時点で測定された SIP 変数は20ヶ月後の個人の攻撃性の違いを20%から34%予測した。また、攻撃的・衝動的反応スキーマを記憶から検索する段階と、そのような反応を肯定的に評価する段階が、攻撃行動に関連することが示された。Lochman & Dodge (1998) は、敵意バイアスに関して、4年生と7年生の男子生徒を対象に、攻撃的な児童とそうでない児童をペアにして作業を行わせるという実験を行い、攻撃的な児童はそうでない児童に比べて、ペ

アになった相手の行動を攻撃的に知覚しやすいとともに、自分自身の行動を攻撃的に知覚しにくいことを明らかにした。Dodge (1980) は、2年生、4年生及び6年生の男子児童を対象に、知らない少年によってイライラさせるような状況下での行動を観察する実験を行った。その結果、攻撃的な児童と攻撃的でない児童には、相手の児童の意図があいまいな場合にのみ違いがみられ、攻撃的な児童は相手が敵意をもって行動したように反応する一方で、攻撃的でない児童は相手が偶然にそのような行動をしたように行動し、こうした違いは攻撃的な児童は相手が敵意を持っていると帰属したためであることを示した。Dodge et al. (1997) は、幼稚園から3年生までの4年間にわたって、場面想定法を用いた男女の児童の縦断的発達調査を行い、反応的攻撃性が高い児童のみが不適切な符号化や問題解決のパターンを示すこと、能動的攻撃性が高い児童のみが攻撃行動を用いることによって肯定的な結果を得られると予想する傾向が高いことを明らかにした。

また、SIPモデルに関する研究は、原モデル提示以来、主に児童を対象に行われてきたが、その後、年長の者に対してもその有効性が実証されている。Crozier et al.

(2008) は、585名の少年を対象に16歳から18歳までの3年間調査を行い、逸脱した社会的情報処理が将来の反社会的行動を予測することを実証した。また、Topalli

(2005) は、成人犯罪者群、犯罪者群とデモグラフィック・データをマッチさせた成人対照群、大学生群の3群を用いて、二人の演技者の体に貼り付けた反射板だけが見えるようにコントラストなどを調整したビデオで、動きの速度を変えた3つの条件において、二人の人間の一方が他方に近づき肩を叩くという場面を見させ、その動きをどのように知覚するかという準実験を実施した。その結果、犯罪者群は他の群よりも、特にゆっくりした動きの条件で相手の敵意を知覚しやすいといった特徴を示すなど、攻撃行動決定過程において、他者の意図をどのように解釈するかが、攻撃行動の生起に重要であることが示された。

このように、Dodgeの原モデルは、社会的挑発場面で相手に敵意意図を帰属しやすい傾向が攻撃行動を促進するという発見を土台として構築され、その後の発展において、仮定する認知的な情報処理過程を精緻化することで理論的射程を広げてきた。ここから、大淵 (2011) による攻撃性の理論の分類において、SIPモデルは、攻撃行動は何らかの目的達成の手段として、意図的・自覚的な選択の結果として戦略的に用いられるものとする社会的機能説の一つと分類されている。

しかし、上述のように、SIPモデルはDodge (1980) による原モデルの提示以

来、社会的挑発場面における反応的攻撃性を中心的な問題として扱ってきた歴史がある。そして、この反応的攻撃性は、それが何らかの脅威に対する反応であることから、怒りや不安等の感情変数が大きな影響を与えることが想定される。Lemerise & Arsenio (2000) や戸田・渡辺 (2012) が指摘するように、対人情報の認知的処理は多かれ少なかれ感情の影響を受けざるを得ないのであり、実際に、怒りや不安などの感情の高まりによって合理的な判断ができなくなるのは多くの人を経験することである。先行研究においても、感情変数が攻撃行動生起に大きな影響を及ぼすことが明らかにされてきている (Eisenberg et al., 1996; Hubbard et al., 2002)。それらの中でも、怒りが攻撃行動を促進することは様々な研究において繰り返し指摘されており、例えば、短気な人が攻撃的行動をとりやすいこと (Bettencourt, Talley, Benjamin & Valentine, 2006)、怒りが殺人 (Berkowitz, 1993)、児童虐待 (Nomellini & Katz, 1983)、ドメスティック・バイオレンス (Barbour, Eckhardt, Davison & Kassino, 1998) を促すことが明らかされている。この点でも、社会的機能説と情動発散説との折衷が求められるが、そうした流れは SIP モデルの研究史の中にも見出される場所である。即ち、SIP モデルに感情変数を組み込む試みが行われるようになったのである。

#### (5) 感情変数を組み込んだ新たな SIP モデルの構築

Dodge (1994) の改訂モデルに感情変数を組み込む最初の試みは Lemerise et al. (2000) によって行われた (以後、彼らによって提示されたモデルを感情 SIP モデルと呼ぶ)。

Crick & Dodge (1994) の改訂 SIP モデルでは、ある社会的状況に直面した人がこれに対して反応を生成する際、それは、それ以前からその人が持っている過去の経験や生物学的特性によって制約を受けるとするが、Lemerise et al. (2000) は、この生物学的特性の中には、刺激によって生起する感情の強度である情動性 (emotionality) あるいは感情スタイル (emotion style) (Rubin, Coplan, Fox & Calkins, 1995; Eisenberg & Fabes, 1992; Rothbart & Derryberry, 1981) が含まれているとした。そして、情動性及びその制御能力 (regulatory abilities) に加えて、気分ないし背景的感情 (background emotion) かならなる感情過程が、社会的情報処理と意思決定に影響を及ぼすと仮定している。すなわち、人がある社会的状況に直面する際には、①それ以前にすでに抱いていた感情状態が存在しており、それが感情反応に影響を及ぼす。そして、②生物学

的傾向である情動性あるいは感情スタイルによって、同じ事態に直面しても経験する感情の強度が異なってくるのであり、さらに、③抱いた感情を調整する感情調節のスキ

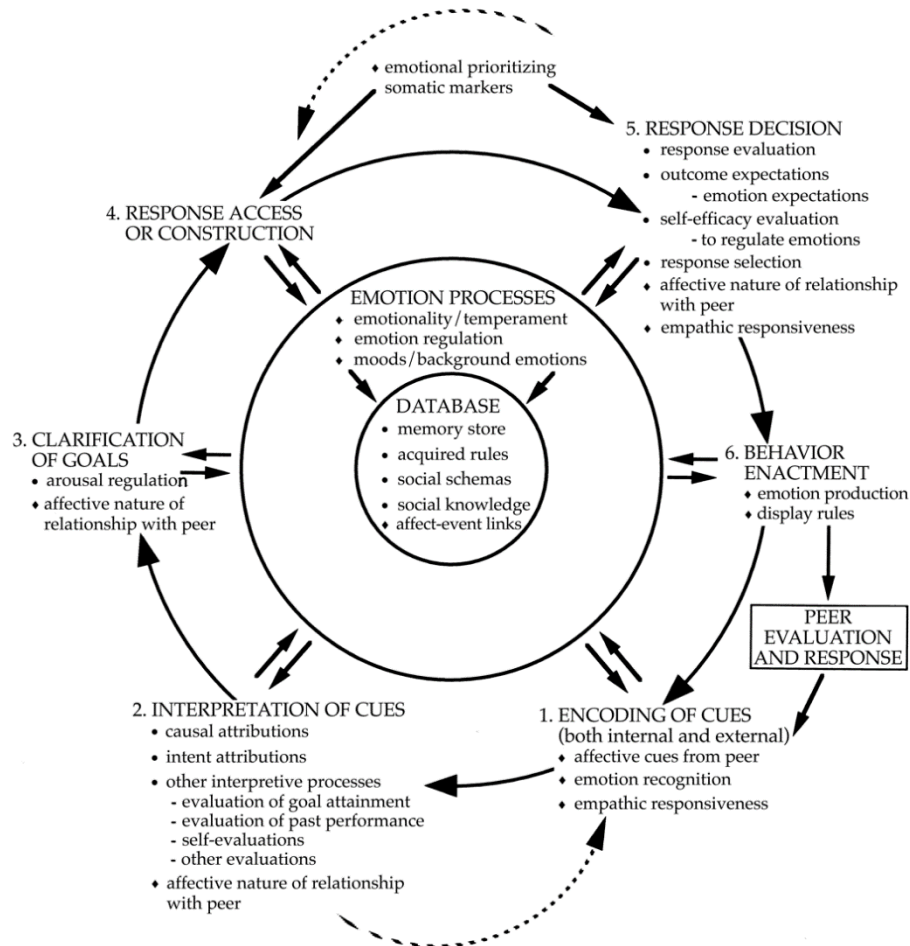


Figure 4 感情過程を組み込んだ感情 SIP モデル (Lemerise et al., 2000)

ルによっても感情反応は影響を受ける。改訂 SIP モデルでは、社会的情報処理過程において、データ・ベースは随時アクセスされ、その内容が情報処理に活用されると仮定されていたところ、Figure 4に示すように、感情 SIP モデルでは、社会的情報の処理過程において、データ・ベースとアクセスする際、必ずこの感情過程が媒介として介在すると仮定している。この感情 SIP モデルでは、感情と認知に関する神経生理学モデル (Damasio, 1994) に基づき、その人の過去の体験の表象には、認知的要素と同じく感情的要素が含まれと想定している (“affect- event links”, Damasio, 1994)。それゆ



え、出来事や感情的手がかりから社会的知識が引き出される場合もあるし、出来事や社会的知識から感情が引き出される場合もある。

この感情 SIP モデルは、理論的基盤としては多くの研究に採用されているものの、そのモデル全体の妥当性を実証的に検証した研究は多くない。de Castro et al. (2005) は、54 名の 7 歳から 13 歳までの攻撃行動により専門機関に照会された少年と対照群を用いて、人が同輩からの挑発を受けるような場면을音声で聞かせた後、感情 SIP に含まれる要因に関する質問に答えさせた。その際、先行研究から、攻撃性の生成に強く関わることが明らかとなっている解釈、反応生成、反応評価という SIP 変数と、感情調節、怒りという感情過程に関わる要因を取り上げ、これらが攻撃性に及ぼす影響を検討している。その結果、認知変数に関して、先行研究と同様、対照群と比べて攻撃的な少年は相手により敵意意図と喜びを帰属し、罪の意識をより帰属せず、また攻撃的な反応をより多く生成し、攻撃行動を高く評価する傾向があった。また、感情変数に関しても、感情 SIP モデルから予想される通り、攻撃的な少年は、怒りを多く報告し、また適応的な感情調節方略をより用いなかった。Bowen, Roberts, Kocian, & Bartula (2017) は、新たに刑務所に収容された 18 歳以上の男性の被収容者を対象にインタビュー調査を行い、暴力行為が起きそうな場面で、彼らが実際に暴力を振るったかどうか、及び SIP や感情に関わる変数について尋ねている。その結果、相手の意図の帰属、目標生成と反応生成、および怒りが暴力行為を予測することを明らかにした。

また、モデル全体の検証ではないが、感情 SIP モデルに理論的に立脚した研究において、感情のうち、とりわけ怒りが攻撃行動や暴力に結びついていることが、繰り返し確認されている (Bowen, Robert & Kocian, 2016)。Chen, Coccaro & Jacobson (2012) は、怒りが攻撃行動及び問題解決能力の乏しさと関係があることを明らかにした。また、Chereji, Pinteau & David (2012) は、メタ・アナリシスによって、怒りと暴力、認知的歪曲と暴力の間に強い関係があることを見出している。これらの知見は、怒りが認知過程を歪ませ、それによってある個人が、何らかの状況において、他の要因よりも脅威の知覚にばかり意識の焦点を当てる、ということが生じ得ることを示している (Novaco, 2011)。

この感情 SIP モデルは、個人レベルでの攻撃行動を具体的な認知変数と感情変数の両面から予測するものであり、青少年の攻撃行動に関わる問題への介入の指針を与えてくれるような、一般的な攻撃行動決定過程のモデルとして非常に有望なものと考え

られる。しかしながら、現在までのところ、このモデルの包括的かつ一般的な性格がかえって実証的検討を阻害している面があり、本邦においても、その妥当性の検証は行われていない。さらに、こうした問題点に加えて、この感情 SIP モデル自体にも、以下に述べるような問題点を指摘することができる。

#### 4 SIP モデルのさらなる拡張の必要性

##### (1) 感情 SIP モデルの問題点

ここまで、Dodge の原モデルから Lemerise et al. (2000) の感情 SIP モデルに至るまで、攻撃性の SIP モデルの発展の過程を追ってきた。SIP モデルはその発展の過程で、理論的視野を広げるとともに、その精緻化を果たしてきたが、その理論創出時の条件からくる制約ないし欠点をいまだ乗り越えることができていない。その欠点は、①動機づけに関する変数が入り入れられていない、②攻撃者自身による主体的な場面選択・創出が考慮されていない、という 2 点に集約される。これらが、能動的攻撃性研究の発展を阻害している面がある。

Dodge (1980) は、攻撃的な子どもとそうでない子どもの行動の違いを生み出す要因として社会的認知に着目し、攻撃的な子どもは、社会的葛藤場面で、相手が敵意を持っていると歪曲した認知をしがちなことを明らかにした。そして、この成果と先行研究を踏まえて、SIP の原モデルを提唱した。そこでは、ある個人は、過去の経験と生物学的に制約された反応能力をもって特定の社会的状況に直面するのであり、その状況で得られた社会的情報を処理する方法の関数として攻撃行動が生じるとされている。そこから、Dodge (1986) の原モデルでは、児童が社会的葛藤状況に直面するところから社会的情報処理過程が始まっており、その意味で、最終的に発動される攻撃行動は、与えられた状況に対する反応であるといえる。

従来は感情変数の関与が大きいと想定されていた攻撃性においても、認知過程が与える影響が大きいことを主張したところに、Dodge (1986) の原モデルの斬新さがあったといえる。その後の理論の発展としては、想定される情報処理過程の精緻化と、データ・ベースへの随時のアクセスや循環的な流れといった改良を加えた改定モデル (Crick & Dodge, 1994) を経て、原モデルにおいては曖昧な位置づけをなされていた感情変数を明確な形で改訂モデルに取り入れた Lemerise et al. (2000) の感情 SIP モデルが提示されるに至っている。

こうした流れは、当初は認知変数からなるものとして出発した SIP モデルが、より

包括的なものへと発展していく流れと捉えることができる。しかし、最新のものである感情 SIP においても、人間の心の機能を知・情・意に分ける捉え方（岡田・阿部，2000）でいうところの意（conation あるいは volition），すなわち動機付けに関する変数が含まれていない。これは、攻撃性の包括的モデルを構築することで、攻撃性が関係する青少年の適応上の問題を根治するための介入の土台となる理論を提供するという本論文の目的からすると、大きな欠点と考えられる。なぜならば、特に、何らかの目的を達成するために攻撃性を用いるものである能動的攻撃性においては、何かが欲しい・何かがしたいといった動機づけが攻撃性を発動する力となっているにもかかわらず、これをモデルから除外することになってしまうからである。また、感情 SIP において、反応的攻撃性が生ずる過程では怒り感情が高まることが認知過程を歪ませることが明らかにされているように、能動的攻撃性においては、願望や欲求が高まることが認知過程を歪ませることも理論的に予想されるが、このような影響も考慮されないことになる。さらに、この動機づけが阻害されたり、抑制された場合に、感情面や認知面でのどのような影響を及ぼすかという、攻撃性がメンタルヘルス面に及ぼす影響の理解も阻むことも予想されよう。したがって、動機づけに関わる要因が取り入れられていないモデルでは、特に能動的攻撃性についての理論的説明が不十分とならざるを得ない。SIP の原モデルが提出された初期から、Dodge らは子どもの攻撃性について反応的攻撃性と能動的攻撃性という類型を採用し、両者について研究を重ねてきている。しかし、現在までのところ、このように動機づけに関わる要因の高まりが社会的情報処理に与える影響を扱ったものは見られない。

また、攻撃者自身による主体的な場面選択・創出について、原モデルでは、直線的な進行を仮定していたのに対して、改訂 SIP モデル以降では、モデルの最終段階である行動実行（behavior enactment）が、仲間（peer）の評価や反応を介して、次のサイクルの状況に影響を及ぼすという循環的な過程を想定することで、ある時点での人の行動が次の場면을創出していくという視点を取り入れている。しかし、既存の SIP モデルでは、攻撃者の行動が作り出す新たな状況を、子どもの仲間の反応という非常に狭いものに限っており、これを能動的攻撃性に関係する一般的状況へと拡張する必要がある。また、モデルの一回りのサイクルから次のサイクルへの移行を考えるならば、攻撃者が新たな場面を選択していくような、攻撃者による場面選択の可能性も取り入れられるべきであろう。

このように、最新の感情 SIP モデルにおいてもなお、社会的葛藤場面への反応を扱

うという創出時の制約から、完全には逃れることができていない。SIP モデルの欠点を改善するためには、SIP モデルに動機づけに関する変数を組み込むこと、さらに、攻撃者の主体的な場面選択・創出の可能性をモデルに組み込むことが必要であることが示された。

## （２）能動的攻撃性の本質

従来の SIP モデルが持つ、特に能動的攻撃性の説明における不十分さを補うため、その修正を行うに当たって、まずは能動的攻撃性とはどのようなものかについて、改めて明確にする必要がある。本研究における能動的攻撃性とは、何らかの目的達成のための手段として、攻撃性がオペラント条件づけされたものである。

Dodge (1991) は、反応的攻撃性と能動的攻撃性の特徴を説明する中で、能動的攻撃性の理論的起源として、Bandura (1973, 1983) の社会的学習理論を挙げている。社会的学習理論の立場からは、攻撃行動はオペラント条件づけを理論的土台とする、外的報酬によって制御される、獲得された道具的行動 (instrumental behavior) とされる。

Bandura (1965) は、幼児を用いた攻撃性に関する実験を行なっている。幼児は 3 つのグループに分けられ、それぞれの群は実験前半で、同じくモデルである大人が等身大の人形に攻撃行動を行うところを見る。そして後半では、それぞれの群は、モデルである大人が賞を受ける映画を見る群と、罰を受ける映画を見る群と、何も見ない群に分けられる。そして、その後、映画に出てきたのと同じ人形がおいてある部屋で 10 分間を過ごさせられた。その結果、モデルである大人が罰を受けるのを見た群では他の群に比べて人形に対する乱暴な行動が少なく、賞を受けるのを見た群と、前半だけを見た群では、人形に対する乱暴な言動が多く見られた。この場合の児童の攻撃行動は、何らかの脅威に対する反応としての攻撃行動ではなく、人形へ乱暴な言動をすることによって快を得る、あるいは賞を得ることを目的としていることから、能動的攻撃性と考えられる。能動的攻撃性は、それによって肯定的な結果が生じることによって強化されることや (Crick & Dodge, 1996; Bandura, 1983)、また高圧的態度を取る傾向が強い家族間での交流により影響を受ける (Patterson, 2002) こと、また生育歴上の特徴として、片親であること、親が物質依存の問題を抱えているなど心理社会的な逆境 (psychosocial adversity) にあることと関連する (Raine et al., 2006) ことが明らかになっている。これらの先行研究から、能動的攻撃性は、学習によって獲得

されることが示されている。

Price & Dodge (1989) は、子どもを対象とした行動観察から、能動的攻撃性をさらに、人指向的 (person-directed) 能動的攻撃性と、物志向的 (object oriented) 能動的攻撃性の 2 つの類型に分類している。人指向的能動的攻撃性とは、攻撃行動が直接人に向けられ、他者を支配することに方向づけられたものである。物指向的能動的攻撃性とは、実利を得るために攻撃行動が用いられるものであり、物、縄張り、地位などを得ることを目的としたものであるとされる。両者は、その動機付けの向かう方向において異なっているが、「望んでいるもの・ことを得る」ために攻撃行動を用いという点では共通している。

能動的攻撃性は、意識的で計画された行動のことであり、個人的利益や利己的な動機のために用いられ、「計画的」、「道具的」、「冷血的」な攻撃性である (Blair, Peschardt, Budhani, Mitchell & Pine, 2006; Blair, 2001; Dodge et al., 1987; Frick & Ellis, 1999) という特徴から、サイコパスとの関連するに着目する研究者もいる (Raine et al., 2006)。ここで、サイコパスとは、ある種の人格特徴であり、操作的で、他者に対して寄生的であることや、自律神経が低覚醒 (autonomically under-aroused) で、感情が麻痺していることなどが特徴として挙げられる (Raine et al., 2006)。能動的攻撃性が顕著である暴力犯罪を行った者の大部分は、反応的な暴力 (犯罪) 歴を持つ者よりもサイコパシー・チェックリストで高い値を示すことが示されている (Cornell et al., 1996; Dempster et al., 1996)。また、Frick (2003) は、冷淡で感情に乏しい (callous-unemotional) サイコパス的な傾向を持つ児童は、高い能動的攻撃性得点を示すことを見出している。サイコパスと診断された者が、前頭前皮質や扁桃体の構造的および機能的異常を示すこと (Glannon, 2008) や、嫌悪刺激と強化の結びつきに損傷を抱えているという知見 (Blair, 2004) を踏まえれば、こうした特徴は生得的ないし発達早期に形成されたと想定される。したがって、サイコパスの特徴である操作的、他者に対する寄生的傾向、感情の麻痺といったパーソナリティや行動の傾向が、自己の願望や欲求を満たすために攻撃行動を用いることを学習することを促進していると考えられる。

以上より、何らかの目的達成のための手段として学習された攻撃行動が用いられたものとして、能動的攻撃行動の特徴が示された。

### (3) 意図的行動の理論と SIP モデル

能動的攻撃性の説明力を高めることに関して、反応的攻撃性と能動的攻撃性の区別を明確化するため、既存の SIP モデルにおいても、既存のモデルのステップ内の過程の精緻化がなされているが、これも上述の欠点を克服するには至っていない。

個人の攻撃行動の生起に関して、社会的情報の処理過程に着目する SIP 理論の立場に立てば、能動的攻撃性が高い者に一般に攻撃性バイアスは見られないという先行研究の結果からは (Crick & Dodge, 1996), 社会的状況が解釈された後のステップにおいて、能動的攻撃性が選択・決定される過程を明確化する必要がある。この点について、従来、能動的攻撃性が高い児童は攻撃行動を是認するような反応決定バイアスを持つと仮定されてきたが (Dodge et al., 1987; Crick & Dodge, 1996; Dodge et al., 1997), この反応決定に影響を及ぼすバイアスについて、理論的及び実証的見地からの検討は不十分であった。この問題点については、SIP モデルの立場に立つ研究者たちにも意識されており、Fontaine & Dodge (2006) は、これに対する改良として、改訂 SIP モデルの 5 つ目のステップである反応選択 (response decision) 段階を精緻化したものとして、反応評価・決定 (Response Evaluation and Decision: RED) モデルを提唱した。

RED モデルは、ステップ 4 で生成された様々な選択肢としての反応から、ステップ 5 において最終的に一つの反応が選択されるまでの過程を明細化したものであり、ステップ 5 内に、さらに以下の 5 つの段階が仮定されている。それは、第一に、生成された反応が明らかに実行不可能な場合にのみ却下されるような、受け入れ可能性の最初の閾値の適用 (application of a primary threshold of acceptability) 段階があり、第二に、自分がある特定の行動をどのくらい上手に行うことができるかについての判断と、その上手く実行できそうな反応の効果を評価する反応効力と評価 (response efficacy and valuation) 段階、第三に、ある行動を実行したら生じる可能性がある結果を推定し、それを個人的価値観に従って評価する結果の期待と評価 (outcome expectancy and valuation) 段階、第四に、生成された反応の価値が決定され、互いに比較される反応比較 (response comparison) 段階、第五に、最終的に一つの反応が選択される反応選択 (response selection) 段階である。

Fontaine & Dodge (2006) は、この過程の中に、能動的攻撃性を反応的攻撃性から区別する、以下のような情報処理上の相違が存在すると想定した。第 1 に、RED の第一段階である、受入可能性の最初の閾値の適用段階において、反応的攻撃性が高い者は、最初に行動が想起される際に、攻撃行動を選択することの閾値が低いため、衝

動的な攻撃傾向を示すとされる。この仮説は、Dodge et al. (1997) による、反応的攻撃性が高い児童は攻撃的スキーマに素早くアクセスし、実行するという推測と、Dodge & Newman (1981) によって確認された、社会的に拒否され、攻撃的である児童は、攻撃的でない児童よりも、社会的葛藤場面での反応行動の決定をより素早く、より少ない情報に基づいて行うという知見に基づいている。

第2に、REDの第二段階である反応効力と評価段階において、①能動的攻撃性が高い児童は、攻撃を行うことについて高い自己効力感を示す、②反応的攻撃性が高い児童は、攻撃的な復讐が社会的に容認されると判断しがちであるとされる。①は、能動的攻撃性が高い児童は、同輩のグループに入ろうとする状況と社会的葛藤状況の両方で、攻撃行動を行うことが有効な対処法であると報告する傾向が高いことに基づいている (Crick & Dodge, 1996)。②は、反応的攻撃性が高い若者は、曖昧な場面での挑発者に対して敵意意図を帰属しやすい敵意バイアスが大きいことから、攻撃的な復讐を、社会的に受容される認知しやすいという知見に基づいている (Fontaine, Burks & Dodge, 1998)。

第3に、REDの第三段階である結果の期待と評価段階においては、能動的攻撃性が高い児童は、自らの攻撃性が肯定的な結果をもたらすことを期待し、さらにそのもたらされた結果の評価も肯定的な傾向が高く、否定的な結果をあまり予想しないと想定されている。

第4に、RED過程の最終段階である反応の比較と反応の選択段階において、以下の要因が能動的攻撃性と反応的攻撃性を区別すると仮定されている。すなわち、反応比較の過程で、反応的攻撃性が高い者は、①アクセスできる反応の選択肢が限られているため少数の選択肢だけを考慮し、②生理的及び感情的に喚起されやすいため、熟慮しない自動的な処理がなされやすいことや、反応スクリプトを衝動的に選択しやすい傾向のため、反応選択に際して、選択可能な選択肢の比較をあまり行わず、③結果として、葛藤のないし挑発的な状況で、より攻撃的な反応を選択しがちである。一方で、能動的攻撃性が高い児童は、社会的（例えば仲間の認知）ないし物質的（例えば金銭）報酬を得ることに役立つと判断された状況下で攻撃行動を選びがちである。

このREDは、確かに、ある社会的状況に置かれた人間が何らかの反応を行う意思を決定する過程について、先行研究の成果を踏まえて改訂SIPモデルを理論的に精緻化している。しかし、このモデルにおける能動的攻撃性の捉え方は、何らかの社会的状況に置かれたとき、人がどのように反応するかを認知変数と感情変数から説明する

という従来の SIP の枠組みを超えておらず、何らかの願望や欲求が高まった状況で、認知過程および感情過程がどのように歪曲を受けるかという問題は考慮されていない。さらに、攻撃者が自らの動機づけに従って、なんらかの場面自体を選択したり創出することもあるという可能性については、全く考慮されていない。

#### （４）意図的行動の理論の概観

能動的攻撃性への予測力を高めるため、従来の SIP モデルに、新たに動機づけに関わる変数を加えることが必要なことを述べた。そのためには、これまで、人間の行動予測に関するモデルにおいて、動機づけに関わる要因としてどのようなものが検討されてきたのか、先行研究を検討することが必要であろう。そこで、動機づけを重視する行動モデルの代表的なものである、意図的行動の理論の発展を概観する。

Ajzen と Fishbein (1980) の合理的行動理論 (Theory of Reasoned Action: TRA) は、人間の行動に態度が及ぼす影響の研究から発展したものであり、人の態度と行動の不一致を説明するところから出発している。TRA では、人の行動の直接的決定因は、その人がその行動を遂行しようとする行動意図 (intention) であると仮定される。行動意図は、ある行動を実行しようという意志に基づいた動機であり、行動意図が強いほど行動は実行される (Ajzen, 1985)。そして、その行動意図の決定因として二つの要因が想定されている。第一の要因は、その人の行動を行うことに対する肯定的ないし否定的な評価、すなわち、その行動に対する「態度」である。さらに、その態度を決定する要因として、その行動がある結果を導くであろうという信念

(outcome belief) と、その結果に対する評価 (outcome evaluation) の 2 つがあり、両者の積が態度を決定するとした。行動意図の第二の要因は、自分がその行動を行うことを他人が望んでいるか否かについての判断である「主観的規範」(Subjective Norm: SN) である。この規範は、規範信念 (Normative Belief) と、そうした期待に従おうとする動機 (Motivation to Comply) の積によって決定される。

TRA は、儉約的でかつ十分な説明力を持つが、シンプルかつ基本的なものであるだけに、修正も行われやすい。これまで行われてきた TRA の修正は、主として二つの異なる方向性を目指して、いずれも新たな変数を加えることによって行われてきた。

一つ目は、変数を加えることによって、説明力の改善を目指すものである。TRA は、その理論的前提として、人は望んだ行動を実現できるとしているが、これは現実的でない場合も多い。例えば、大統領になるといった、本人が望んだとしてもそれが



実行しにくいような行動の場合はこのモデルは適用できないことになる (Beck & Ajzen, 1991)。そこで、Ajzen (1991) は、TRA に、当人によって知覚された統制力 (Perceived Behavioral Control: PBC)、すなわち自分が望めば所与の行為を実行・実現することがどのくらい可能であるかについての知覚という新たな変数を組み込んだ、TRA の改良モデルである計画的行動理論 (Theory of Planned Behavior: TPB) を提唱した。

修正のもう一つの方向としては、既存のモデルに変数を加えることで、これらの変数が意志に作用するメカニズムを明らかにしようとするものである。具体的には、TPB に感情、動機づけ、過去の経験の影響する自動的な過程という変数を取り入れるとともに、TPB とは異なった変数間の流れを想定した、目標指向行動モデル (The Model of Goal-directed Behavior: MGB)、さらに、MGB に何らかの目標を達成するという願望である目標願望 (Goal Desire: GD) を取り入れた、拡張目標指向行動モデル (The Extended Model of Goal-directed Behavior: EMGB) が提唱されている (Perugini & Bagozzi, 2001, 2004a, 2004b; Perugini & Conner, 2000)。

EMGB においては、行動意図は、その行動を行う個人的動機付けあるいは切望である行動願望 (Behavior Desire: BD) によって動機づけられる。行動意図と BD の理論的な区別としては、BD は行動意図よりも、一般に、実行しがたく、より抽象的で、より未来志向である。BD は、その行動が望ましいという評価、規範からの圧力の知覚、統制の知覚、達成したいと望んでいる個人的目標といった要素から生じるとされている。それゆえ BD は、態度、SN、PBC、予想される感情 (Anticipated Emotion: AE) と GD を反映し、これらの変数が意図へと及ぼす影響を媒介すると想定される。EMGB においては、GD、BD、意図という動機づけに関わる変数間の関係は、それぞれ、以下のように説明される。例えば欲求不満を減少させるといった現在の状態とは異なる状態を目指すという目標に向けての願望 (GD)、直近の目標に向けての行動への願望 (BD)、例えば、欲求不満を解消するために言語的攻撃を行う願望を生み出し、最終的には、言語的攻撃行動を導くような言語的攻撃の意図を生み出すものを生じさせるとされる。GD と BD は、TRA や TPB においては、行動意図のうちに暗黙の前提として含まれていたものを、明確に変数として独立化したものといえよう。

EMGB の予測力は、体重コントロール、学習、エクササイズなど様々な領域の異なる行動で実証されている (Dijst, Farag & Schwanen, 2008; Leone, Perugini & Ercolani, 2004; Perugini & Bagozzi, 2001; Perugini & Conner, 2000; Richetin et al.,

2011; Taylor, 2007; Taylor, Bagozzi & Gaither, 2001)。例えば, Richetin, Perugini, Adjali & Hurling (2008) は, 偶発的で不定期に起こる行動として, 炭酸飲料の消費に対する TPB, MGB, EMGB の予測力を比較するため, 以下のような調査を実施した。108 人の大学生が, 1 週間おきに 3 回, コンピュータを用いた質問に答える調査に参加した。1 回目のセッションでは, 参加者は, 炭酸飲料を飲むことに対する態度, SN, PBC, PAE, NAE, BD, 意図, GD を測定された。2 回目のセッションでは, 参加者の 1 回目のセッションからの炭酸飲料の消費量が測定された。3 回目のセッションでも, 前回セッションからの 1 週間の炭酸飲料の消費量を尋ねられた。その結果, 意図について, MGB と EMGB は TPB よりも予測力を持つこと, BD については, GD 変数を組み込んだ EMGB の方が MGB よりも予測力を持つことが示されている。

#### (5) 意図的行動の理論の攻撃行動への適用とその検討

これらの意図的行動の理論は, 攻撃行動へも適用されており, その有用性が実証されてきている。一般的な意図的行動の予測に関しては, EMGB は, MGB はもちろん, TRA や TPB よりも優れているという結果が多いが, 攻撃行動においては, 特に TPB と EMGB の予測における優劣は明らかでなく, 共に有用であることが示されてきた。

TRA や TPB を攻撃行動に適用した研究からは, 以下のような知見が得られている。Malamuth, Linz, Heavey, Barnes, & Acker (1995) は, 対象者本人とそのパートナーに対する質問, カップルの会話の録画されたものの分析による, 最初の調査と 10 年後の追跡調査の結果から, 敵意ある男らしさという態度と非人間的なセックスとが, 女性に対する暴力 (violence) や性的攻撃との間に正の関係があることを見出している。Roberto, Meyer, Boster, & Roberto (2003) は, 公立中学校の 448 人の 7 年生の男女の児童に対する, TRA 基づいた質問紙による調査から, 態度と SN が, 噂を流すことや侮辱などの言語的攻撃の意図を予測する一方, 態度のみが, 喧嘩などの身体的攻撃の意図を予測すること, そして, それらの行動意図は行動を予測することを明らかにしている。Nesdale, Milliner, Duffy, & Griffiths (2009) は, おおむね 6 歳から 10 歳の児童 161 名を対象に, 態度を表すものとしてのグループ内規範と, 攻撃行動との関係について調べている。最初に, 各児童は直接的な攻撃行動を肯定するグループ内規範が伝えられる群, 間接的な攻撃行動を肯定するグループ内規範が伝えら

れる群、攻撃性についての規範がない群に分けられた。そして、児童はグループ間の描画コンテストに参加すると考えるように求められた。その後、一連の手続きを経て、他のグループの児童に対する攻撃行動を場面想定法によって測定された。その結果、直接的な攻撃行動を肯定する規範を伝えられたグループ及び間接的な攻撃行動を肯定する規範を伝えられたグループの児童は、攻撃行動に関する規範が存在しない集団の児童よりも、攻撃の意図を示すことが実証している。Brown (2006) は、162 名の概ね 16 歳から 18 歳の 10 年生から 12 年生の生徒を対象に、質問紙調査を行っている。なお、Brown (2006) は、TPB の要因である PBC の代わりに、類似した要因として自己効力 (self-efficacy) を用いた、修正モデルを適用している。その結果、挑発に対して攻撃的に反応しようとする意図、すなわち反応的攻撃性には、態度が最も大きな影響を及ぼし、また、道具的攻撃 (能動的攻撃に相当すると考えられる) の攻撃意図には、自己効力が、最も大きな影響があったことを明らかにしている。これらの研究について、扱われている攻撃性について、反応的攻撃性と能動的攻撃性の区別は、Brown (2006) 以外は明確ではないが、TRA 及び TPB を構成する各変数は、それぞれ攻撃行動の予測に有効であることが示されている。

EMGB の攻撃行動への適用は、Richetin et al. (2011) によって行われ、制約はあるものの、モデルの有効性が確認されている。

Richetin et al. (2011) は、大学生の調査協力者に対し、反応的攻撃としての言語的攻撃性に関して、EMGB を構成する要因を測定した。調査は 2 回のセッションから構成されていた。調査参加者は、最初のセッションで、誰かに腹が立ったときに、攻撃行動として腹が立った相手の名前を呼ぶことについて、GD、態度、主観的基準、PBC、BD、期待される感情および意図の強さについて答えた。2 回目のセッションでは、調査参加者は、前回のセッションからの 2 週間で誰かに腹が立ったときにとった行動について、Richardson Conflict Response Questionnaire (RCRQ) の下位尺度である 10 個の項目からなる直接的攻撃行動について評定した。その結果、GD は言語的攻撃行動に直接は関係せず、BD を介して、攻撃行動の直接の先行要因である意図に影響を及ぼした。態度、否定的感情の予測 (Negative Anticipated Emotion: NAE)、SN は有意ではなかったが、肯定的感情の予測 (Positive Anticipated Emotion: PAE) と PBC は相手の名前を呼ぶという行動の願望 (BD) の有意な予測要因であった (Figure 5)。

このように、TRA、TPB 及び EMGB の各意図的行動の理論は、攻撃行動に対して

も適用可能であることが示された。

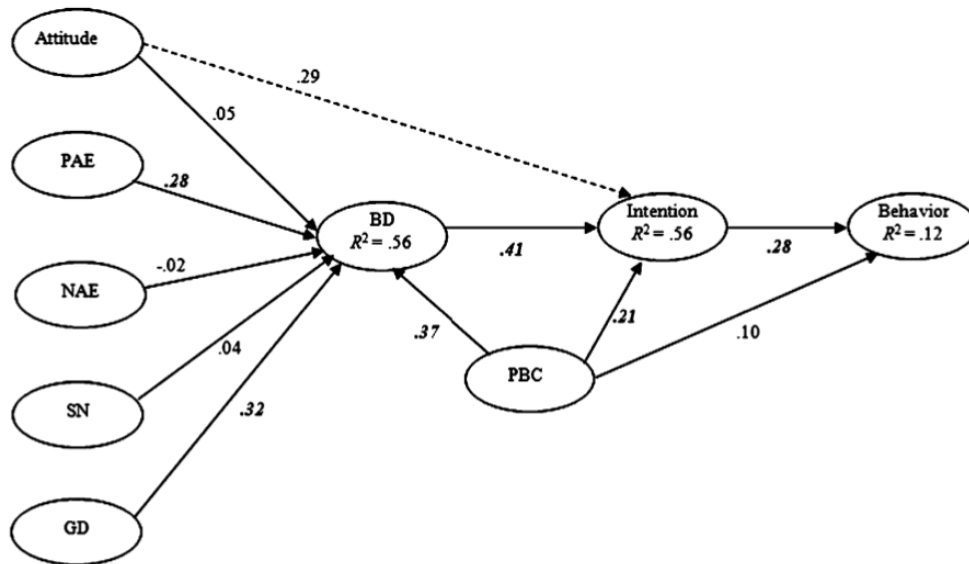


Figure 5 Richetin et al. (2011) による攻撃行動の EMGB

#### (6) SIP への導入という観点からの意図的行動の理論の検討

意図的行動の理論に含まれる要因と感情 SIP のモデル内の要因を比較検討すると、意図的行動の理論に含まれる要因は、感情 SIP モデルの反応決定、結果の予想・感情の予想、反応評価に集約されるとともに、SIP には含まれていない要因として GB が存在する。

前節で述べた意図的行動の理論を攻撃行動に適用した先行研究を、SIP モデルの観点から検討するため、そのうちに TRA と TPB の変数も含む EMGB の理論に取り入れられている要因と感情 SIP モデル内の要因との対応関係を検討してみると、以下である。

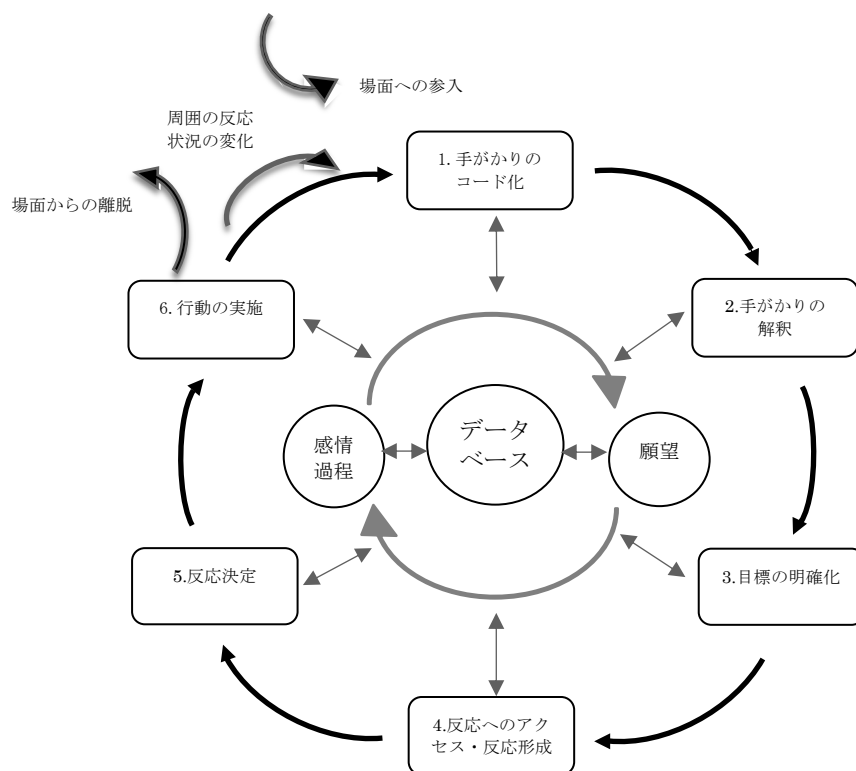
行動意図及び BD は、攻撃を行おうとする意思であるから、ともに SIP の反応決定に対応し、SIP では反応決定と一つの要因とされているものを細分化したのと考えられる。態度は、その行動がある結果を導くであろうという信念と、その結果に対する評価から構成されるものであるから、ほぼ結果の予想・感情の予想 (outcome expectations・emotion expectations) と反応評価に相当すると考えられる。SN は、規範信念と、そうした期待に従おうとする動機から構成されるのであるから、これも SIP の反応評価に加えて、SIP モデルではデータベースに存在すると考えられる規範に関する信念を合わせたものに相当するといえよう。PAE と NAE は、その攻撃行動

を行うことによって得られる感情面での予想であるから、SIP のステップ 5 内の変数である結果の予想・感情の予想 (outcome expectation-emotion expectations) の、特に感情の予想の部分に相当するであろう。PBC は、自分が望めば所与の行為をすることが自分にとってどのくらい可能であるかについての知覚であるから、SIP の自己効力の評価 (self-efficacy evaluation) に相当すると考えられる。GD は、「誰かに腹が立ったとき、その人の名前を呼ぶ最も大きな理由はなんだと思いますか。」という問いと、「Y (先に述べた名前を呼ぶ理由) をしたい願望はどれくらい強いと思いますか。」などの問いを通じて測定されており、ステップ 3 の目標の明確化に近いものと考えられる。しかし、例えば、Richetin et al. (2008) においては、GD は、炭酸飲料を飲む理由を問う質問と、次にその炭酸飲料摂取の願望の強さを尋ねることで測定されているように、本来 GD は、目の前の状況への反応としての願望に限られることなく、好きな飲み物を飲みたい、体重を減らしたい、良い成績を収めたいといった、生活の中で人が抱きうる何らかの目標としての願望として捉えられる。そして、これが反応の生成や反応の評価に影響を及ぼすと予想されるのであり、既存の SIP モデルにおける与えられた場面での目標の明確化よりも、より一般的で、目先の状況に縛られないものと考えられる。これは、従来の SIP モデルには含まれていないものである。

これらの対応関係を踏まえれば、能動的攻撃性の予測に有効であると考えられる TRA, TPB, EMGB という意図的行動の理論を構成する要因は、感情 SIP の反応決定、結果の予想・感情の予想、反応評価に集約され、これ以外に、SIP には含まれていない要因として GB があると考えられる。このように、意図的行動の理論の検討から、GBこそが、能動的攻撃性の検討に際して、動機づけに関わる変数として、新たに SIP モデルに導入されるべきものであることが示された。

## (7) 新たなモデルの提示と実証的な検討

ここまでの検討を踏まえて、本論文では、感情 SIP に、動機づけに関する変数である願望 (Goal Desire: GD) を加えたモデルを提示し (これを、統合 SIP モデルとする)、このモデルの理論的妥当性を以下の章において実証的に検討する。また、このモデルにおいては、ステップ 6 の行動の実施から、次のサイクルのステップ 1 の手がかりのコード化へと移行する際に、先のサイクルでの行動の実施が周囲の状況に及ぼした影響を反映する流れと、その場面を離れたりと、逆に他の場面からその場面に入ってくるような流れを新たに付け加えている。Figure 6 に仮説モデルを示す。



**Figure 6** 本研究で検討する統合 SIP モデル

これは、感情 SIP に願望変数を加えたものである。ここで、願望とは、現実の状態とは距離がある何らかの状態を目指すという目標を実現することへの欲求を表す。この願望は、主として能動的な情報処理過程に影響を与える。すなわち、感情過程と相互作用しつつ、認知処理過程に直接影響を及ぼすとともに、データベースとの媒介をなす過程で、間接的にも影響を及ぼす。

このモデルでは、人間の攻撃行動の説明モデルとして循環的な過程を想定しており、ある社会状況における人の反応としての行動は、反応的な情報処理過程を経て決定されるが、この反応によって、人は自らの願望や信念の影響の下、新たな状況を作り出したり、新たな状況に踏み込んでいったりする。また、認知、感情、願望は一連のサイクルを経て実行された行動の結果により修正されたり、新たに形成されたりし、次のサイクルの情報処理に影響を及ぼす。

本研究においては、以下、第 3 章において、統合 SIP モデルのうち、修正感情 SIP モデルに該当する部分の予測力を反応的攻撃性において確認する。次に、第 4 章において、統合 SIP モデルの予測力を、能動的攻撃性において確認する。そして、第 5 章

においては、第3章及び第4章の結果を踏まえ、統合 SIP モデルについて全般的考察を行う。

なお、本研究においては、上記モデルを検討する方法として、場面想定法 (hypothetical situation method, Crick & Dodge, 1994) を採用する。場面想定法とは、調査協力者に対し、ある具体的な場면을提示し、その場面が実際に自分自身に生じたと想定させ、その事態に対する調査協力者の判断等を報告させるものである。用いられる場面のことをビネット (vignette) と呼ぶことから、ビネット調査などとも呼ばれ、心理学以外にも、社会学、経営学、教育学など、様々な研究領域で用いられている (松田, 2019)。この場面想定法は、多くのデータを一度に収集できる、複数の変数を同時に操作可能である、観察者効果を排除できる、観察法等における倫理上のジレンマを回避できるといった利点を持つ (Gould, 1996)。

攻撃性の研究において、Dodge らの SIP モデルに関する一連の研究を中心に、場面想定法は主要な研究方法の一つとして用いられてきた (例えば, Crick & Dodge, 1994)。この方法が多く用いられたのは、一つには、Dodge らが学童期の児童を主な研究対象としていたため、日常的な体験を自己報告することが困難であると予想されたことに加えて、より実際経験に近い形で調査協力者の体験を報告させることを重視していることが関係している。また、彼らが当初主に検討した敵意帰属のような認知様式は、その条件の下で一時的に体験されるものがあり、しかも、体験内容がネガティブなものであるから、必ずしも明確に自覚されるとは限らない。そのため、実際経験に近い体験を調査協力者に直接与え、その時の体験を報告させる必要性があったものと考えられる (相澤, 2010)。

このように、場面想定法は、方法論的な有効性を持つ一方で、あくまでも架空の設定に対する調査協力者の反応を測定するものであり、そこで得られた結果が現実の行動をどれだけ反映しているかには検討が必要である。一般に、ビネット法で得られる回答傾向は、現実世界における人々の意識・行動と類似することを示すとする研究

(Hainmueller, Hangartner & Yamamoto, 2015) がある一方で、攻撃行動については、攻撃意図と実際の攻撃の間には中程度の相関があることや (Ajzen & Fishbein, 1977)、場面想定法によって測定された SIP 変数と実際の攻撃行動は中程度の相関を示すことが明らかとなっている (Dodge & Price, 1994)。攻撃行動に関して、場面想定方の結果と実際の行動の相関が、一般の行動とのそれに比較して低めであるのは、攻撃行動は社会的に抑制される行動であることが影響していると考えられる。

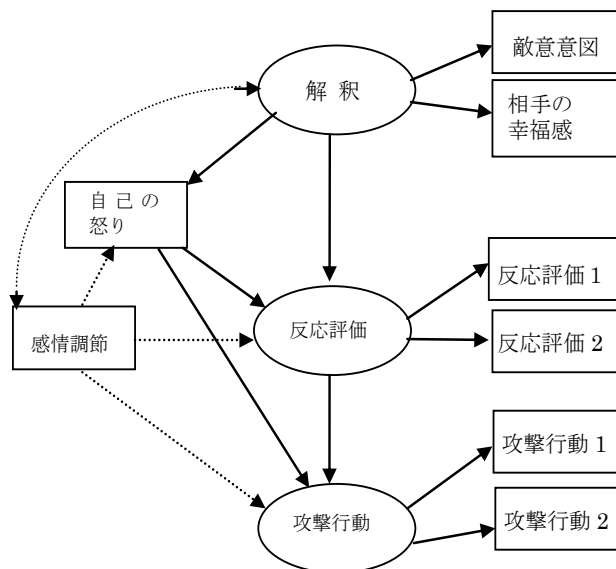
これらを踏まえると、攻撃性の一般モデル構築を目指す本研究においては、モデル検討のために複数の要因を同時に操作する必要があること、及び現実の攻撃行動を引き起こす実験場面を設定することには倫理的な制約があることから、場面想定法を用いることが適切と考え、これを採用することとした。



### 第3章

#### 反応的攻撃性の検討

第3章における目的は、反応的攻撃性において、感情 SIP に、動機づけ変数である願望を加えた統合 SIP モデルのうち、特に反応的攻撃性に深く関わりと想定される部分について、これまで検討されたことがない日本人を対象として、改訂版 SIP モデルと比較してその予測力を確認することである。その際、全てのモデル内の要因を取り上げることは困難であるから、統合 SIP モデルのうち、オランダ人を対象に感情 SIP の有効性を確認した de Castro et al. (2005) を踏まえて、反応的攻撃性に大きな影響を及ぼすことが確認されている解釈段階、反応評価段階、攻撃行動段階という認知変数と、怒りと感情調節という感情変数を取り上げる (Figure 7)。なお、回答には社会的望ましさの影響が混入する可能性があるため、参加者の社会的望ましさの反応傾向を測定し、仮説検証においてその影響を排除するよう試みる。



(実線は促進的なパスを、破線は抑制的なパスを示す)

Figure 7 本実験で検討する仮説モデル

## 1 一般青少年における反応的攻撃性：研究1

### (1) 目的

研究1においては、一般の青少年を対象に、統合 SIP モデルの予測力を検討する。

研究1における仮説は、以下である。すなわち、怒りと感情調節という感情変数を組み込んだ仮説モデル (Figure 7) は、これを組み込まない改訂モデルより攻撃行動の予測において優れているであろう (仮説1)。感情変数に関して、攻撃的な人は非攻撃的な人よりも怒り感情が強く、感情調節は弱いであろう (仮説2)。また、認知変数に関して、敵意意図の帰属が高く、攻撃行動を肯定的に評定する傾向も強いであろう (仮説3)。

### (2) 方法

#### 参加者と手続き

日本の大学及び専門学校男子学生 130 名に対し、集団で質問冊子を配布し、回答を求めた。参加者の平均年齢は 19.77 歳 ( $SD1.24$ ) であった。この質問冊子は、場面想定法によって、SIP モデルの各段階と感情変数を測定する質問項目、社会的望ましさ、能動的攻撃性、反応的攻撃性を測定する尺度から構成されている。

#### 変数とその測定

**社会的情報処理変数** 相澤 (2011) が使った 3 つの対人挑発場面を用い社会的情報処理変数と感情変数を測定した。

対人挑発場面は、(a) 主人公が見知らぬ男性に追突される、(b) 主人公が教室で読書をしているときに他の学生に灯りを消される、(c) 主人公がタクシーを呼び止めたのに無視される、の 3 つで、参加者に「実際にあなたにそのようなことが起こったと想像してください」と指示した。

**加害者の意図の知覚** 「どうしてその若い男性は、あなたにぶつかったのでしょうか (灯りを消したのでしょうか、無視したのでしょうか)。次のそれぞれが、それくらい当てはまると思いますか。」と聞き、敵意 (「わざとぶつかった」)、偶然 (「気づかなかった」)、あいまい (「自分の方が避けると思った」) の 3 項目について「全くそう思わない (1 点)」から「非常に強くそう思う (9 点)」までの 9 段階尺度で回答させた。

**加害者の感情の知覚** 「その若い男性は、次のそれぞれの感情を、どのくらい強く、感じていたと思いますか。あてはまる選択肢の番号に○印をつけてください。」と聞き、怒り、うれしさの 2 つのそれぞれを、どれくらい強く感じていたと思うかを、「非

常に弱く（1点）」から「非常に強く（9点）」までの9段階尺度で回答させた。

**自己の怒り** 自分が主人公だったら怒りを、どのくらい強く感じると思うかを、「非常に弱く（1点）」から「非常に強く（9点）」までの9段階尺度で回答させた。

**感情調節** de Castro et al.（2005）は、適応的な感情調節として解決、気晴らし、認知的の3種類を測定したが、我々が予備研究において、本研究と同じ場面設定で、どのような行動をとるか日本の大学生68人に自由記述で尋ねたところ、解決（攻撃的でない形でその問題を解決する試みに言及）にあたるものがほとんど見られなかったこと、一方、気晴らしには「不快なことを考えないようにする」といった消極的なものと「他に好きなことや楽しいことをする」といった積極的なものの二種類が見られたことを踏まえて、本研究では（適応的）感情調節として、積極的気晴らし、受動的気晴らし、認知的調節の3種類を測定した。

参加者には「自己の感情で回答したような気持ちになったとき、あなたは自分の気分を改善するために、次のことを、それぞれ、どのくらいすると思いますか」と尋ね、積極的気晴らしは「誰かに、あったことを話す」「好きなことや楽しいことをする」の2項目、受動的気晴らしは「そのことを考えないようにする」「そのことを忘れる」の2項目、認知的調節は「相手も急いでいたのだろうから、しょうがないと考える」「こういう、ついていない日もあるものだ、と考える」の2項目で測定した。これらの項目を場面ごとに、「まったくそうしない（1点）」から「必ずそうする（9点）」の9段階尺度で回答させた。

**攻撃反応** 「その男性を追いかけて、声をかけて振り向かせ、謝らせる。」という弱い攻撃を測る項目（弱攻撃行動）と、「その男性の肩をつかんで、振り向かせる」という強い攻撃を測る項目（強攻撃行動）の2項目で攻撃行動を測定した。これらの項目を場面ごとに、「まったくそうしない（1点）」から「必ずそうする（9点）」の9段階尺度で回答させた。

**反応評価** 上記2種類攻撃行動について、「このような場面において、その行動がどれくらい良い行動だと思いますか？」と尋ね、「全く良いと思わない（1点）」から「非常に良いと思う（9点）」の9段階尺度で回答させた。

**社会的望ましさ** 自己欺瞞と印象操作の2尺度24項目から成るバランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（BIDR-J）（谷，2008; Paulhus, 1991）を実施した。前者は回答者が本当に自分の自己像であると信じて無意識のうちに社会的に望ましい回答をする傾向を、後者は故意または意図的に回答を良い方向、あるいは悪い方向にゆがめ、

真実の自己像を偽る見せかけの回答を行う傾向を測定する。「以下のそれぞれの質問に付いて、あなたはどの程度当てはまりますか？」と尋ね、「全くあてはまらない（1点）」から「非常に当てはまる（7点）」までの7段階尺度で回答させた。

**特性攻撃性** 参加者の特性攻撃性を測定するために、濱口（2004）の反応的攻撃尺度及び濱口（2005）能動的攻撃性を使用した。この尺度は、反応的攻撃性尺度が12項目、能動的攻撃性尺度が30項目からなる。この尺度は中学生向きに開発されたものであるが、高校生にも適用可能であることが明らかにされている（石川、濱口、江口、三鈺，2007）ことから、大学生や専門学校生を対象とした本研究においても十分使用可能であると判断し、そのまま使用した。参加者には、「以下のそれぞれの質問に付いて、あなたはどの程度当てはまりますか？」と尋ね、「いいえ（1点）」から「はい（4点）」まで、4段階尺度で回答させた。合計得点を尺度得点とした。

### （3）結果

反応的攻撃性尺度と能動的攻撃性尺度は有意に相関したので（ $r=.64, p<.01$ ），合計を特性攻撃性得点とした。特性攻撃性，自己欺瞞，印象操作の各尺度の信頼性は， $\alpha=.89$ ， $\alpha=.70$ ， $\alpha=.65$ であった。後者2尺度が若干低めだったが，許容範囲とみなして合計点を分析に用いた。SIPモデルの各変数の得点はすべて3場面の合計とし，その平均点と標準偏差をTable 1に示す。

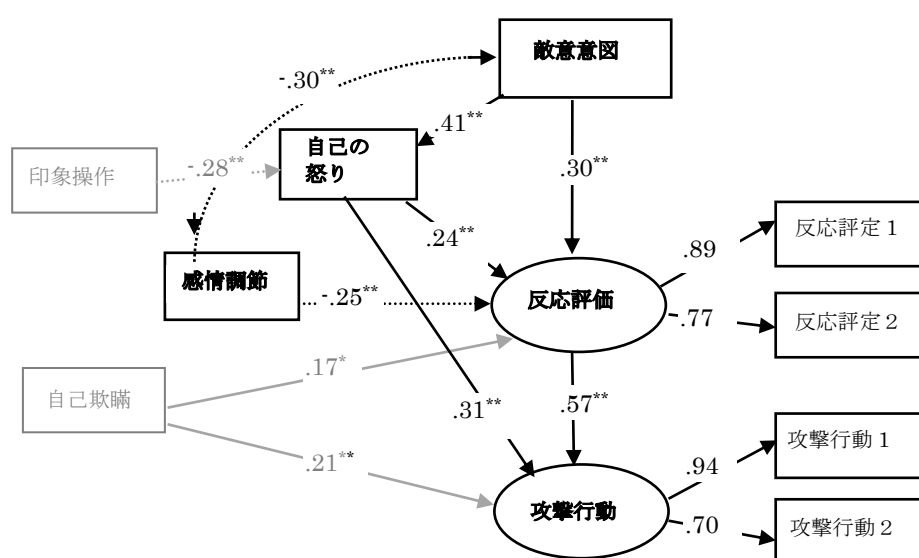
**Table 1** 大学生等の記述統計量

	平均値	標準偏差
自己欺瞞	41.35	9.38
印象操作	39.66	9.58
敵意意図	15.77	4.85
相手のうれしさ	8.92	4.54
自己怒り	21.47	4.74
適応的感情調節	99.59	21.81
反応評価1	14.12	6.00
反応評価2	10.55	5.57
攻撃行動1	11.25	5.85
攻撃行動2	7.29	4.45

### モデルの検討

Figure 7に示した仮説モデルの妥当性を検討するために，Amos Ver.20.0 for Windowsを用いて共分散構造分析を試みた。Figure7の仮説モデルに，社会的望まし

さ反応を表す印象操作と自己欺瞞を加えたものを初期モデルとし、有意でないパスを順次削除していくことで最終的に得られたモデルを Figure 8 に示す。その際、解釈に対する相手のうれしさの因子負荷量が非有意だったことからこの観測変数を除き、敵意の観測変数だけを残した。このようにモデルを一部改変したが、これは十分な適合度を示したので、認知変数と感情変数からなる統合 SIP モデルは十分な妥当性を持つものといえよう ( $\chi^2(21) = 15.69, p = .79, GFI = .97, AGFI = .95, CFI = 1.00, RMSEA = .00$ )



$\chi^2$ 値=15.69  $df=21$   $p=.79$

GFI=.97 AGFI=.95 RMSEA=.00

$^{\dagger}p<.10$   $^*p<.05$   $^{**}p<.01$

(実線は促進的なパスを、破線は抑制的なパスを示す)

**Figure 8 男子大学生の社会的情報処理過程および感情過程のモデル**

## 回帰モデルの検討

仮説 1 を検討するため重回帰分析を行った。反応評価 1，反応評価 2 を合計して「反応評価」変数を，弱攻撃行動と強攻撃行動を合計して「攻撃行動」変数を合成し，これを分析に用いた。その上で，まず，攻撃行動を被説明変数，Figure 8 のモデルに含まれる変数を説明変数とする分析を実施した。Step 1 では認知変数のみを投入して回帰係数を算出し（改訂 SIP モデル），次に Step 2 で感情変数を追加投入して（統合 SIP モデル）決定係数が増加するかどうかを検討した（Table 2）。統合 SIP モ

デルは ( $R^2=.52$ ,  $F(6,123)=21.91$ ,  $p<.001$ ) で、改訂 SIP モデルよりも ( $R^2=.48$ ,  $F(4,125)=29.09$ ,  $p<.001$ ) 決定係数が有意に高かった ( $\Delta R^2=.03$ ,  $\Delta F(2,122)=4.24$ ,  $p<.05$ )。その増分は主として自己の怒りに起因していた ( $\beta=.20$ )。

**Table 2** 大学生等の攻撃行動を目的変数とした階層的重回帰分析の結果

ステップ	説明変数	Step 1		Step 2	
		$\beta$	$t$	$\beta$	$t$
第1ステップ	自己欺瞞	.19	2.80 **	.21	3.18 **
	印象操作	-.12	-1.81	-.06	-.98
	敵意意図	.19	2.63 *	.13	1.76
	反応評定	.55	7.76 **	.49	8.71 **
第2ステップ	自己の怒り			.20	2.70 **
	感情調節			-.05	-.78
$R^2$			.48		.52
$\Delta R^2$			.48 **		.03 *

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ .

**攻撃群と非攻撃群の比較** 特性攻撃性得点のメディアン (85.00) によって参加者を攻撃性高群 (64 人) と攻撃性低群 (66 人) に分けた、それらの間で Figure 7 に含まれる認知変数と感情変数の平均値を比較したところ、反応評定、自己の怒り、攻撃行動において高群が低群よりも有意に高く、敵意意図については高群の方が非有意だが、高い傾向を示した。一方、感情調節、印象操作に関しては低群の方が高群よりも有意に高かった (Table 3)。

**Table 3** 攻撃性の高群と低群による  $t$  検定の結果

	$t$ 値	自由度	有意確率	
自己欺瞞	-0.90	128	.368	
印象操作	4.50	128	.000 **	低群 > 高群
敵意意図	-1.78	128	.077 †	低群 < 高群
相手のうれしさ	-0.27	128	.790	
自分の怒り	-4.32	111.59	.000 **	低群 < 高群
感情調節	4.19	128	.000 **	低群 > 高群
反応評定	-2.85	128	.005 **	低群 < 高群
攻撃行動	-4.62	128	.000 **	低群 < 高群

† $p<.10$ , \*\* $p<.01$ ,

#### (4) 考察

感情変数を組み込んだ仮説モデルは、認知変数のみのものより攻撃行動の予測において優れていたことから、仮説1は支持された。de Castro et al. (2005)はオランダの7歳から13歳の攻撃的行動の問題を抱えた少年54人と初等学校 (elementary school) の生徒からなる対象群30名をサンプルとする研究によって統合SIPモデルを検証したが、一部変数の変更があったとはいえ、基本的には同じ変数群からなるモデルが日本の大学生等を対象にして確認された。その改善の増分は、主として自己の怒りとに起因していた。

この結果は、基本的には、認知変数では敵意意図の帰属が、感情変数では感情調節が攻撃行動の生期に対して影響力を持つという de Castro et al. (2005) 結果と一致するものだが、加えて本研究では怒り強度もこのプロセスに寄与していた。日本人の大学生等においては、怒りは反応評定を介して間接的に攻撃行動に影響を与えるとともに、直接に攻撃行動を促進もするが、相手の敵意意図の知覚や感情調節は、相手に対する攻撃的行動を肯定的に評価することに影響を与え、攻撃行動へは、その反応評定を経て間接的にのみ影響を与えることが示された。これは、本研究の参加者である大学生等は、攻撃性の問題を抱える児童に比べると攻撃性が低いにも関わらず、基本的に同じ認知・感情プロセスが攻撃行動の生起を規定していることを示すもので、そのプロセスの普遍性を示唆するものである。

仮説モデルを構成する諸変数について攻撃性の高い者と低い者を比較すると、前者は後者よりも怒り感情が強く、感情調節が低いことが示され、仮説2が支持された。認知変数に関しては、de Castro et al. (2005) の研究と異なり、敵意意図の知覚の差はそれほど小さくなく、むしろ攻撃的反応を肯定的に評価する傾向に明確な差が見られており、仮説3は部分的に支持された。これは、本研究の参加者が一般の大学生等という攻撃性の低い人たちであったため、攻撃性の問題を抱える対象者を扱った先行研究に比べると、参加者の敵意バイアスがそれほど顕著ではなかったことを示すとともに、反応評価が攻撃性の遂行を決定する重要な要因であることを示唆している。

## 2 非行少年における反動的攻撃性：研究2

### (1) 目的

研究1において、統合SIPモデルは、感情変数を含まない認知変数のみから構成される改訂SIPモデルよりも攻撃行動の予測において優れていることが示された。しか

し、研究1の対象者は全般的に攻撃性の低い大学生等であったことから、より攻撃性が高い対象者における理論的有効性の検証が必要と思われる。そこで研究2では研究1とは異なるサンプルを対象に統合 SIP モデルの再検討を試みた。具体的には、大学生等よりも攻撃性が高いと考えられる非行少年を対象に、感情変数を組み込んだ統合 SIP モデルがこれを組み込まないものよりも攻撃行動の予測において優れているかどうかを検討する。また、本研究では、非行少年においても攻撃性の高い者と低い者では、このモデルを構成する諸変数において強度差があるかどうか、すなわち、攻撃的な人は非攻撃的な人よりも、感情変数においては怒り感情が強く、感情調節が低く、認知変数においては、敵意の知覚と攻撃行動を肯定的に評価する傾向が強いかどうかを検証する。なお、研究1と同様、本研究においても、社会的望ましさを測定し、仮説検証においてその影響を排除するよう試みる。

本研究における仮説は、以下である。すなわち、非行少年において、怒りと感情調節という感情変数を組み込んだ統合 SIP モデル (Figure 7) は、これを組み込まない改訂 SIP モデルよりも攻撃行動の予測において優れている (仮説1)。非行少年の中でも攻撃的な人は非攻撃的な人よりも怒り感情が強く、感情調節は低いであろう (仮説2)。また、攻撃的な人は敵意意図を帰属する傾向が強く、攻撃行動を肯定的に評定する傾向も強いであろう (仮説3)。

## (2) 方法

### 手続き及び参加者

参加者は少年鑑別所入所中の男子少年 82 名。平均年齢 16.4 歳 ( $SD1.4$ )。参加者には、研究1と同様、場面想定法によって、統合 SIP モデルを構成する諸変数に対する質問項目、及びバランス型社会的望ましさ尺度日本語版、濱口 (2004, 2005) の反応的攻撃尺度及び能動的攻撃性尺度に回答を求めた。これらの測度を含む冊子を少年の居室に配布して一人で回答するように指示した。

## (3) 結果

### 記述統計と尺度の分析

反応的攻撃性尺度と能動的攻撃性尺度は有意に相関したので ( $r=.61, p<.01$ )、合計を特性攻撃性得点とした。特性攻撃性、自己欺瞞、印象操作の各尺度の信頼性は、 $\alpha=.93$ ,  $\alpha=.60$ ,  $\alpha=.79$  であった。自己欺瞞尺度が若干低めだったが、許容範囲とみな



し合計点を分析に用いた。SIP モデルの各変数の得点は、実験 1 と同様、3 場面の合計とし、その結果得られた各尺度の平均点と標準偏差を Table 4 に示す。

**Table 4 少年鑑別所入所少年の記述統計量**

	平均値	標準偏差
自己欺瞞	39.83	8.02
印象操作	40.98	12.04
敵意意図	15.39	4.99
相手のうれしさ	8.76	4.69
自己怒り	20.61	5.46
適応的感情調節	90.79	24.14
反応評価1	13.95	6.21
反応評価2	10.71	5.32
攻撃意図1	13.15	6.31
攻撃意図2	9.24	5.89

## モデルの検討

仮説モデルを検討するために、Amos Ver.20.0 for Windows を用いて、共分散構造分析による分析を行った。Figure 7 に、社会的望ましき反応尺度の下位尺度である印象操作と自己欺瞞を加えたものを初期モデルとし、Amos の修正指標を参考にしてパスを追加するとともに、有意でないパスを順次削除していくことで最終的に得られたモデルを Figure 9 に示す。大きな変更点としては、感情調節が有意なパスを持たずパス図から消えたこと、及び社会的望ましき反応尺度の二つの下位尺度間に相関のパスを加えたことである。その結果、感情過程で感情調節による抑制が働かず、改訂モデル (Crick & Dodge, 1994) に、自己の怒りという促進的な変数を加えたモデルとなった。その適合度はほぼ信頼できるレベルに達した ( $\chi^2 (22) = 27.92, p = .18, GFI = .93, AGFI = .85, CFI = .98, RMSEA = .06$ )。

## 回帰モデルの検討

仮説 1 を検討するため、攻撃行動を被説明変数、仮説モデルに含まれる変数を説明変数とする重回帰分析を行った。Step 1 で認知変数のみを投入して回帰係数を算出し (改訂 SIP モデル)、次に Step 2 で感情変数を追加投入して (統合 SIP モデル) 決定係数が増加するかどうかを検討した (Table 5)。統合 SIP モデルは ( $R^2 = .71, F (7, 74) = 25.34, p < .001$ ) 改訂 SIP モデルよりも ( $R^2 = .66, F (5, 76) = 29.22, p < .001$ ) 決定係数が有意に高かった ( $\Delta R^2 = .05, \Delta F (2, 74) = 6.01, p < .01$ )。その増

分は主として自己の怒り ( $\beta=.27$ ) に起因していた (Table 5)。

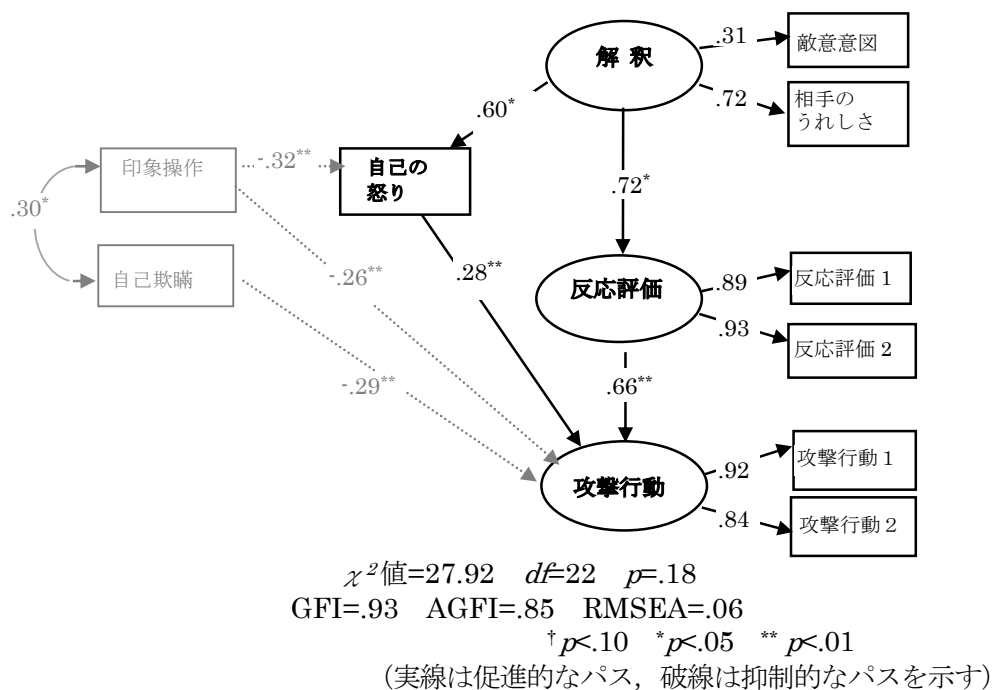


Figure 9 少年鑑別所入所男子の社会的情報処理過程および感情過程のモデル

Table 5 非行少年の攻撃行動を目的変数とした階層的重回帰分析の結果

ステップ	説明変数	Step 1			Step 2		
		$\beta$	$t$		$\beta$	$t$	
第1ステップ	自己欺瞞	.18	2.46	*	.17	2.60	*
	印象操作	-.30	-4.01	**	-.20	-2.59	*
	敵意意図	.22	2.92	**	.13	1.63	
	相手のうれしさ	.07	1.01		.11	1.58	
	反応評価	.53	6.90	**	.44	5.76	**
第2ステップ	自己の怒り				.27	3.13	**
	感情調節				-.07	-.95	
$R^2$			.66			.71	
$\Delta R^2$			.66	**		.05	**

\*  $p<0.05$ , \*\*  $p<0.01$

## 攻撃群と非攻撃群の比較

特性攻撃性得点の、攻撃性尺度に欠損値を持つ者を除いた残りの参加者（77人）をメディアン（77.00）によって攻撃性高群（38人）と攻撃性低群（39人）に分けた。攻撃性高群と低群の間で Figure 9 のモデルに含まれる認知変数と感情変数の平均値を比較したところ、Table 6 に示すように、敵意意図、反応評定、自己の怒り、攻撃行動において高群が低群よりも有意に高く（ $t(75) = -2.18$ ,  $t(75) = -2.72$ ,  $t(75) = -3.64$ ,  $t(75) = -10.08$ ,  $p < .05$ ）、感情調節、印象操作に関しては低群の方が高群よりも有意に高かった（ $t(75) = 2.87$ ,  $t(75) = 4.38$ ,  $p < .05$ ）。

**Table 6** 攻撃性の高群と低群による  $t$  検定の結果

	t 値	自由度	有意確率	
自己欺瞞	0.38	75	.706	
印象操作	4.38	75	.000 **	低群 > 高群
敵意意図	-2.18	75	.032 *	低群 < 高群
相手のうれしさ	-1.43	75	.156	
自分の怒り	-3.64	62.81	.001 **	低群 < 高群
感情調節	2.87	75	.005 **	低群 > 高群
反応評定	-2.72	75	.008 **	低群 < 高群
攻撃行動	-10.08	75	.000 **	低群 < 高群

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ .

## （４）考察

以上の結果から仮説 1 は支持された。感情変数を組み込んだ統合 SIP モデルは、認知変数のみのモデル（改訂版モデル）よりも攻撃行動の予測において優れていた。その改善の増分は自己の怒りに起因していた。また、認知変数では、攻撃行動を肯定的に評価する程度である反応評定が最も大きな影響を及ぼしていた。モデル検討においては感情調節の効果が見られなかったが、これは反社会的行動問題を抱える非行少年において、怒りを適応的に処理するような感情調節が攻撃行動の抑制のために有効に機能していないことを示唆している。また、大学生等とは違って、非行少年では相手の幸福感知覚が攻撃行動の生起に至るプロセスを促進していたが、これは、非行少年は、社会的葛藤場面で加害者の悪意を強く知覚することが、攻撃行動を動機づけることを示している。

仮説 2 及び仮説 3 は支持された。Table 6 に示されるように、非行少年で攻撃性が高

い者は、怒り感情が強く、感情調節を用いる程度が低いことが示された。また、認知変数について、攻撃性が高い者は、敵意意図の知覚及び反応評定が高いことが示された。なお、大学生等では非有意な傾向だった敵意意図の知覚が、非行少年では明確に差があることが示された。これは、先に述べた加害者の幸福感の知覚と同じく、非行少年は、社会的葛藤場面での加害者の意図の誤帰属が攻撃行動に結びつきやすいことを示している。また、モデル検討では有意でなかった感情調節において攻撃性の高低群の差が有意だったことは、それが攻撃行動の生起に何らかの影響を与えていることを示唆している。これについては、全体的考察において検討したい。

### 3 全体的考察

研究1及び研究2を通して、感情変数を組み込んだ統合 SIP モデルは、認知変数のみの改訂モデルよりも攻撃行動の予測において優れていた。そして、その改善の増分は自己の怒りに起因していた。認知変数では、攻撃行動を肯定的に評価する程度を示す反応評定が最も大きな影響を及ぼしていた。

解釈の構成要素である相手の幸福感知覚が非行少年においてのみ攻撃行動の生起を促した点は、de Castro et al. (2005) の研究で見られたように、彼らがしばしば相手の感情を敵対的に誤帰属し、これが攻撃行動を誘起するものであることを示唆している。

感情変数について、大学生等及び非行群を通じて攻撃的な者は怒り感情が強く、感情調節が弱いことが示された。また、非行少年においては、感情調節が認知的過程を抑制せず、怒りが攻撃行動を促進していることも明らかとなった。このことは、先行研究において指摘されてきたように、攻撃傾向が強い者は、認知的な過程に歪みがあるのみならず、加えて、感情制御にも問題があることを示している。SIP は（例えば、Crick & Dodge, 1994）、反応的攻撃性の高い児童の攻撃行動を説明することを目的として構築され、主としてこの観点から検討されてきたという歴史的経緯を持つ。de Castro et al. (2005) の研究は、感情過程も含めたより包括的なモデル構築を目指し、原モデルに感情調節と怒りという変数を加えたものである。しかし、本研究の結果からは、非行少年では、感情調節が十分に機能しておらず、怒り変数のみが追加に値することが示された。このことは、Dodge らの認知変数から構成された SIP は、攻撃性が高い者の攻撃行動決定過程をよく表しているとともに、Dodge (1991) で自身が述べているように、怒り感情が認知的プロセスを駆動するエネルギーとして働いて

いる可能性を示すものである。これに対して、統合 SIP モデルは、攻撃性の低い一般群についても適用可能なようにこれを拡張したものと言えよう。

非行少年において感情調節の効果が見られなかったことについては、いくつかの解釈が可能である。第 1 は、非行少年も適応的な感情調節を行えるが、怒りの影響が強く、認知過程に及ぼす影響を十分に抑えるまでには至らないという可能性がある。攻撃性高群と低群の比較からは、大学生等においても非行少年においても、攻撃性の高い者は怒りが強くかつ感情調節を行いにくいことが示されている。また、非行少年の方が大学生等よりも、自己の怒りの平均値が高い。ここから、怒りの強さと比較して感情調節を行う程度が一定度以下になると、怒りが認知過程に及ぼす歪みを抑制する効果を持たなくなり、攻撃行動に対して十分な抑制機能を発揮しなくなるということが示唆される。

第 2 に、この点について方法論の観点からも考察が必要である。本研究の対象者となった非行少年は少年鑑別所において調査対象となっている者たちであり、本調査は審判には無関係であると説明したとはいえ、そのことを懸念し、社会的に望ましい行動を取ろうとする傾向があったことは否めないであろう。このため、感情調節を実際以上に高く評定していた可能性がある。実際、意識的に自分を良く見せようとする程度を表す印象操作の平均値は、非行少年の方が大学生等よりも高かったし、加えて、大学生等に比べて、非行少年において印象操作が感情調節を含む SIP を構成するより多くの変数と相関を持っていることで示されている。

いずれにしろ、この問題については、感情調節自体のメカニズムを明らかにすることを含めて、今後、さらなる検討が必要である。

## 第4章

### 能動的攻撃性の検討

第4章における目的は、統合 SIP モデルを能動的攻撃性に適用し、その有効性を確認することである。統合 SIP モデルを構成する全ての要因を検討することは困難であるから、先行研究を参考に、能動的攻撃性の予測に有効であると予測される要因を取り上げ、仮説モデルを構築し、これを検証する。すなわち、第2章における検討を踏まえ、能動的攻撃性の予測にも有効であることが実証されている意図的行動の理論を構成する要因に相当する統合 SIP に含まれる要因と、これに動機づけに関わる変数である願望から仮説モデル構築し、能動的攻撃性の予測におけるその効果を検証する。

#### 1 一般青少年における能動的攻撃性：研究3

##### (1) 目的

統合 SIP モデルが能動的攻撃性を予測することを検証するため、意図的行動の理論の立場からなる先行研究の結果を踏まえ、統合 SIP モデル内変数のうち有効と予想されるものの説明力を確認する。すなわち、結果の予想—感情の予想（以下、結果の予想とする）、反応評価を、自己効力の評価（以下、自己効力とする）を取り上げ、これに願望を加え、これらの変数の能動的攻撃性への影響を検討する。Figure10 は研究3における仮説モデルである。

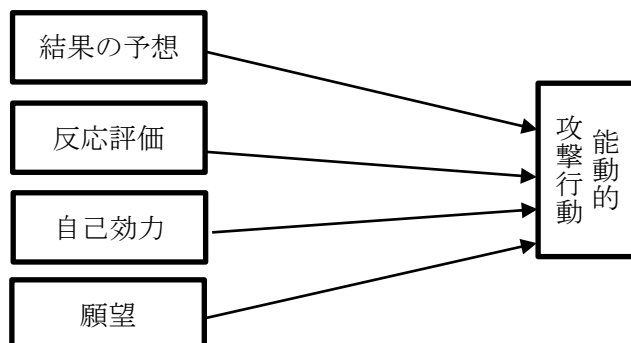


Figure 10 能動的攻撃性の仮説モデル

本研究における仮説は以下のとおりである。

(仮説 1) 結果についての肯定的な予想は、能動的攻撃性を高める。

(仮説 2) 攻撃行動の肯定的評価は、能動的攻撃性を高める。

(仮説 3) 攻撃行動実行に関する自己効力の評価が高いことは、能動的攻撃性を高める。

(仮説 4) 攻撃行動によって達成されるような願望が高まることは、能動的攻撃性を高める。

## (2) 方法

### 研究協力者

男子大学生 91 名 (年齢平均 20.1 歳,  $SD1.3$ )。

### 手続き

学生が大学に登録しているメールアドレスに配信される大学からのお知らせによって研究協力依頼を送付したのち、各学生に個別に、Google form を用いた例示法による実験材料を送付し、学生の回答を回収した。実験協力者には、「人の考え方・感じ方と行動の関係を調べるもの。」と提示した。

各研究協力者は、態度、規範、統制及びコントロール群のいずれかに割り当てられた。態度、規範、統制群は、質問紙の 3 つの場面のいずれにおいても、同じ一つの要因を強める操作をした材料に回答した。実験操作は、例示された場面でのライバルへの攻撃を行う際に、例えば場面 1 において、態度の操作「A さん (あなた) は、どうするのが望ましいか考えました。その結果、これなら良いだろうと思った方法を実行しました。」、規範の操作「A さん (あなた) は、自分が部長になるために、どのようなやり方が良いか周りの人に相談しました。その結果、これなら真ありの人も納得してくれるだろうという方法を実行しました。」、統制の操作「A さん (あなた) は、どのようなやり方なら自分にできそうか考えました。その結果、これなら自分にできそうだという方法を実行しました。」という文言を加えたことである。コントロール群においては、このような文言を省いた。

なお、今回は、モデル検証を主目的にするため、交互作用を含めない実験デザインにした。

### 変数とその測定

## 社会的情報処理変数

新たに作成した、願望が高まるような場面による実験手続きを用いた。実験材料は、以下の3つの場面から構成されており、研究協力者は自分が主人公になったつもりで読むように指示された。話の主人公は、a) 部活動の部長になりたいと考えているが、ライバルがいる。b) 恋愛感情を抱いている相手がいるが、同じく相手に好意を抱いているライバルがいる。c) 奨学金の獲得を目指しているが、同じ奨学金を狙っているライバルがいる。これらの状況で、主人公は、ライバルの弱点や短所である(a)顧問が見ていないところではサボる、b) 他にも交際している相手がいる、c) レポートで不正したことがある) ことを悪い噂として流すという攻撃行動をどれくらい行うかを尋ねられた。

**願望：**3つの場面のそれぞれで、Aさん(あなた)はどれくらい強く、①部長になること、②恋愛の対象と交際することを、③奨学金を獲得することを望んでいるかと尋ね、1(非常に弱く)から9(非常に強く)の9択で答えさせた。

**能動的攻撃性：**3つの場面のそれぞれで、「あなたは、Aさんと同じ行動をどれくらいとりそうですか。」と尋ね、1(全くそうしない)から9(必ずそうする)の9択で答えさせた。

**結果の予想：**「Aさん(あなた)のとった攻撃について、あなた自身はどう思いますか。」と尋ね、「1：悪いー9：良い」、「1：害があるー9：害がない」、「1：不満足なー9：満足な」のそれぞれに答えさせた。

**反応評価：**「Aさん(あなた)のとった行動について、あなたの周りの人たちはどう考えると思いますか？」と尋ね、「自分の親しい人たちなら、こうした場面では、Aさん(自分)のような行動をするべきだと考えるであろう。」、「自分の親しい人たちなら、こうした場面では、Aさん(自分)のような行動をすることに賛成してくれるであろう。」、「自分の親しい人たちなら、こうした場面では、Aさん(自分)のような行動をすることを喜んでくれるであろう。」のそれぞれについて、「1：全くそうでない」から「9：全くそうである」で答えさせた。

**自己効力：**Aさん(あなた)のとった行動について、あなた自身はどう考えますか？」と尋ね、「自分にとって、このような場面で、こうした行動(Bさんの悪い噂を流すこと)を実行することは簡単だ。」、「自分にとって、必要とあらば、こうした行動(Bさんの悪い噂を流すこと)は選択肢のひとつとしてある。」、「自分にとって、こうした行動(Bさんの悪い噂を流すこと)は、やろうと思えばいくらでもできる。」のそ



れぞれについて、「1：全くそうでない」から「9：全くそうである」で答えさせた。

### (3) 結果

結果について、それぞれの変数は、3つの場面の結果を平均した。各変数の記述統計の結果を Table 7 に示す。願望変数の平均が他の変数に比較して高く、研究協力者において、それぞれの場面において設定された願望が強められたことが示された。

**Table 7 各変数の記述統計**

	平均	標準偏差
年齢	20.12	1.29
願望	7.25	1.24
結果の予想	4.21	1.66
反応評価	3.98	1.70
自己効力	5.14	1.89
能動的攻撃性	4.05	1.80

また、Table 8 に各変数の相関を示す。年齢は反応評価のみと有意な相関を示した。結果の予想、反応評価、自己効力それぞれの相関が有意であった。また、これら3変数が、能動的攻撃性と有意な相関を示した。

**Table 8 各変数の相関**

	1	2	3	4	5
1 年齢					
2 願望	-.121				
3 結果の予想	.195	-.115			
4 反応評価	.229*	-.069	.798**		
5 自己効力	.172	-.135	.502**	.568**	
6 能動的攻撃性	.112	.062	.628**	.632**	.522**

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .

### 実験効果の検討

Table 8, Table 9, Table 10 はそれぞれの実験群の統制群との各変数の比較である。いずれも有意な差は見られなかった。

**Table 9 結果の予想**

	<i>t</i> 値	自由度	有意確率
結果の予想	-1.344	46	.186
反応評価	-0.667	46	.508
自己効力	-0.344	46	.733
能動的攻撃性	-0.325	33.936	.747

**Table 10 反応評価**

	<i>t</i> 値	自由度	有意確率
結果の予想	-1.236	46	.223
反応評価	-0.971	46	.337
自己効力	-0.602	46	.550
能動的攻撃性	-0.052	46	.959

**Table 11 自己効力**

	<i>t</i> 値	自由度	有意確率
結果の予想	-0.366	45	.716
反応評価	-1.141	45	.260
自己効力	-1.026	45	.310
能動的攻撃性	.503	45	.617

### 回帰モデルの検討

次に、願望、結果の予想、反応評価、自己効力、願望と結果の予期、反応評価、自己効力の評価の各変数との交互作用、結果の予期と反応評価の交互作用、結果の予期と自己効力の評価の交互作用、反応評価と自己効力の評価の交互作用を説明変数、能動的攻撃性を目的変数として階層的重回帰分析を実施した (Table 12)。なお、交互作用変数を新たに作成する際は、それぞれの変数から平均値を引くことで中心化した。ステップ1で、願望、結果の予想、反応評価、自己効力を投入し、ステップ2で、願望変数との各変数の交互作用を、ステップ3では、結果の予想、反応評価、自己効力のそれぞれの交互作用を投入した。その結果、結果の予想、自己効力に有意な影響が見られた。また、反応評価が能動的攻撃性に及ぼす影響は有意傾向を示した。交互作用については、結果の予想と自己効力の交互作用のみが有意であった。

**Table 12** 能動的攻撃性を目的変数とした重回帰分析の結果

ステップ	説明変数	Step 1		Step 2		Step 3	
		$\beta$	$t$	$\beta$	$t$	$\beta$	$t$
第1ステップ	願望	.15	1.92 †	.13	1.66	.13	1.65
	結果の予測	.33	2.59 *	.32	2.47 *	.29	2.37 *
	反応評価	.24	1.80 †	.27	1.95 †	.26	1.96 †
	自己効力	.24	2.52 *	.25	2.60 *	.35	3.54 **
第2ステップ	願望×結果の予想			-.07	-.49	-.07	-.56
	願望×反応評価			-.06	-.44	-.03	-.24
	願望×自己効力の評価			.14	1.37	.20	1.99 †
第3ステップ	結果の予想×反応評価					-.12	-1.41
	結果の予想×自己効力の評価					.29	2.46 *
	反応評価×自己効力の評価					.01	.11
$R^2$		.495 **					
$\Delta R^2$							
						.013	.061 *

† $p<.01$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$

そこで、この交互作用について、Aiken & West (1991) の手続きに即して、下位検定として単純傾斜分析を実施した。具体的には、各変数について中心化を行った上で、結果の予想について、平均値から $\pm 1$  SD を基準とし、それぞれの条件下における自己効力の評価に対する回帰直線の傾きを求めた (Figure11)。ここで、結果の予想を調整変数とした理由は、能動的攻撃性においては、その攻撃が自己の願望を満たすことに役立つという予想がなければ、攻撃は生じようがないであろうという理論的仮定に基づく。

その結果、能動的攻撃による結果の肯定的な予想が低いとき ( $-1$  SD) は、自己効力の評価の高さと能動的攻撃性の単純傾斜が有意でない ( $\beta=0.123, p=.237$ ) のに対し、結果の予想が高いときは、( $+1$  SD) は、自己効力の評価の高さと能動的攻撃性の単純傾斜は統計的に有意であった ( $\beta=.586, p=.000$ )。

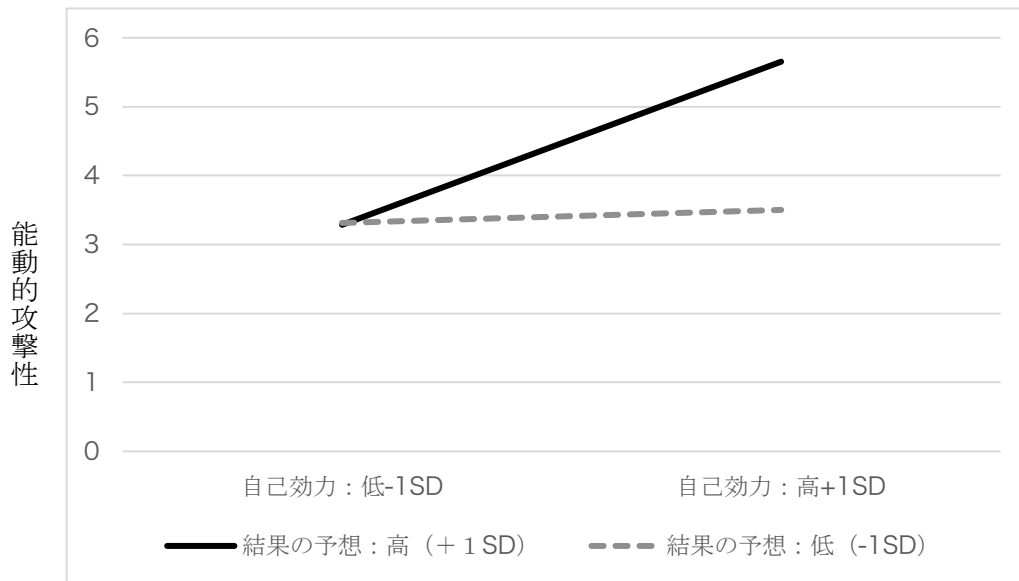


Figure 11 結果の予想の高低による自己効力と能動的攻撃性の関係

#### (4) 考察

以上の結果より，仮説 1，仮説 2，仮説 3 は，概ね支持された。すなわち，何らかの願望が高まった状況下で，能動的攻撃行動が，その願望充足に対して肯定的な結果を引き起こすと予期する傾向は，能動的攻撃性を高める。また，そのような場面において能動的攻撃行動を実行することを肯定的に評価する傾向は，能動的攻撃性を高める。さらに，そうした能動的攻撃行動を実行する自己効力を高く評価することは，能動的攻撃性を高める。

反応評価の予測効果が比較的低かった理由としては，能動的攻撃行動という社会的に強い規制がかかる行動においては，反応評価のように，自分にとって重要な人たちがその行動を肯定してくれるかどうかということよりも，当人自身がその行動をどう考えるかが大きな影響を持つことが考えられるであろう。このことは，大学生を対象に，腹が立ったときに相手の名前を呼ぶという言語的攻撃行動をとるかどうかについて EMGB を適用した，Richetin et al. (2011) の先行研究においても，本研究における反応評価変数に該当すると考えられる主観的規範 (Subjective Norm) 変数が，弱い効果しか持たないことが示されていることから支持されよう。

研究 3 において，実験操作がいずれも有効でなかった理由としては，本実験で想定した状況では，今回注目した状況要因の影響は個人要因に比べて小さかったことが考

えられる。研究3では、場面想定において、研究協力者に同一視させた主人公が、操作要因を強めるような判断したとすることで、研究参加者自身も主人公と同じ判断をする傾向が高まると予想したが、十分な効果が見られなかった。自己の願望を充足するために攻撃行動を行うという比較的社会的な統制が生じやすい行動については、状況要因の影響が強く、研究参加者の個人的傾向を十分に变化させるほどではなかったと考えられる。今後、より現実的な実験的状况を用いることで操作の効果を高めることや、理論的に重要と思われる他の状況要因の効果も検討する必要がある。

仮説4は支持されなかった。願望は能動的攻撃性を高めず、また、変数間の交互作用についても、自己効力との間に有意傾向が見られるのみで、有意ではなかった。この点について、そもそも能動的攻撃性は何らかの願望を充足するために行われるものであるから、理論的には、願望変数が能動的攻撃性を高めることや、他変数との交互作用が想定され、また Richetin et al. (2011) の先行研究でもこの理論的想定を支持する結果が得られているところ、本研究においてそれが見られなかった理由については、以下の2つの可能性がある。

第一に、本実験においては、課題場面において、すでに願望が高まるような状況が設定されており、研究協力者の願望が全体的に高められていたため、願望の高低の効果が低減してしまった可能性が考えられる。すなわち、本研究においては、研究協力者の願望は全般に高まるように状況が設定されており、その願望の高低については操作を行っていないので、それぞれの研究協力者が設定状況に応じて一般に願望について高められた値を示していたと考えられる。これは、願望変数の平均値が、天井効果は示していないものの、他変数に比較して高い値を示していることから示唆されよう。

第二に、願望と能動的攻撃性や他変数との交互作用は、直線的なものではなく、願望が個人内の閾値を超えることで生じ得るという可能性がある。先に述べたように、本研究においては、全ての場面の想定において願望が高まる状況が設定されていたため、多くの研究協力者はこの閾値を超えてしまい、統計的検定においてはその効果を検出できなかったという可能性が考えられる。

これらの点については、今後、願望の強さを実験的に操作した上で、能動的攻撃性に及ぼす影響や、他変数との交互作用とみるなどの研究が必要となろう。

また、結果の予期と自己効力の評価において、結果の予期が調整変数として機能していたことについては、Brown (2006) の改訂された TPB 要因の中では自己効力の

みが能動的攻撃性を予想するという先行研究の結果を踏まえれば、能動的攻撃性の決定過程においては、その攻撃行動が自己の願望の充足に有効であるという評価が、他変数の効果に影響することが示唆されるであろう。

## 第5章

### 総合的考察

#### 1 研究の目的と課題

本論文では、広く青少年の攻撃行動に関わる問題の根治を目指した介入の基礎となる、一般的な攻撃行動決定過程のモデルを理論的に提起し、その実証化を試みることを目的とした。

近年、我が国を含む先進国の多くでは、青少年における従来型の犯罪・非行は減少しているが、これは必ずしも青少年の適応が改善されていることを意味しない。なぜならば、インターネット上の攻撃行動は増加し、さらにメンタルヘルスの問題も増加しているからである。これらの問題に対して、国を挙げて様々な対策が講じられてきたにもかかわらず、十分な効果を上げることができていない。

これらの取り組みが十分な効果を挙げていない理由の一つとして、取られている対策が、対症療法的なものにとどまっていることが考えられる。すなわち、これらの青少年の不適応の多くには、顕在的あるいは潜在的に攻撃性が関与していることを示す複数の知見がありながら、個人における攻撃性に関わる問題を広く説明することを可能とする、認知、感情、動機づけを含む包括的なモデルが存在していないからである。そのため、目の前に現れている問題への対処が、別の問題を生み出すことになり、いたちごっこのような状況を生み出していることを指摘できる。

このような状況を踏まえれば、攻撃行動を中心とした青少年の問題行動への具体的対策を策定する前に、問題を生み出す元となる、個人の攻撃性の生成、表出および抑制のメカニズムを明らかにすることが喫緊の課題と考えられる。なぜならば、そうしたメカニズムについての理解を踏まえてこそ、攻撃行動の抑制および適切な処理のための、一貫性を持った有効な介入の方策が明らかとなるからである。

本研究では、個人レベルでの、青少年の攻撃行動に関わる問題への介入の基礎となる、一般的な攻撃行動決定過程のモデルを理論的に提起し、その実証化を試みることを目的とした。本研究において、個人レベルの攻撃性のモデル構築を目指した理由は、第一に、集団から個人にいたる様々なレベルの攻撃性を理解する際に、最も土台

となるのは個人の攻撃性の問題であると考えられるからである。第二には、本研究における理論構築の最終的な目標が、青少年の攻撃性の適切な処理のための、臨床場面での有効な介入の土台となるような理論の構築にあるからである。

本研究においては、多様な様相を示す攻撃性を、その機能から、目標追求に対する妨害、自己に対する脅威などの刺激によって生じた否定的感情を表出しつつ、嫌悪感の源となる対象に危害を加えようとするものである反応的攻撃性と、外的な報酬を得るためや、何らかの不都合な事態を取り除くための手段として行われるものである能動的攻撃性という、二つのサブタイプに分け、それぞれについて、新たに提示した統合 SIP から抽出された仮説モデルを適用し、攻撃行動決定の予測における有効性を確認した。第3章においては、統合 SIP モデルのうち、反応的攻撃性に関わる部分を、第4章においては、能動的攻撃性に関わる部分において確認した。これらを踏まえ、本章においては、統合 SIP モデルについて、その全般的考察を行う。

## 2 研究成果

### (1) 反応的攻撃性における検討

反応的攻撃性は、なんらかの脅威に対する反応であるから、認知変数及び感情変数のいずれもが関与するであろうことが予想される。そこで、de Castro et al. (2005) の先行研究を参考に、統合 SIP モデル変数のうち、反応的攻撃性への影響が大きいと考えられる解釈、反応評価、怒り感情、感情調節変数から構成した仮説モデルの妥当性を検証した同様の仮説モデルを構築し、検討した。

#### 研究1：一般の大学生および専門学校生

研究1では、日本人の大学生及び専門学校生 130 名を対象として、統合 SIP から抽出した、感情変数を含む仮説モデルを検証した。その際、相澤 (2011) が使った3つの対人挑発場面を用い、社会的情報処理変数と感情変数を測定した。

その結果、感情変数を組み込んだ仮説モデルは、認知変数のみのものよりも攻撃行動の予測において優れていた。de Castro et al. (2005) で、オランダの攻撃的行動の問題を抱えた少年 54 人と初等学校 (elementary school) の生徒 30 名からなるサンプルによって検証されたモデルが、おおむね日本の大学生等を対象にして確認された。改善の増分は、主として自己の怒りに起因していた。この結果は、認知変数では敵意意図の帰属が、感情変数では感情調節が攻撃行動の生期に対して影響力を持つという



de Castro et al. (2005) 結果と、基本的に一致するが、加えて研究 1 では怒りの強度もこのプロセスに寄与していた。日本人のサンプルにおいては、怒りは反応評定を介して間接的に攻撃行動に影響を与えるとともに、直接に攻撃行動を促進もするが、相手の敵意意図の帰属や感情調節は、相手に対する攻撃的行動を肯定的に評価することに影響を与え、攻撃行動へは、その反応評定を経て間接的にのみ影響を与えることが示された。これは、本研究の参加者である大学生等は、攻撃性の問題を抱える児童に比べると攻撃性が低いにも関わらず、基本的に同じ認知・感情プロセスが攻撃行動の生起を規定していることを示すもので、そのプロセスの普遍性を示唆するものである。また、改訂版 SIP モデルを構成する諸変数について攻撃性の高い者と低い者を比較すると、感情変数に関して、攻撃的な人は非攻撃的な人よりも怒り感情が強く、感情調節は弱かった。加えて、認知変数に関しては、de Castro et al. (2005) の研究と異なり、敵意意図の知覚の差はそれほど大きくなく、むしろ攻撃的反応を肯定的に評価する傾向に明確な差が見られた。これは、本研究の参加者が一般の大学生等という攻撃性の低い人たちであったため、攻撃性の問題を抱える対象者を扱った先行研究に比べると、参加者の敵意バイアスがそれほど顕著ではなかったことを示すとともに、反応評価が攻撃性の遂行を決定する重要な要因であることを示唆している。

## 研究 2：少年鑑別所入所中の非行少年

研究 1 では、感情変数を組み込んだ、統合 SIP モデルから抽出した仮説モデルは、認知変数のみから構成される改訂 SIP モデルよりも攻撃行動の予測において優れていることが示された。しかし、実験 1 の対象者は、全般的に攻撃性の低い大学生等であったことから、より攻撃性が高い対象者における理論の有効性の検証が必要と思われる。そこで、実験 2 では、大学生等よりも攻撃性が高いと考えられる少年鑑別所入所中の非行少年 82 名を対象に、実験 1 と同様の材料を用いて、仮説モデルがこれを組み込まないものよりも攻撃行動の予測において優れているかどうかを検討した。

その結果、第一に、大学生等を対象としたときと同じく、感情変数を組み込んだ仮説モデルは、認知変数のみのものよりも攻撃行動の予測において優れていた。その改善の増分は自己の怒りに起因していた。また、認知変数では、攻撃行動を肯定的に評価する程度である反応評定が最も大きな影響を及ぼしていた。モデル検討においては感情調節の効果が見られなかったが、これは反社会的行動問題を抱える非行少年において、怒りを適応的に処理するような感情調節が攻撃行動の抑制のために有効に機能

していないことを示唆している。また、大学生等とは違って、非行少年では相手の幸福感知覚が攻撃行動の生起に至るプロセスを促進していたが、これは、非行少年は、社会的葛藤場面で加害者の悪意を強く知覚することが、攻撃行動を動機づけることを示している。第二に、非行少年で攻撃性が高い者は、怒り感情が強く、感情調節を用いる程度が低いことが示された。第三に、認知的変数について、攻撃性が高い者は、敵意意図の知覚及び反応評定が高いことが示された。なお、大学生では非有意な傾向だった敵意意図の知覚が、非行少年では明確に差があることが示された。これは、先に述べた加害者の幸福感の知覚と同じく、非行少年は、社会的葛藤場面での加害者の意図の誤帰属が攻撃行動に結びつきやすいことを示している。また、モデル検討では有意でなかった感情調節において攻撃性の高低群の差が有意だったことは、それが攻撃行動の生起に何らかの影響を与えていることを示唆している。

#### 反応的攻撃性に関する実験のまとめ

研究1及び研究2を通して、統合SIPモデルから抽出した、感情変数を組み込んだ仮説モデルは、認知変数のみの改訂SIPモデルよりも攻撃行動の予測において優れていた。そして、その改善の増分は、自己の怒りに起因していた。

解釈の構成要素である相手の幸福感知覚が、非行少年においてのみ攻撃行動の生起を促した点は、de Castro et al. (2005)の研究で見られたように、非行少年がしばしば相手の感情を敵対的に誤帰属し、これが攻撃行動を誘起することを示唆している。

感情変数について、大学生等及び非行少年を通じて攻撃的な者は怒り感情が強く、感情調節が弱いことが示された。また、非行少年においては、感情調節が認知的過程を抑制せず、怒りが攻撃行動を促進していることも明らかとなった。このことは、先行研究において指摘されてきたように、攻撃傾向が強い者は、認知的な過程に歪みがあるのみならず、加えて、感情調節にも問題をあることを示している。

SIPモデルは元々（例えば、Crick & Dodge, 1994）、反応的攻撃性の高い児童の攻撃行動を説明することを目的として構築され、主としてこの観点から検討されてきたという歴史的経緯を持つ。de Castro et al. (2005)の研究は、感情過程も含めたより包括的なモデル構築を目指し、原モデルに感情調節と怒りという変数を加えたものである。しかし、本研究の結果からは、非行少年では、感情調節が十分に機能しておらず、怒り変数のみが追加に値することが示された。このことは、Dodgeらの認知変数から構成された原モデルは、攻撃性が高い者の攻撃行動決定過程をよく表している

ともに、Dodge (1991) で自身が述べているように、怒り感情が認知的プロセスを駆動するエネルギーとして働いている可能性を示すものである。これに対して、統合 SIP モデルは、攻撃性の低い一般群についても適用可能なようにこれを拡張したものとえよう。

## (2) 能動的攻撃性における検討

研究 3 においては、統合 SIP モデルが能動的攻撃性を予測することを検証するため、意図的行動についての理論に含まれる変数を参考に、統合 SIP モデル内変数から抽出した変数で構成した仮説モデルの説明力を、日本人大学生 91 名を対象に確認した。すなわち、何らかの願望が高まるように想定した場面で、結果の予想、反応評価、自己効力の評価について、3 つの変数の一つを高めるような操作を行い、操作を行わない群との比較によって、各変数の能動的攻撃性への影響を検討した。

その結果、願望が高まるような状況下で、能動的攻撃行動が、その願望充足に対して肯定的な結果を引き起こすと予想すること、そのような場面において能動的攻撃行動を実行することを肯定的に評価すること、そうした能動的攻撃行動を実行する自己効力を高く評価することは、それぞれ能動的攻撃性を高めることが示された。

研究 3 において、上記の変数のうち、反応評価の予想の効果が有意傾向にとどまった理由としては、能動的攻撃行動という社会的に強い規制がかかる行動においては、反応評価のように、自分にとって重要な人たちがその行動を肯定してくれるかどうかということよりも、その行動を本人自身がどう考えるかが大きな影響を持つことということが考えられる。

また、願望変数の効果は有意ではなく、願望変数と他の変数との交互作用も有意ではなかった。そもそも能動的攻撃性は何らかの願望を充足するために行われるものであるから、理論的には能動的攻撃性を促進するとともに、願望変数と他変数との交互作用が想定されるが、それらが有意でなかった理由については、二つの可能性が考えられる。第一に、本実験においては、課題場面において、すでに願望が高まるような状況が設定されており、研究協力者の願望が全体的に高められていたため、願望の高低の効果が低減してしまった可能性であり、第二には、願望と他変数との交互作用は直線的なものではなく、願望が個人内の閾値を超えることで他の変数が効果を生じるため、本実験における場面の想定において、多くの研究協力者においてはこの閾値を超えてしまっていたため、統計的検定においてはこの交互作用を検出できなかったとい

うことが考えられるであろう。

結果の予想、反応評価、自己効力の評価の3変数において、結果の予想が自己効力の評価の調整変数として機能していた。これは、能動的攻撃性の決定過程においては、その攻撃行動が自己の願望の充足に有効であるという評価が大きな影響を持ち、これが有効であって初めて他変数の効果も効果を持つという可能性が示唆された。

### (3) 研究成果のまとめ

本研究では、実地的な予測力を持つモデルとしてこれまで提唱されてきた SIP モデルを理論的に分析し、動機づけに関わる願望変数を加えた統合 SIP モデルを提示した。そして、攻撃性をその機能から反応的攻撃性と能動的攻撃性の二つのサブタイプに分類し、それぞれについて、実証的検討を通じて統合 SIP モデルの有効性を検証した。

反応的攻撃性に関して、一般の大学生等と、攻撃性が高いと考えられる非行少年を対象にした場面想定法による実験を実施し、いずれの対象者においても、感情変数を組み込んだ統合 SIP モデルは、認知変数のみの改訂 SIP モデルよりも攻撃行動の予測において優れていることが明らかとなった。そして、その改善の増分は自己の怒りないし感情調節に起因しており、反応的攻撃性においては、従来の認知変数のみのモデルでは十分ではなく、統合 SIP に導入されている感情変数が重要な役割を果たすことが、日本人の対象者においても確認された。

能動的攻撃性に関して、大学生を対象に、願望が高まるような場面を想定した場面想定法を用い、願望変数を加えた仮説モデルの有効性を検証した。その結果、願望に加えて、結果の予想、反応評価、自己効力の評価という統合 SIP モデルにおけるステップ5の反応決定に含まれる変数が能動的攻撃性を予測することが示された。願望変数と他変数の交互作用については、今後の検討の余地があるものの、これまで SIP モデルがあまり適用されてこなかった能動的攻撃性の予測においても、動機づけに関わる変数である願望変数を加えて拡張した統合 SIP モデルの有効性が確認された。

これによって、いわゆる知・情・意という人間の心の機能を三つに分けたその全てを包括した攻撃性のモデルが提示されたことになる。このモデルは、現在、我が国を含む多くの先進国に見られる、青少年の犯罪や非行の減少と、ネットいじめや抑うつや自殺といった異なる形で現れる不適応を、一貫して攻撃性に関わる問題として捉え、対症療法的でない、根治的な介入策を考案するための基盤を提供するものとして

重要な意味を持つと考えられる。

### 3 研究の限界と今後の課題

#### (1) 能動的攻撃性における願望変数と他変数との交互作用について

本研究においては、能動的攻撃性において、願望の高まりが社会的情報処理を歪ませるという仮説は十分には証明されなかった。この点については、願望変数についての実験的な統制の下、より詳細な検討が必要と考えられる。なぜならば、反応的攻撃性において、怒りや相手の敵意意図の知覚が反応評価における認知的な判断を歪ませたように、理論的には、能動的攻撃性においては願望が高まることで、他の認知変数を歪ませることが予想されるからである。例えば、自己中心性バイアスに影響を与える要因として、認知資源と並んで、動機づけが挙げられているなど（瀧澤・山下，2013）、Fiske & Taylor（1994）が指摘するように、人間は動機づけられた戦術家（motivated tactician）であって、自らの動機や目標にしたがって情報収集を行い、場合によっては認知を歪めることなど、動機づけが様々な形で認知過程を歪曲しがちであることは、心理学において広く指摘されており、攻撃性に関わる社会的情報処理の過程においても同様の影響が予想されよう。

本研究においては、願望変数と自己効力の評価の交互作用にのみ有意傾向が見られたが、その他の交互作用が有意でなかった理由については、二つの可能性が考えられる。第一に、本実験においては、課題場面において、すでに願望が高まるような状況が設定されており、研究協力者の願望が全体的に高められていたため、願望の高低の効果が低減してしまった可能性であり、第二には、願望と他変数との交互作用は直線的なものではなく、願望が個人内の閾値を超えることで他の変数が効果を生じるため、本実験における場面の想定において、多くの研究協力者においては、この閾値を超えてしまっていたため、統計的検定においてはこの交互作用を検出できなかったということが考えられる。

今後は、より実験的な手法を用いて、願望の高低を操作した上で、他の変数を同時に操作した上での交互作用を検証していくことが必要となろう。

#### (2) 本研究では扱わなかった他のモデル内変数の検討について

本研究においては、統合 SIP モデルに含まれる全ての変数を検討することは現実的に難しいことから、先行研究を参考に、まずは反応的攻撃性と能動的攻撃性のそれぞ

れの予測に最も重要と考えられる変数を抽出して構成した仮説モデルを検証した。すなわち、反応的攻撃性においては、認知要因として、解釈と反応評価を、感情要因として、怒り感情と感情調節の影響を検討し、能動的攻撃性においては、動機づけに関する変数として願望を、認知変数として、結果の予想、反応評価、自己効力を検討した。これらは、あくまでも、統合 SIP モデルを構成する 6 つの認知的ステップと、感情過程及び動機付けから抽出した変数によって構築した、部分的なモデルに過ぎない。モデル全体を検討するのではなく、このような部分を抽出する形で検討を行わざるを得なかったのは、統合 SIP モデルが包括的なものを目指すことの代償として、複雑化を免れえなかったことからくるマイナス面を象徴している。Dodge (1980) による原モデルが提唱されて以来、SIP モデル全体を一度に検討した研究は見当たらないが、理論的精緻化に伴い、モデルが一層複雑化されていく中で、さらにモデル全体の検討が困難になっていることが指摘できる。ここから、より実用性を重んじる観点からは、本研究において行ったように、統合 SIP モデルを上位モデルとしつつも、攻撃性の種類や内容によって、心理的援助の実践に使いやすい上位モデルを簡略化したモデルを構築し、これを上位モデル内に位置付けるような方法も検討に値するであろう。

また、その一方で、Dodge et al. (1997) における、反応的攻撃性が高い児童は攻撃的スキーマに素早くアクセスし実行するという示唆や、Dodge & Newman

(1981) によって確認された、攻撃的な児童は社会的葛藤場面での反応行動の決定をより素早く、少ない情報に基づいて行うという知見など、本研究では取り上げていない要因も、攻撃性生起において、看過できない役割を果たしていることを示す報告がある。そこから、これまであまり扱われてこなかった変数についても、今後検討していくことが、モデルの攻撃性の予測力を向上させるという観点からは必要と考えられる。これは、モデルのより一層の精緻化を進めるという方向性である。

攻撃性の統合 SIP モデルの発展としては、これら両方の展開が必要となろう。

### (3) 攻撃性がメンタルヘルスの問題を引き起こすメカニズムのより詳細な検討について

すでに述べたように、攻撃性が、抑うつ (川端・大淵, 2014; 上野他, 2009) や、自殺 (Conner et al., 2003; 竹島, 2011) など、様々なメンタルヘルス上の問題に関連があるという指摘がなされてきた。しかし、攻撃性とそれらの問題がどのようにして結

びついているのかという点について、踏み込んで論じた研究はほとんど見られない。これは、それらの結びつきを説明するためには、両者を結びつけ得るような理論的土台が必要なところ、それが存在していないことが大きな理由の一つと考えられる。

本研究においても、近年の青少年の攻撃行動の減少が、その他の形での問題の増加と関連している可能性について、理論的分析を行ったものの、なぜ、攻撃性を抑制することがメンタルヘルス上の問題となって現れるのかについてまでは、論じるには至らなかった。それは、先に述べたように、本論文は、様々な攻撃性に関わる問題の理解及び介入の土台となる、知・情・意という人間の心の機能を包括的にカバーする攻撃性の理論を構築することを目的としており、その適用ともいえる、攻撃性のメンタルヘルス上の問題への転換のメカニズムを明らかにすることまでは目指していないからである。

しかし、近年の先進国において、犯罪や非行といった攻撃性の直接的な表出による問題行動よりも、青少年の抑うつや自殺といったメンタルヘルスに関わる問題が前面に現れていることを鑑みれば、今後、攻撃性とメンタルヘルス上の問題との関係を明らかにしていく必要性が高まっていると考えられる。本研究によって統合 SIP モデルが提唱されたことにより、攻撃性に関して、認知、感情、動機づけの関連を統一的に検討するための土台となる理論が提出されたことになる。したがって、以後は、攻撃性が感情や動機づけ上の不調を生み出したり、逆に感情や動機づけ上の問題が攻撃性を高めたりするような、攻撃性に関わる包括的な心的なメカニズムについて、より具体的な実証的研究を展開することが求められよう。

#### （４）攻撃性に関わる青少年の問題への統合 SIP モデルに基づく介入法の開発について

本研究において、攻撃性の異なる二つの機能を包括するサブタイプである反応的攻撃性と能動的攻撃性のそれぞれについて、統合 SIP モデルの立場から、欠損及び歪みが明らかにされた。今後は、これらの欠損や歪みの修正が攻撃性に関わる問題を改善することを、実践的に確認していく必要がある。

反応的攻撃性が実行される過程においては、他者の意図を敵意と解釈しやすいという加害者の認知的なバイアスにより、適切に調節されない怒り感情が生じるとともに、その場面において取り得る行動の選択肢の一つとしての反応的攻撃の評価に歪みが生じ攻撃行動を促進するという、認知過程の歪みと感情過程の影響が確認された。

このことは、反動的攻撃行動の問題を示す者に対する処遇としては、他者の言動を敵意的に解釈しやすいという認知的バイアスの修正を目指す介入や、感情調節スキルの向上を目指す介入、さらには攻撃行動が引き起こす結果についての認知的歪みの修正が有効であることを示している。

能動的攻撃性においては、攻撃行動の目的となる願望の強さと、攻撃行動による結果の予想、攻撃行動という反応の評価、及び自分がそれらの行動をどれくらい遂行できるかという自己効力といった、統合 SIP のステップ 5 の反応決定段階の変数が主に関与していることが明らかにされた。そこから、これらにおける歪みを修正していくことが介入の目標とされよう。例えば、攻撃行動を取った場合の結果について、最終的には自分が損をしたり、攻撃行動によって得られた利得は長続きしないことが多いことや、また、攻撃行動を取る者は、結局は周囲から排除されることが多いことを理解させることなどで、結果の予想や反応評価などの反応選択に関わる認知の歪みを修正していくことが、攻撃性の抑制に有効なことを示唆している。願望が高まった状態での、判断の歪みも問題となり得ることから、これもまた扱っていく必要があることが示されている。いずれの介入も、既に単独では用いられているものも多いが、これらの技法を、大きな理論的な枠組み内に位置付け、意図的に組み合わせしていくことで、より効果的かつ根源的な介入が可能となろう。

さらに、統合 SIP モデルは、認知、感情、動機づけが相互に関連しあった循環的な過程を明らかにしているのであるから、どれか一つの側面を過剰に抑制するような介入は、全体のバランスを崩し、ある側面に関する問題は現象的には抑えることができるかもしれないが、別の形の問題を生じさせてしまうことが予想される。例えば、攻撃性が高まっていながらこれを表出しない場合には、感情調節が機能していても抑うつが生じやすいといったことがそうである (Kawabata et al., 2016; 上野他, 2009)。そこから、一般にアンガー・マネジメント・プログラムなどで行われているような、怒りの抑制方法や、適切な処理の方法の学習を中心とした介入のみでは、攻撃性の問題への介入として不十分であって、高まった攻撃性を適切な形で表出していくためのスキルの学習が必要と考えられる。

総じて、人間が持っている健全な精神活動の一面である攻撃性というものを的確に評価し、教育や心理的援助において適切に位置づけ、知・情・意という人間の心の全体に目を配りながら教育や心理的援助において対応していく必要が示されているといえよう。



## 引用文献

- Aebi, M. F., & Linde, A. (2010). Is there a crime drop in Western Europe? *European Journal on Criminal Policy and Research*, 16(4), 251-277.
- 相澤直樹. (2010). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応について--他者の意図としての敵意と嫌悪に着目して. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(2), 139-148.
- 相澤直樹 (2011) 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒反応について 心理臨床学研究 29, 365-370.
- Ajzen, I. (1985). From intentions to actions: A theory of planned behavior. In *Action control* (pp. 11-39). Springer, Berlin, Heidelberg.
- Ajzen, I. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational behavior and human decision processes*, 50(2), 179-211.
- Ajzen, I. (2006). Constructing a theory of planned behavior questionnaire.
- Ajzen, I., & Fishbein, M. (1977). Attitude-behavior relations: A theoretical analysis and review of empirical research. *Psychological bulletin*, 84(5), 888.
- Ajzen, I., & Fishbein, M. (1980). Theory of Reasoned Action in understanding attitudes and predicting social behaviour. *Journal of Social Psychology*.
- Alorani, O. I., & Alradaydeh, M. F. (2017). Depression, Aggression and spiritual well being among the university students in Jordan. *European Scientific Journal*, 13(2), 269-280.
- Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002). Human aggression. *Annual review of psychology*, 53(1), 27-51.
- Anderson, C. A., & Carnagey, N. L. (2004). Violent evil and the general aggression model. *The social psychology of good and evil*, 168-192.
- Antonius, D., Sinclair, S. J., Shiva, A. A., Messinger, J. W., Maile, J., Siefert, C. J., ... & Blais, M. A. (2013). Assessing the heterogeneity of aggressive behavior traits: Exploratory and confirmatory analyses of the reactive and instrumental aggression personality assessment inventory (PAI) scales. *Violence and victims*, 28(4), 587-601.
- Arsenio, W. F. (2010). Integrating emotion attributions, morality, and aggression: Research and theoretical foundations.

- Bandura, A. (1965). Influence of models' reinforcement contingencies on the acquisition of imitative responses. *Journal of personality and social psychology*, 1(6), 589.
- Bandura, A. (1973). *Aggression: A social learning analysis*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bandura, A. (1979). The social learning perspective: Mechanisms of aggression.
- Bandura, A. (1983). Psychological mechanisms of aggression. *Aggression: Theoretical and empirical reviews*, 1, 1-40.
- Barbour, K.A., Eckhafd, C. L., Davison, G. C., & Kassino, H. (1998) The experience and expression of anger in martially violent and martially discordant –nonviolent men. *Behavior Therapy*, 29, 173-191.
- Barratt, E. S., Stanford, M. S., Dowdy, L., Liebman, M. J., & Kent, T. A. (1999). Impulsive and premeditated aggression: a factor analysis of self-reported acts. *Psychiatry research*, 86(2), 163-173.
- Bateman, T. (2017). England and Wales. In *International handbook of juvenile justice* (pp. 287-304). Springer, Cham.
- Beck, L., & Ajzen, I. (1991). Predicting dishonest actions using the theory of planned behavior. *Journal of research in personality*, 25(3), 285-301.
- Berkowitz, L., & LePage, A. (1967). Weapons as aggression-eliciting stimuli. *Journal of Personality and Social Psychology*, 7(2p1), 202.
- Berkowitz, L. (1993). *Aggression: Its causes, consequences, and control*. New York: McGraw-Hill.
- Bettencourt, B.A., Talley, A., Benjamin, A.J., & Valentine, J. (2006). Personality and aggressive Behavior under provoking and neutral conditions: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 132, 752-777.
- Blair, R. J. R. (2001). Neurocognitive models of aggression, the antisocial personality disorders, and psychopathy. *Journal of Neurology, Neurosurgery & Psychiatry*, 71(6), 727-731.
- Blair, R. J. R. (2004). The roles of orbital frontal cortex in the modulation of antisocial behavior. *Brain and cognition*, 55(1), 198-208.
- Blair, R. J. R., Peschardt, K. S., Budhani, S., Mitchell, D. G. V., & Pine, D. S. (2006). The development of psychopathy. *Journal of child psychology and psychiatry*, 47(3-4), 262-276.

- Bowen, K. N., Roberts, J. J., & Kocian, E. J. (2016). Decision making of inmates: Testing social information processing concepts using vignettes. *Applied Psychology in Criminal Justice*, 12(1), 1-17.
- Bowen, K. N., Roberts, J. J., Kocian, A., & Bartula, A. (2017). An empirical test of social information processing theory and emotions in violent situations. *Actual Probs. Econ. & L.*, 189.
- Brendgen, M., Vitaro, F., Tremblay, R. E., & Lavoie, F. (2001). Reactive and proactive aggression: Predictions to physical violence in different contexts and moderating effects of parental monitoring and caregiving behavior. *Journal of abnormal child psychology*, 29(4), 293-304.
- Brown, J. E. (2006). Intending to be aggressive: Applying the theory of planned behavior to reactive and instrumental adolescent aggression. Unpublished Master Thesis, University of Saskatchewan, USA.
- Center for Disease Control and Prevention. (2019). National Vital Statics System. Mortality Data. 最終閲覧 2019 年 12 月 7 日  
<https://www.cdc.gov/nchs/nvss/deaths.htm>
- Chen, P., Coccato, E. F., & Jacobson, K. C. (2012). Hostile attributional bias, negative emotional responding, and aggression in adults: Moderating effects of gender and impulsivity. *Aggressive Behavior*, 38(1), 47-63.
- Chereji, S. V., Pintea, S., & David, D. (2012). The relationship of anger and cognitive distortions with violence in violent offenders' population: a meta-analytic review. *European Journal of Psychology Applied to Legal Context*, 4(1).
- Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. (2004) Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, 75, 317-333.
- Conner, K. R., Cox, C., Duberstein, P. R., Tian, L., Nisbet, P. A., & Conwell, Y. (2001). Violence, alcohol, and completed suicide: a case-control study. *American Journal of Psychiatry*, 158(10), 1701-1705.
- Conner, K. R., Duberstein, P. R., Conwell, Y., & Caine, E. D. (2003). Reactive aggression and suicide: Theory and evidence. *Aggression and violent behavior*, 8(4), 413-432.
- Connor, D. F. (2004). Aggression and antisocial behavior in children and

- adolescents: Research and treatment. Guilford Press.
- Cornell, D. G., Warren, J., Hawk, G., Stafford, E., Oram, G., & Pine, D. (1996). Psychopathy in instrumental and reactive violent offenders. *Journal of consulting and clinical psychology*, 64(4), 783.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review of reformulation of social information processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1996). Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child development*, 67(3), 993-1002.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child development*, 66(3), 710-722.
- Crick, N. R., & Werner, N. E. (1998). Response decision processes in relational and overt aggression. *Child development*, 69(6), 1630-1639.
- Crozier, J. C., Dodge, K. A., Fontaine, R. G., Lansford, J. E., Bates, J. E., Pettit, G. S., & Levenson, R. W. (2008). Social information processing and cardiac predictors of adolescent antisocial behavior. *Journal of Abnormal Psychology*, 117(2), 253.
- Damasio, A. R. (1994). *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: Avon Books.
- de Castro, B. O. (2004). The development of social information processing and aggressive behaviour: Current issues. *European Journal of Developmental Psychology*, 1(1), 87-102.
- de Castro, B. O., (2010). Rage, Revenge, and Precious Pride. In Arsenio, W. F & Lemerise, E. A. (Eds) *Emotion, Aggression, and Morality in Children*. (pp.53-74). American Psychological Association, Washington, DC.
- de Castro, B. O., Merk, W., Koops, W., Veerman, J. W., & Bosch, J. D. (2005). Emotions in social information processing and their relations with reactive and proactive aggression in referred aggressive boys. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 34(1), 105-116.
- de Castro, B. O., Brendgen, M., Van Boxtel, H., Vitaro, F., & Schaeppers, L. (2007). "Accept me, or else...": Disputed overestimation of social competence predicts increases in proactive aggression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 35(2), 165-178.

- Dempster, R. J., Lyon, D. R., Sullivan, L. E., Hart, S. D., Smiley, W. C., & Mulloy, R. (1996, August). Psychopathy and instrumental aggression in violent offenders. In Annual Meeting of the American Psychological Association, Toronto, Ontario.
- Dijst, M., Farag, S., & Schwanen, T. (2008). A comparative study of attitude theory and other theoretical models for understanding travel behaviour. *Environment and Planning A*, 40(4), 831-847.
- Dodge, K. A. (1980). Social cognition and children's aggressive behavior. *Child development*, 162-170.
- Dodge, K. A. (1986). A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Eds.), *The Minnesota Symposium on Child Psychology*, 18(pp.77-125). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Dodge, K. A. (1991). The structure and function of reactive and proactive aggression. In D. Pepler & K. H. Rubin (Eds.) *The development and treatment of childhood aggression*. (pp.201-218). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Dodge, K. A. (2011). Social information processing patterns as mediators of the interaction between genetic factors and life experiences in the development of aggressive behavior. In Phillip R. Shaver & Mario Mikulincer(Eds.) *Human aggression and violence: Causes, manifestations, and consequences*. Herzilya series on personality and social psychology. Amer Psychological Assn.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of personality and social psychology*, 53(6), 1146.
- Dodge, K. A., Lochman, J. E., Harnish, J. D., Bates, J. E., & Pettit, G. S. (1997). Reactive and proactive aggression in school children and psychiatrically impaired chronically assaultive youth. *Journal of abnormal psychology*, 106(1), 37.
- Dodge, K. A., & Newman, J. P. (1981). Biased decision-making processes in aggressive boys. *Journal of abnormal psychology*, 90(4), 375.
- Dodge, K. A., Price, J. M., Bachorowski, J. A., & Newman, J. P. (1990). Hostile attributional biases in severely aggressive adolescents. *Journal of abnormal psychology*, 99(4), 385.

- Dodge, K. A., & Price, J. M. (1994). On the relation between social information processing and socially competent behavior in early school-aged children. *Child development*, 65(5), 1385-1397.
- 土井隆義 (2017). 少年非行の減少と宿命論の広がり : 若年層における問題行動の変質をめぐって. *世界の児童と母性*, 81, 2-8.
- Dollard, J., Miller, N. E., Doob, L. W., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*.
- Eisenberg, N., & Fabes, R. A. (1992). Emotion, regulation, and the development of social competence.
- Eisenberg, N., Fabes R. A., Guthrie I. K., Murphy, B. C., Maszk, P., Holmgren, R., et al. (1996). The relations of regulation and emotionality to problem behavior in elementary school children. *Development and Psychopathology*, 8, 141-162.
- Evans, J. S. B., & Over, D. E. (1996). Rationality in the selection task: Epistemic utility versus uncertainty reduction.
- Farrell, G., Laycock, G., & Tilley, N. (2015). Debuts and legacies: The crime drop and the role of adolescence-limited and persistent offending. *Crime Science*, 4(1), 16.
- Feshbach, S. (1970). Aggression. In P. Mussen (Ed.), *Carmichael's manual of child psychology* (Vol. 2, pp. 159-259). New York: Wiley.
- Finkelhor, D., Turner, H., Ormrod, R., & Hamby, S. L. (2010). Trends in childhood violence and abuse exposure: Evidence from 2 national surveys. *Archives of Pediatrics & Adolescent Medicine*, 164, 238-242. doi: 10.1001/archpediatrics.2009.283
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. (1994). *Social cognition*. New York: Random House.
- Flavell, J. H. (1974). The development of inferences about others. In T. Mischel (Eds.), *Understanding other persons*. Totowa, NJ: Rowman & Littlefield.
- Fontaine, R. G., Burks, V. S., & Dodge, K. A. (1998). The Mediating Effect of Sociomoral Judgments about Aggression on the Relation between Hostile Attributional Style and Antisocial Conduct.
- Fontaine, R. G., & Dodge, K. A. (2006). Real-time decision making and aggressive behavior in youth: A heuristic model of response evaluation and decision

- (RED). Aggressive Behavior: Official Journal of the International Society for Research on Aggression, 32(6), 604-624.
- Frankova, I. (2019). Similar but different. Psychological and psychopathological features of primary and secondary hikikomori. *Frontiers in psychiatry*, 10, 558.
- Freud, S. (1920) *Beyond the Pleasure Principle*. Standard Edition Vol.18. trans. Strachey, J., London: Hogarth Press, 1955. 井村恒郎・小此木啓吾訳(1970)快感原則の彼岸 フロイト著作集 6 人文書院
- Frick, P. J., Cornell, A. H., Bodin, S. D., Dane, H. E., Barry, C. T., & Loney, B. R. (2003). Callous-unemotional traits and developmental pathways to severe conduct problems. *Developmental psychology*, 39(2), 246.
- Frick, P. J., & Ellis, M. (1999). Callous-unemotional traits and subtypes of conduct disorder. *Clinical Child and Family Psychology Review*, 2(3), 149-168.
- 藤巴正和(2003). コラム 1 ひきこもりのサイン 岡本祐子・宮下一博(編)ひきこもる青少年の心: 発達臨床心理学的考察 北大路書房
- Fung, A. L., Gerstein, L. H., Chan, Y., & Engebretson, J. (2015). Relationship of aggression to anxiety, depression, anger, and empathy in Hong Kong. *Journal of Child and Family Studies*, 24(3), 821-831.
- Geiger, A. W. & Davis, L. (2019). A growing number of American teenagers – particularly girls – are facing depression. Pew Research Center. 最終閲覧 2020.3.29, <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2019/07/12/a-growing-number-of-american-teenagers-particularly-girls-are-facing-depression/>
- Goldfried, M. R. & d’Zurilla, T. J. (1969). A behavioral-analytic model for assessing competence. In C. D. Spielberger (Eds.) *Current topics in clinical and community psychology*(vol.1). New York: Wiley.
- Gould, D. (1996). Using vignettes to collect data for nursing research studies: how valid are the findings?. *Journal of clinical nursing*, 5(4), 207-212.
- Graham, S., Hudley, C., & Williams, E. (1992). Attributional and emotional determinants of aggression among African-American and Latino young adolescents. *Developmental Psychology*, 28 731-740.
- Glannon, W. (2008). Moral responsibility and the psychopath. *Neuroethics*, 1(3), 158.
- Hainmueller, J., Hangartner, D., & Yamamoto, T. (2015). Validating vignette and conjoint survey experiments against real-world behavior. *Proceedings of the*

- National Academy of Sciences, 112(8), 2395-2400.
- 濱口佳和. (2002). 攻撃性と情報処理. 山崎勝之・島井哲志 (編). 攻撃性の行動科学: 発達・教育編, 40-59.
- 濱口佳和 (2004). 反応性攻撃尺度( reactive aggression )尺度(中学生版)の作成ー反応的・道具的攻撃性尺度(RIS 中学生版)の改訂(2) 日本教育心理学会 第 46 回総会発表論文集, 493.
- 濱口佳和 (2005). 自記式能動性攻撃尺度(中学生用)の構成 カウンセリング研究, 38, 183-194.
- 濱口佳和. (2002). 攻撃性と情報処理. 山崎勝之・島井哲志 (編). 攻撃性の行動科学: 発達・教育編, 40-59.
- Hartup, W. W. (1974). Aggression in childhood: Developmental perspectives. *American Psychologist*, 29(5), 336.
- Hawley, P. H. (2007). Social dominance in childhood and adolescence: Why social competence and aggression may go hand in hand. *Aggression and adaptation: The bright side to bad behavior*, 1-29.
- Hayes, J. R. (1981). *The complete problem solver*. Philadelphia: The Franklin Institute Press.
- Hood, K. E. (1996). Intractable tangles of sex and gender in women's aggressive development: An optimistic view. *Aggression and violence: Genetic, neurobiological, and biosocial perspectives*, 309-335.
- Hubbard, J. A., Smithmyer, C. M., Ramsden, S. R., Parker, E. H., Flanagan, K. D., Dearing, K. F., Relyea, N., & Simons, R. F. (2002). Observational, Physiological, and Self-Report Measures of Children's Anger: Relations to Reactive versus Proactive Aggression. *Child Development*, 73, 1101-1118.
- 石川満佐育・濱口佳和・江口めぐみ・三鉢泰代 (2007). 青年の能動的・反応的攻撃性に関する研究(4)ー高校生サンプルにおける検証的因子分析と併存的妥当性の検討ー 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 24.(Ishikawa, M., Hamaguchi, Y., Eguchi, M., & Sanko Y.)
- 法務省号研究所(2019).犯罪白書令和元年版 最終閲覧日 2020.11.7  
<http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/66/nfm/mokuji.html>
- Jones, L. M., Mitchell, K. J., & Finkelhor, D. (2013). Online harassment in context: Trends from three youth internet safety surveys (2000, 2005, 2010).



- Psychology of Violence, 3, 53–69. doi: 10.1037/a0030309
- 唐沢 穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹 2001 社会的認知の心理学 岩崎学術出版
- 川端壮康, 大淵憲一 (2014). 大学生における非表出性攻撃と抑うつの関係について: 社会的情報処理モデルの立場から. 尚絅学院大学紀要, (68), 91-101.
- Kawabata, T., Ohbuchi, K. I., Gurieva, S., Dmitrieva, V., Mikhalyuk, O., & Odintsova, V. (2016). Effects of Inexpressive Aggression on Depression in College Students: Cross Cultural Study between Japan and Russia. Psychology, 7(13), 1575-1586.
- 厚生労働省 (2019)自殺対策白書 最終閲覧日 2020.3.30  
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/18/index.html>
- 厚生労働省社会・援護局総務課自殺対策推進室 警察庁生活安全局生活安全企画課  
 (2019)平成 30 年中における自殺の状況. 最終閲覧 2020.11.8.  
<https://www.mhlw.go.jp/content/H30kakutei-01.pdf>
- 厚生労働省. (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. 厚生労働科学研究 (こころの健康科学研究事業)「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」(主任研究者: 齊藤万比古) 平成, 19-21.
- Lemerise, E. A., & Arsenio, W. F. (2000). An integrated model of emotion processes and cognition in social information processing. Child Development, 71, 107-118.
- Leone, L., Perugini, M., & Ercolani, A. P. (2004). Studying, practicing, and mastering: A test of the model of goal-directed behavior (MGB) in the software learning domain. Journal of applied social psychology, 34(9), 1945-1973.
- Liu, J. (2004). Concept analysis: aggression. Issues in mental health nursing, 25(7), 693-714.
- Lochman, J. E., & Dodge, K. A. (1998). Distorted perceptions in dyadic interactions of aggressive and nonaggressive boys: Effects of prior expectations, context, and boys' age. Development and psychopathology, 10(3), 495-512.
- Lockhman, J. E., & Wells, K. C. (2002). Contextual social-cognitive mediators and child outcome: A test of the theoretical model in the Coping Power program. Development and Psychopathology, 14, 945-67McFall, R. M. 1982 A review and

- reformulation of the concept of social skills. *Behavioral Assessment*, 4, 1-35.
- Lorenz, K. (1963). *Das sogenannte Böse: Zur Naturgeschichte der Aggression*. Munchen: Deutcher Taschenbuch Verlag. (ローレンツ, K. (1985). 日高敏隆・久保和彦(訳編)(1985). 攻撃:悪の自然誌 みすず書房)
- Lösel, F., Bliesener, T., & Bender, D. (2007). Social information processing, experiences of aggression in social contexts, and aggressive behavior in adolescents. *Criminal Justice and Behavior*, 34(3), 330-347.
- Malamuth, N. M., Linz, D., Heavey, C. L., Barnes, G., & Acker, M. (1995). Using the confluence model of sexual aggression to predict men's conflict with women: A 10-year follow-up study. *Journal of personality and social psychology*, 69(2), 353.
- Marcus-Newhall, A., Pedersen, W. C., Carlson, M., & Miller, N. (2000). Displaced aggression is alive and well: A meta-analytic review. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 670-689.
- 松田茂樹 (2019). ヴィネット調査を用いた子育て支援策が出生行動に与える効果の研究. *人口学研究*, 55, 41-53.
- Matthews, B., & Minton, J. (2018). Rethinking one of criminology's 'brute facts': The age-crime curve and the crime drop in Scotland. *European journal of criminology*, 15(3), 296-320.
- Mayhew, P. (2012). The case of Australia and New Zealand. In *The international crime drop* (pp. 76-102). Palgrave Macmillan, London.
- McAra, L., & McVie, S. (2018). Transformations in youth crime and justice across Europe. *Juvenile Justice in Europe: Past, Present and Future*.
- McFall, R. M. (1982). A review and reformulation of the concept of social skills. *Behavioral assessment*.
- Meloy, J. R. (2006). Empirical basis and forensic application of affective and predatory violence. *Australian & New Zealand Journal of Psychiatry*, 40(6-7), 539-547.
- Miller, N. E., Mowrer, O. H., Doob, L. W., Dollard, J., & Sears, R. R. (1958). *Frustration-Aggression Hypothesis*.
- Moeller, T. G. (2001). *Youth aggression and violence: A psychological approach*. Routledge.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課(2020)平成 30 年度 児童生徒の問題行動・不登

- 校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について. 最終閲覧 2020.11.7  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2019/10/25/1412082-30.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2019/10/25/1412082-30.pdf).
- Morgan, C., Webb, R. T., Carr, M. J., Kontopantelis, E., Green, J., Chew-Graham, C. A., ... & Ashcroft, D. M. (2017). Incidence, clinical management, and mortality risk following self harm among children and adolescents: cohort study in primary care. *bmj*, 359, j4351.
- 村井典子 (2015). カナダの学校におけるいじめ防止対策. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊, 2(22).
- 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)(2016)若者の生活に関する調査報告書. 最終閲覧 2020.11.8. <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf/cover.pdf>
- NCHS (2019) Data Brief No. 352, October 2019. 最終閲覧 2020.3.30  
<https://www.cdc.gov/nchs/data/databriefs/db352-h.pdf>
- Nesdale, D., Milliner, E., Duffy, A., & Griffiths, J. A. (2009). Group membership, group norms, empathy, and young children's intentions to aggress. *Aggressive Behavior: Official Journal of the International Society for Research on Aggression*, 35(3), 244-258.
- Newwell, M. (2018). Cyberbullying - A Global Advisor Survey. Ipsos Public Affairs. 最終閲覧 2020.4.26.  
[https://www.ipsos.com/sites/default/files/ct/news/documents/2018-06/cyberbullying\\_june2018.pdf](https://www.ipsos.com/sites/default/files/ct/news/documents/2018-06/cyberbullying_june2018.pdf)
- Newell, A , & Simon, H. (1972). Human problem solving. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-hall.
- Nomellini, S., & Katz, R.C. (1983). Effects of anger control training on abusive parents. *Cognitive Therapy and Research*, 7, 57-67
- Novaco, R. W. (2011). Anger dysregulation: Driver of violent offending. *The Journal of Forensic Psychiatry & Psychology*, 22, 650-668.
- Office for National Statics. (2019) Suicides in the UK: 2018 registrations.最終閲覧 2020.11.7.  
<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/birthsdeathsandmarriages/deaths/bulletins/suicidesintheunitedkingdom/2018registrations>
- 大淵憲一 (2011). 新版 人を傷つける心: 攻撃性の社会心理学 サイエンス社.

- 大淵憲一 (2020). 攻撃行動と暴力. 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩  
vol.59(2020 年版) 金子書房
- 岡田顕宏, & 阿部純一. (2000). 心理学における感情研究の歴史と動向 (< 特集> 感情の  
モデルと工学的応用の動向). 日本ファジィ学会誌, 12(6), 730-740.
- Panak, W. F., & Garber, J. (1992). Role of aggression, rejection, and attributions in  
the prediction of depression in children. *Development and psychopathology*,  
4(1), 145-165.
- Patterson, G. R. (1982). *Coercive family process* (Vol. 3). Castalia Publishing  
Company.
- Patterson, G. R. (2002). The early development of coercive family process. In J. B.  
Reid, G. R. Patterson, & J. Snyder (Eds.), *Antisocial behavior in children and  
adolescents: A developmental analysis and model for intervention* (p. 25–44).  
American Psychological Association.
- Patterson, G. R., Reid, J. B., & Dishion, T. J. (1998). *Antisocial boys*.
- Paulhus, D. L., (1991). Measurement and control of response bias. In J. P.,  
Payne, J., Brown, R., & Broadhurst, R. (2018). Where have all the young offenders  
gone? Examining changes in offending between two NSW birth cohorts. *Trends  
and Issues in Crime and Criminal Justice*, (553).
- Perry, D. G., Perry, L. C., & Kennedy, E. (1992). Conflict and the development of  
antisocial behavior.
- Perugini M, Bagozzi RP. (2001). The role of desires and anticipated emotions in  
goal-directed behaviours: Broadening and deepening the theory of planned  
behaviour. *Br J Soc Psychol* 40:79–98. Perugini M, Bagozzi RP. 2004a. The  
distinction between desires and intentions. *Eur J Soc Psychol* 34:69–84.
- Perugini M, Bagozzi RP. (2004)a. An alternative view of pre-volitional processes in  
decision making: Conceptual issues and empirical evidence. In: Haddock G,  
Maio GR (eds). *Contemporary Perspectives on the Psychology of Attitudes: The  
Cardiff Symposium*. Hove, UK: Psychology Press, pp 169–201.
- Perugini, M., & Bagozzi, R. P. (2004)b. The distinction between desires and  
intentions. *European Journal of Social Psychology*, 34(1), 69-84.
- Perugini M, & Conner M. (2000). Predicting and understanding behavioral  
volitions: The interplay between goals and behaviors. *Eur J Soc Psychol*  
30:705–731.

- Pew Research Center, February (2019). "Most U.S. Teens See Anxiety and Depression as a Major Problem Among Their Peers"
- Polman, H., de Castro, B. O., Koops, W., van Bortel, H. W., & Merk, W. W. (2007). A meta-analysis of the distinction between reactive and proactive aggression in children and adolescents. *Journal of abnormal child psychology*, 35(4), 522-535.
- Posner, M. I., Snyder, C. R. R., & Solso, R. L. (1975). Theories in information processing.
- Poulin, F., & Boivin, M. (1999). Proactive and reactive aggression and boys' friendship quality in mainstream classrooms. *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, 7(3), 168-177.
- Price, J. M., & Dodge, K. A. (1989). Reactive and proactive aggression in childhood: Relations to peer status and social context dimensions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 17(4), 455-471.
- Perry, D. G., Perry, L. C., & Rasmussen, P. (1986). Cognitive social learning mediators of aggression. *Child development*, 700-711.
- Raine, A., Dodge, K., Loeber, R., Gatzke-Kopp, L., Lynam, D., Reynolds, C., ... & Liu, J. (2006). The reactive-proactive aggression questionnaire: Differential correlates of reactive and proactive aggression in adolescent boys. *Aggressive Behavior: Official Journal of the International Society for Research on Aggression*, 32(2), 159-171.
- Richetin, J., Perugini, M., Adjali, I., & Hurling, R. (2008). Comparing leading theoretical models of behavioral predictions and post-behavior evaluations. *Psychology & Marketing*, 25(12), 1131-1150.
- Richetin, J., Richardson, D. S., & Boykin, D. M. (2011). Role of prevolitional processes in aggressive behavior: The indirect influence of goal. *Aggressive behavior*, 37(1), 36-47.
- Roberto, A. J., Meyer, G., Boster, F. J., & Roberto, H. L. (2003). Adolescents' decisions about verbal and physical aggression: An application of the theory of reasoned action. *Human Communication Research*, 29(1), 135-147.
- Roberts, S. J., Glod, C. A., Kim, R., & Houchell, J. (2010). Relationships between aggression, depression, and alcohol, tobacco: Implications for healthcare providers in student health. *Journal of the American Academy of Nurse Practitioners*, 22(7), 369-375.

- Robinson, P. R. Shaver, & L. S. Wrightsman(Eds.), Measure of personality and social psychological attitudes. New York: Academic Press. 17-59.
- Rothbart, M. K., & Derryberry, D. (1981). Theoretical issues in temperament. In Developmental disabilities (pp. 383-400). Springer, Dordrecht.
- Rubin, K. H., Coplan, R. J., Fox, N. A., & Calkins, S. D. (1995). Emotionality, emotion regulation, and preschoolers' social adaptation. *Development and Psychopathology*, 7(1), 49-62.
- Rule, B. G., & Nesdale, A. R. (1974). Differing functions of aggression. *Journal of Personality*.
- 斎藤環. (1998). 社会的ひきこもり: 終わらない思春期 (Vol. 65). PHP 研究所.
- Schwartz, D., Dodge, K. A., Coie, J. D., Hubbard, J. A., Cillessen, A. H., Lemerise, E. A., & Bateman, H. (1998). Social-cognitive and behavioral correlates of aggression and victimization in boys' play groups. *Journal of abnormal child psychology*, 26(6), 431-440.
- Shields, A., & Cicchetti, D. (1998). Reactive aggression among maltreated children: The contributions of attention and emotion dysregulation. *Journal of clinical child psychology*, 27(4), 381-395.
- Sidebottom, A., Kuo, T., Mori, T., Li, J., & Farrell, G. (2018). The East Asian crime drop? *Crime Science*, 7(1), 6.
- Spielberger, C.D., Sydeman, S.J., Owen, A.E., Marsh, B.J. (1999). Measuring Anxiety and Anger With the State-Trait Anxiety Inventory (STAI) and the State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI) The use of psychological testing for treatment planning and outcomes assessment, 2nd ed. Maruish, Mark E. (Ed). (pp.993- 1021).
- Stanford, M. S., Houston, R. J., Villemarette-Pittman, N. R., & Greve, K. W. (2003). Premeditated aggression: Clinical assessment and cognitive psychophysiology. *Personality and individual differences*, 34(5), 773-781.
- Swanson, J. W., Swartz, M. S., Van Dorn, R. A., Volavka, J., Monahan, J., Stroup, T. S., ... & Lieberman, J. A. (2008). Comparison of antipsychotic medication effects on reducing violence in people with schizophrenia. *The British journal of psychiatry*, 193(1), 37-43.
- 高橋英児 (2015). ドイツの暴力予防教育に関する動向研究(1)—ドイツにおける子ども・若者の暴力の現状と暴力予防教育の研究・実践動向を中心に—,教育実践学研

- 究 20, 143-158.
- 竹島正 (2011). 自殺対策における自殺とは何か. 精神神経学雑誌, 129, 120-123.
- 瀧澤純・山下利之 (2013). 他者の心の推測における自己中心性バイアスに及ぼす特権情報の考慮の効果. 認知科学, 20(3), 343-352.
- 谷伊織 (2008). バランス型社会的望ましさ尺度日本語版(BIDR-J)の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究 17, 18-28.
- Taylor, S. A. (2007). The addition of anticipated regret to attitudinally based, goal-directed models of information search behaviours under conditions of uncertainty and risk.
- Taylor, S. D., Bagozzi, R. P., & Gaither, C. A. (2001). Gender differences in the self-regulation of hypertension. Journal of Behavioral Medicine, 24, 469-487. British Journal of Social Psychology, 46, 739-768.
- Tedeschi, J. T., & Felson, R. B. (1994). Violence, aggression, and coercive actions. American Psychological Association.
- Tedeschi, J. T., & Norman, N. (1985). Social power, self-presentation, and the self. The self and social life, 293, 322.
- Tomoda, A., Mori, K., Kimura, M., Takahashi, T., & Kitamura, T. (2000). One-year prevalence and incidence of depression among first-year university students in Japan: A preliminary study. Psychiatry and Clinical Neurosciences, 54(5), 583-588.
- Topalli, V. (2005). Criminal expertise and offender decision-making: An experimental analysis of how offenders and non-offenders differentially perceive social stimuli. The British Journal of Criminology, 45(3), 269-295.
- 戸田まり・渡辺恭子 (2012). あいまいな攻撃に対する解釈と対処行動の発達: 社会的情報処理の視点から. 発達心理学研究, 23(2), 214-223.
- 上野真弓・丹野義彦・石垣琢磨 (2009). 大学生の持つ抑うつ傾向と攻撃性との関連. パーソナリティ研究, 18(1), 71-73.
- Vitaro, F., Brendgen, M., & Barker, E. D. (2006). Subtypes of aggressive behaviors: A developmental perspective. International Journal of Behavioral Development, 30(1), 12-19.
- Vitaro, F., Gendreau, P. L., Tremblay, R. E., & Oligny, P. (1998). Reactive and proactive aggression differentially predict later conduct problems. Journal of

- Child Psychology and Psychiatry, 39(3), 377-385.
- Walters, G. D., Frederick, A. A., & Schlauch, C. (2007). Postdicting arrests for proactive and reactive aggression with the PICTS Proactive and Reactive composite scales. *Journal of interpersonal violence*, 22(11), 1415-1430.
- 渡部麻美, 松井豊, 高塚雄介. (2010). ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討. *心理学研究*, 81(5), 478-484.
- Waschbusch, D. A., & Willoughby, M. T. (1998). Criterion validity and the utility of reactive and proactive aggression: Comparisons to attention deficit hyperactivity disorder, oppositional defiant disorder, conduct disorder, and other measures of functioning. *Journal of Clinical Child Psychology*, 27(4), 396-405.
- Weatherburn, D., & Holmes, J. (2013). The great property crime drop: A regional analysis. Unpublished report. NSW Bureau of Crime Statistics and Research.
- Weinshenker, N. J., & Siegel, A. (2002). Bimodal classification of aggression: Affective defense and predatory attack. *Aggression and Violent Behavior*, 7(3), 237-250.
- 山崎理恵, 村松公美子. (2014). 大学生における抑うつ傾向について: 内的作業モデルの視点からの検討. *新潟青陵大学大学院臨床心理学研究*, 7, 55-62.
- Zillmann, D. (1979). *Hostility and aggression*. Erlbaum Hillsdale, NJ



## 謝辞

筆者が本大学院の学生となったのは、2011 年であった。それから 10 年の時をかけて、ようやく本論文を完成することができた。その間、多くの方々に、多大なご指導、ご支援、ご協力を賜ってきた。仕事をしながらの論文執筆は、正直大変と感ずることも多かったが、現在、振り返ってみると、それはとても充実して楽しいものであったと思う。

本論文作成へ向けての研究の過程において、大淵憲一先生には、多くのご指導と温かい励ましを頂きましたことに深く感謝申し上げます。筆者の自主性を尊重していただきつつ、必要なときは的確かつ明晰な方向づけを頂くことで、自分なりに研究というものを少しは理解できたように思います。先生から学んだ研究者としてのあり方を忘れずに、今後も精進していきたいと考えております。改めて、御礼申し上げます。

研究室の阿部恒之先生には、論文のまとめに際して、貴重なご助言をいただくとともに、本論文の細部にわたりご指導を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。また、坂井信之先生、辻本昌弘先生、荒井崇史先生、河池庸介先生からは、貴重なご指導と助言をいただきました。心から感謝申し上げます。

本研究におきましては、尚絅学院大学の学生、教員の皆様にご支援、ご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

2011 年 12 月 27 日

川端 壮康